

例 言

1. 本書は、埼玉県入間郡大井町内に所在する遺跡群の1998年度の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および整理作業は、国庫（3,650,000円）、県費（1,825,000円）の補助金の交付を受け、平成10年4月3日から平成11年3月31日まで実施した。
3. 調査組織

調 査 主 体 者 大井町教育委員会	文化財保護係長	坪田幹男
担 当 課 生涯学習課文化財保護係	文化財保護係・庶務	高橋偕子
教 育 長 遠藤正明	文化財保護係・発掘調査担当者	高崎直成・鍋島直久
生涯学習課長 仲野政男	大井町臨時職員・発掘調査補助員	土本医
4. 本書作成にあたっての作業分担は次のとおりである。
 執 筆：縄文土器 今井堯、本文・遺構 高崎直成
 土器・陶磁器実測：青山奈保美、石垣ゆき子、石原聡、高橋けい子、丹治つや子、山口妙子
 石器実測：石原聡、高橋けい子 土器拓影：石垣ゆき子、植田勢津子、高橋けい子、山口妙子
 土器復元：中田藤子 トレース：青山奈保美、小林登喜枝、須藤さち子、表作成：植田勢津子
 図版作成：青山奈保美、石垣ゆき子、須藤さち子、高橋けい子、中田藤子、山口妙子、丹治つや子
 遺構写真：坪田幹男・高崎直成・鍋島直久・土本医 遺物写真：高崎直成
 土器・石器実測の一部を（有）文化財COMに委託した。
 また、整理作業のなかで日本考古学協会の今井堯氏の援助と協力を得た。
5. 各遺跡の調査から報告書刊行にいたるまで下記の諸氏・機関より御指導・ご協力を賜った。（敬称略）
 会田昭明、浅野晴樹、穴澤義功、天ヶ嶋岳、荒井幹夫、市丸靖子、内田賢司、岡田憲治、小澤千恵子、加藤秀之、梶原勝、梶原喜世子、神木繁嘉、國見徹、隈本健介、小出輝雄、駒井和久、桜井信枝、笹森健一、佐藤啓子、島田一郎、高橋京子、田中信、中島宏、塚田政子、原口雅樹、早坂廣人、松本新八郎、松本富雄、水村孝行、柳井章宏、柳沢健司、和田晋治
 埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、東久保土地区画整理組合、大井町立郷土資料館、大井町遺跡調査会、（有）文化財COM。
6. 発掘調査ならびに整理作業参加者は下記の皆様である。記して厚く感謝の意を表したい。
 〈発掘調査参加者〉（敬称略）
 新井和枝、荒井美奈子、飯塚泰子、石原聡、井上晴江、海老原サナエ、大曾根キク子、笠原英子、金子君子、金丸文男、小林こずい、酒井昭、佐久間ひろ子、篠崎忠三、鈴木英子、鈴木エミ子、関田成美、高木千恵子、戸澤竹二、中嶋末子、野岡由紀子、野沢松代、林きぬ子、比嘉洋子、三村美代子、若尾久美子、若林紀美代
 〈整理作業参加者〉（敬称略）
 青山奈保美、石垣ゆき子、石原聡、植田勢津子、小林登喜江、須藤さち子、高橋けい子、丹治つや子、中田藤子、山口妙子

凡 例

1. 本書の遺構・遺物挿図の指示は以下のとおりである。
 - (1) 縮尺は原則として
 遺構配置図 1:300 遺構平面図・遺物出土状況図 1:60、1:30 炉などの詳細図 1:30
 土器実測図 1:4 土器拓影図 1:3 石器実測図 1:3、2:3 銭 1:1
 - (2) 遺構断面図の水糸高は海拔高を示す。明記していないのは同図版中の前遺構の海拔高に同じ。
 - (3) 遺構図における screen-tone の指示、遺物出土状況のドットの指示。
 攪乱  地山（ローム）  焼土 
 土器 ● 石器 ★ 黒曜石・チャート ▲ 礫 ○
 - (4) 土器実測図における screen-tone の指示。
 地文縄文  撚糸文 
 - (5) 土器断面図は、「」が繊維含有、●が雲母粒を含有する縄文土器を表わしている。
2. 住居跡名は、遺跡内の通し番号にしている。
3. 本報告にかかる出土品及び記録図面・写真等は一括して大井町教育委員会生涯学習課に保管してある。

第2表 1998年度埋蔵文化財調査一覧表

	遺 跡 名	申 請 地	面積 (㎡)	原 因	試 掘 期 間	調 査 措 置
1	江川南遺跡第9地点	東久保1街区2・3画地	875	共同住宅	10.10.9	試掘
2	江川東遺跡第5地点	東久保1-155-6	164	土地分譲	10.6.1～10.6.9	試掘
3	亀久保堀跡遺跡第7地点	東久保32街区7画地	165	砂利敷駐車場	10.11.16	試掘
4	亀久保堀跡遺跡第11地点	東久保2街区12画地	151	個人住宅	10.4.8～10.4.22	試掘
5	亀久保堀跡遺跡第12地点	東久保258-46	123	個人住宅	10.5.8～10.5.21	試掘
6	亀久保堀跡遺跡第13地点	東久保5街区11・12画地	107	個人住宅	10.5.8～10.5.21	試掘
7	亀久保堀跡遺跡第14地点	東久保2街区11画地	132	個人住宅	10.4.8～10.4.22	試掘
8	亀久保堀跡遺跡第15地点	東久保7-2街区4・5画地	111	個人住宅	10.5.8～10.5.21	試掘
9	亀久保堀跡遺跡第16地点	東久保5街区18・19画地	117	個人住宅	10.6.1	試掘
10	亀久保堀跡遺跡第18地点	東久保7-2街区1・2・7～9画地	908	個人住宅4軒分	10.11.5～10.11.30	試掘
11	亀久保堀跡遺跡第19地点	東久保4街区11・12画地	99	個人住宅	10.11.5～10.11.10	試掘
12	亀久保堀跡遺跡第20地点	東久保8街区5画地	185	個人住宅	10.11.24	試掘
13	東久保西遺跡第4地点	東久保10街区1画地	298	砂利敷駐車場	10.12.2	試掘
14	東久保西遺跡第5地点	東久保9街区9画地	194	個人住宅	10.12.14	試掘
15	東久保西遺跡第6地点	東久保12街区1・2・10画地	1,959	店舗	11.2.9～11.2.15 (11.2.24～11.3.1)	試掘後遺跡調査会で本調査
16	東中学校西遺跡第13地点	東久保2街区12画地	218	専用住宅	10.6.9～10.6.11	試掘
17	東中学校西遺跡第14地点	東久保44街区11・20・26画地	1,231	共同住宅	10.6.23～10.6.26	試掘
18	東中学校西遺跡第15地点	東久保45街区1・4・6画地	2,649	店舗専用駐車場	10.8.24	試掘
19	東中学校西遺跡第16地点	東久保42街区6画地	1,347	店舗専用駐車場	10.8.19～10.8.31	試掘
20	東中学校西遺跡第17地点	東久保38街区7・8画地	1,131	店舗専用駐車場	10.8.24	試掘
21	東中学校西遺跡第18地点	亀久保319-1	850	テニスコート	11.2.15～11.2.17	試掘
22	東中学校西遺跡第19地点	東久保52街区8画地	944	アスファルト駐車場	11.3.17	試掘
23	東久保南遺跡第14地点	東久保63街区2画地	333	個人住宅	10.6.25～10.7.1	試掘
24	東久保南遺跡第15地点	東久保60街区6画地	143	個人住宅	10.7.8～10.7.9	試掘
25	東久保南遺跡第16地点	東久保59街区3画地	541	共同住宅	10.12.14	試掘
26	東久保南遺跡第17地点	東久保46街区9・10・17画地	1,264	自動車ショールーム	11.2.2～11.2.3	試掘
27	西ノ原遺跡第110地点	苗間146-2	385	郵便局	10.4.20～10.5.28	試掘
28	西ノ原遺跡第111地点	大井苗間23街区9画地	354	個人住宅	10.10.23～10.10.27	試掘
29	西ノ原遺跡第112地点	大井苗間23街区9画地	144	個人住宅	11.2.9	試掘
30	中沢前遺跡第15地点	大井苗間34街区1画地	109	個人住宅	10.7.13	試掘
31	中沢前遺跡第16地点	大井苗間30街区6.7画地	482	共同住宅	11.3.12～11.3.15	試掘
32	中沢前遺跡第17地点	大井苗間32街区2画地	165	個人住宅	11.3.12～11.3.15	試掘
33	神明後遺跡第7地点	苗間260	1,460	個人住宅	10.6.1～10.6.2	試掘
34	神明後遺跡第8地点	苗間235-1	458	共同住宅	10.7.21～10.7.24	試掘
35	神明後遺跡第9地点	苗間310-1	219	共同住宅兼自家用車庫	10.9.1～10.9.11 (10.9.14～10.10.15)	教育委員会で 本調査

X 神明後遺跡の調査

1 遺跡の立地と環境

神明後遺跡は、東武東上線ふじみ野駅の東約300m、さかい川の谷頭部から約1,500m下った右岸に位置し、標高12～16m、現谷底との比高差は1.5mを測る。さかい川は本遺跡付近から崖を形成し始め、本遺跡をのせる南側台地は急斜面、対岸の北側は緩やかな斜面を形成している。

周辺の遺跡は、上流に中沢前遺跡、下流に浄禅寺跡遺跡・苗間東久保遺跡が隣接し、さかい川の対岸には富士見市の外記塚遺跡がある。

遺跡周辺は古くからの集落があり、現在でも大きな屋敷地が多く大きな開発もなかったが、ふじみ野駅の開設に伴い今後徐々に再開発が進むと思われる。

本遺跡の最初の調査は1987年に町史編纂事業の一環として行われた。その後1993年に新駅へ延びる道路をはじめ、1999年3月現在12ヶ所で試掘調査および発掘調査が行われている。

これまでの調査で縄文時代中期後半～後期前半の住居跡、奈良時代から平安時代の住居跡、中世の建物跡などの遺構を検出した。

2 神明後遺跡第7地点

(1) 調査の概要

調査は個人住宅建設に伴うもので、原因者から「埋蔵文化財事前協議書」が1998年4月22日付けで町教育委員会に提出された。調査区は遺跡の西側に位置するため、申請者と協議の結果、遺構の存在確認のため試掘調査を実施することとした。

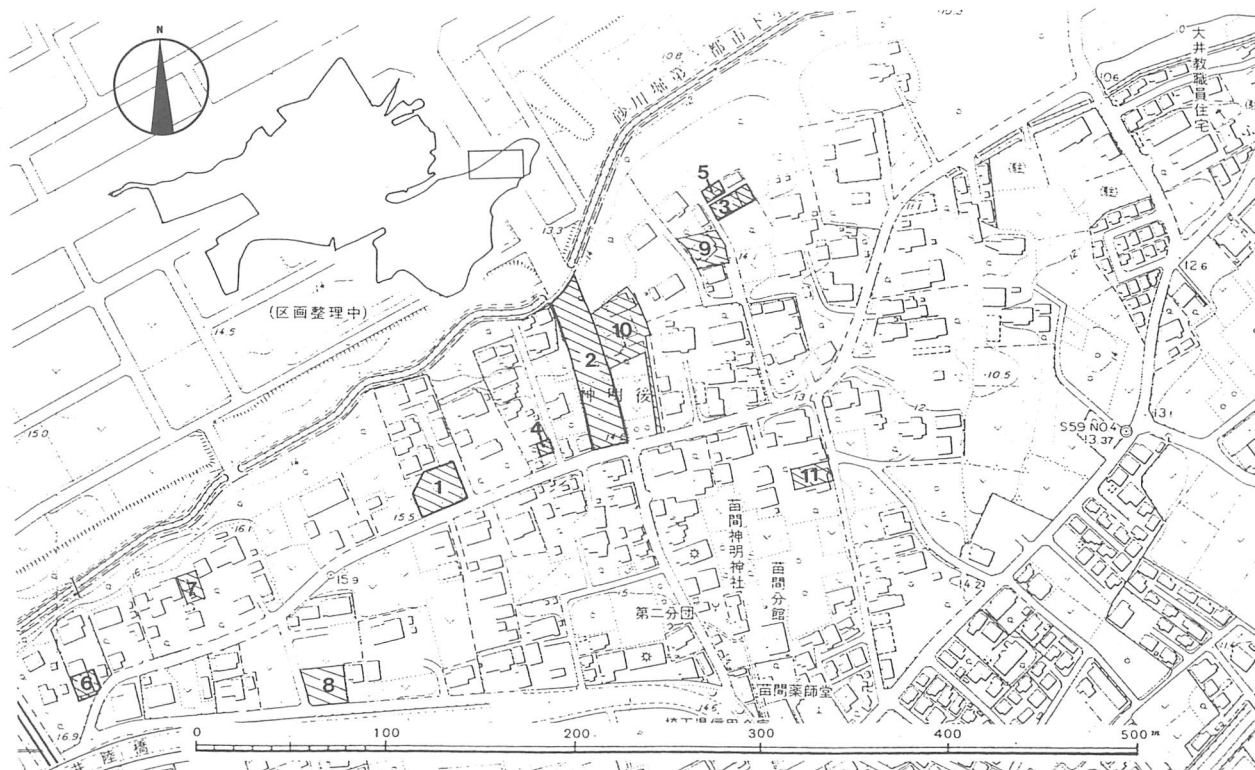
調査区の長軸方向に2×2mのグリッドを6ヶ所設定し、6月1日から人力により表土除去と精査を行った結果、近世の地下室1基を検出し、6月2日に調査を終了した。

(2) 遺構と遺物

【地下室】地下室は4.5×4mの範囲で確認でき、ほぼ円形を呈するが、中段に幅35cmの長方形の張り出しを持つ。確認面からの深さは197cmを測る。

【地下室出土遺物】(第49図)

1～10は縄文土器。1～3は直接接合しないが同一個体で、1は筒形深鉢の口縁部。地文は縦回転によるLR縄文で、密な部分と間隔をあけた部分を含む施文。胎土にはチャート粗砂粒。白色軟質物質・輝石・角閃



第48図 神明後遺跡の地形と調査区 (1/4,000)

は2本の波状沈線をもつ頸部片。14は無文の胴部片。

15は、口縁下に幅広押引文を入れ、16は口縁の区画隆帯裾に一部にかけて連続押引文を入れる。17は磨滅著しいが押引文が横位に施文される。18は片側を深くした連続幅廣押引文で一見爪形を呈する。19は破損著しいが隆帯で楕円形区画をつくる。20は無文の口縁片。

10～14は胎土に金雲母を含み阿玉台Ⅱ式で、15～20は勝坂Ⅱ式と言える。

8地点出土土器は、集石・土坑・遺構外ともに阿玉台Ⅱ式・勝坂Ⅱ式を主体としている特徴がある。

21は砂岩製の打製石斧。長さ11.9×幅5.6×厚さ3.1cm。重さ206.4g。

第20表 神明後遺跡第8地点柵列ピット一覧表 単位(cm)

No.	確認面径	底径	深さ	備考
1	54×43	18×18	52	円形
2	40×(11)	—	23	未掘
3	24×14	7×6	30	楕円形
4	—	10×5	47	楕円形
5	—	9×5	43	楕円形
6	35×33	14×12	95	円形
7	30×22	10×9	12	隅丸方形
8	36×28	21×20	13	楕円形
9	46×34	28×22	16	楕円形
10	46×24	25×17	33	楕円形
11	36×35	14×11	89	楕円形
12	53×40	13×10	72	隅丸長方形
13	50×35	20×11	60	楕円形
14	41×34	9×9	43	円形
15	44×35	15×12	61	楕円形
16	32×30	22×20	20	円形
17	45×28	18×14	55	楕円形
18	39×27	18×8	79	楕円形
19	43×41	10×7	78	円形
20	45×35	15×10	45	円形
21	33×29	16×12	36	円形
22	20×20	8×7	51	円形
23	36×30	13×10	89	隅丸方形
24	42×33	18×17	36	楕円形
25	38×31	15×10	54	円形
26	64×37	10×9	46	楕円形
27	49×43	29×17	91	円形
28	37×29	19×18	75	円形
29	37×33	11×8	47	隅丸方形
30	41×37	17×8	41	楕円形
31	32×24	15×5	11	楕円形
32	44×(21)	15×(13)	33	未掘
33	53×21	9×7	22	楕円形
34	50×28	14×5	78	隅丸長方形
35	30×(24)	11×10	51	隅丸方形
36	55×32	20×20	59	楕円形
37	30×30	11×(10)	68	楕円形
38	46×40	10×5	48	円形
39	37×34	12×12	36	円形
40	40×39	22×20	25	円形

4 神明後遺跡第9地点

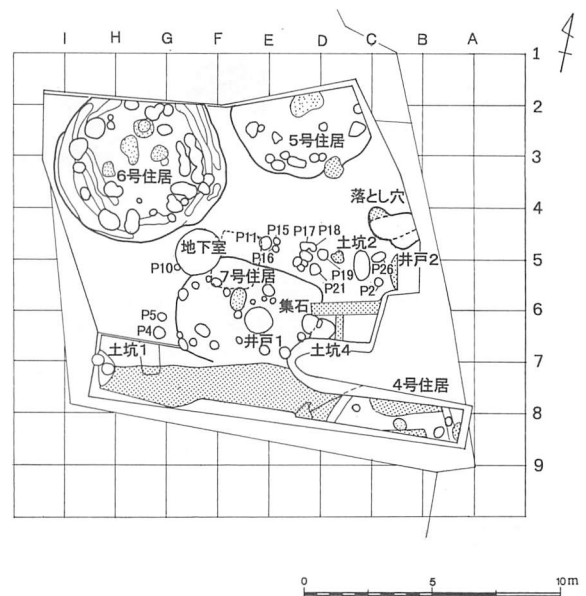
(1) 調査の概要

調査は共同住宅兼自家用車庫建設に伴うもので、原因者より1998年8月3日付けで、「埋蔵文化財事前協議書」が町教育委員会に提出された。申請地は遺跡範囲の東側に位置し、過去の調査では本地点の北側から加曽利EⅡ期の住居跡2軒とEⅣ期の住居跡を1軒検出しており、本地点も縄文時代の集落内にあると思われる。そのため申請者と協議の結果、遺構の存在を確認するため試掘調査を実施した。

試掘調査は9月1日から幅約2mのトレンチを3本設定し、重機による表土除去の後、人力による表面精査を行った結果、トレンチのほぼ全面で遺構と遺物を確認した。申請者と再協議の結果、自家用車庫分については個人住宅として町負担、共同住宅分については原因者負担で本調査を実施することとし、9月14日付けで申請者と契約を締結した。

本調査は同年9月14日から10月15日まで、大井町教育委員会生涯学習課を事務局とする大井町遺跡調査会が行った。土置き場確保のため調査区を南北で反転した。重機による表土除去の後、調査区域内に2m方眼のグリッドを任意に設定し、杭を4m間隔で打った後人力により調査した。

調査の結果、縄文時代の住居4軒、集石1基、落とし穴1基、土坑2基、近世の地下室1基、井戸2基、土坑1基を検出した。



第54図 神明後遺跡第9地点遺構配置図 (1/300)

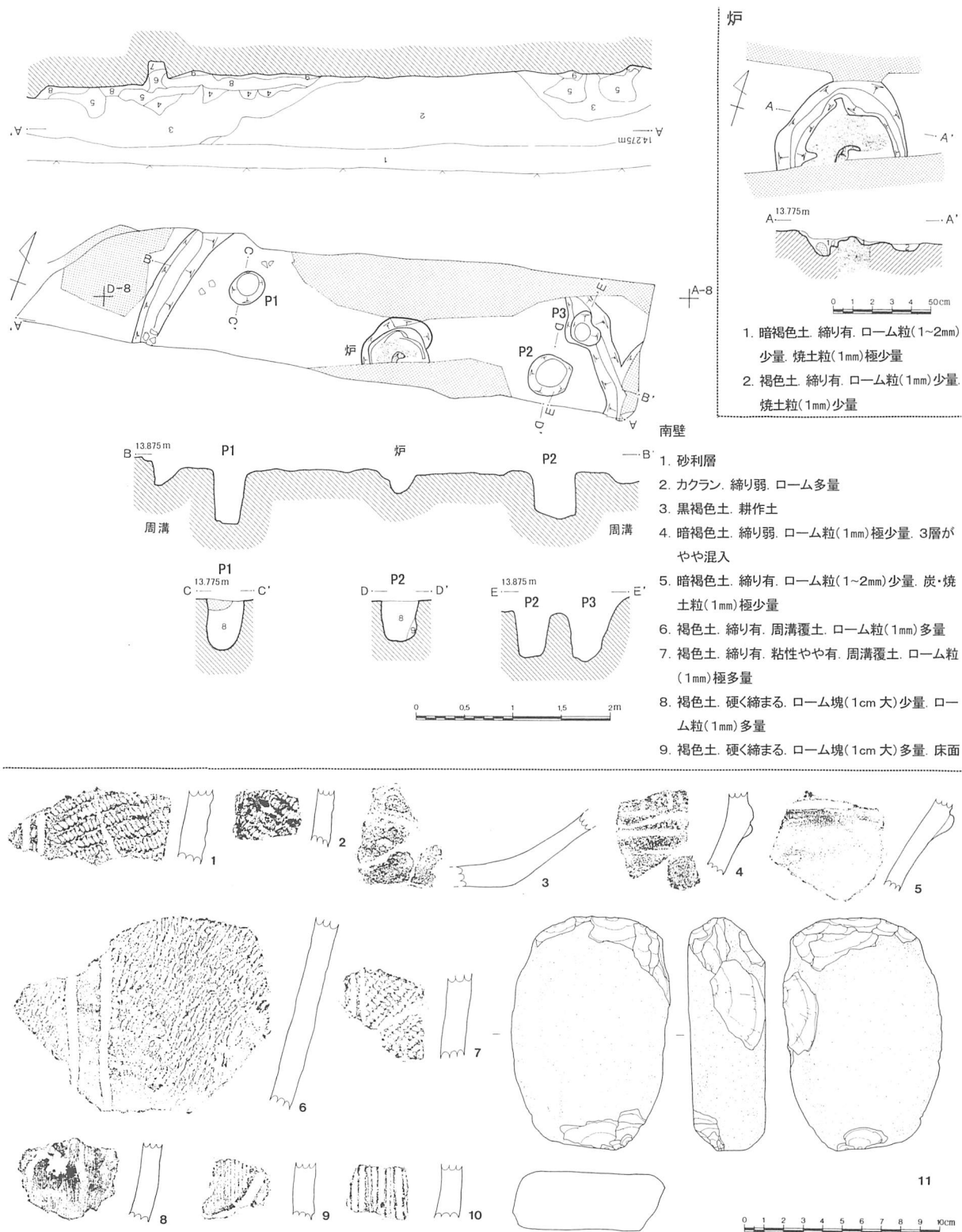
(2) 遺構と遺物

① 4号住居跡

【位置】調査区の南東部、さかい川の南 65m に位置する。2m 西に 7号住居跡、8m 北西に 5号住居跡がある。

【形状】床面にまで達する深い攪乱を受けて遺存状態は悪いが、周溝、柱穴、炉が残っていた。南側の土層

では周溝の外側 1.2m で壁の立ち上がりが確認でき、周溝を埋めて住居を拡張している。南側半分が調査区域外、北側も攪乱を受けているため形状ははっきりしないが、円形を呈していると思われる。規模は検出した周溝部分の最大径で 5.09m を測り、西側の拡張部分を含めると 6.25m を測る。周溝は上幅 30cm・下幅 14cm、



第 55 図 神明後遺跡 4号住居跡 (1/60)・炉 (1/30)・出土遺物 (1/3)

深さ22cm、断面形態は「□」状を呈する。

【炉】主柱穴の中央に位置する。南側は攪乱を受ける。検出部分の東西方向の幅は67cm、深さ16cm。炉中央は径46cmの範囲がレンガ状に焼けて赤化している。赤化範囲の外側は幅7～20cm・深さ7～22cmの溝がめぐる。石囲い炉の石を抜き取った跡の可能性もある。

【柱穴】P1・2は主柱穴、P3は周溝部のピット。

第21表 神明後遺跡4号住居跡ピット一覧表 単位(cm)

No.	確認面径	底径	深さ	備考
1	18×17	12×11	55	円形
2	24×21	17×13	48	円形
3	19×16	9×9	51	円形

【遺物出土状況】覆土が僅かに残る西側で土器破片と石器を検出した。

【出土遺物】（第55図1～11）

1～3は炉内出土の土器片である。1はLR縄文を地文とし、2本の沈線間を磨消して直下懸垂文をつくる。2はRL縄文を地文とし、僅かに懸垂文の痕跡が残る。3は浅鉢の底部片。4～10は住居内覆土出土の破片で無文細片5を割愛した。4と5は口縁部文様帯最下部から頸部無文帯にかかる部分。6は撚糸を不規則に巻付けて浅く回転施文したものを地文とし、2本の沈線間を広く磨消して直下懸垂文とする。7はLR縄文を地文とし磨消懸垂文をもつ。8は無文の胴下部片。9は地文条線で、沈線による連弧文を描く。10は櫛状沈線の地文のみの小片。

11はチャート製の打製石斧。長さ11.3×幅8.1×厚さ4.0cm、重さ598.5g。

【時期】住居の時期は、攪乱が著しく、炉体土器や埋甕などの埋設土器もなく、比定は困難である。3・4の加曽利EI新期の遺物を含むが、炉内出土の1・2から加曽利EII期としてよいであろう。

②5号住居跡

【位置】調査区の南東部、さかい川の南55mに位置する。0.6m西に6号住居跡、3.5m南に7号住居跡、約8m南東に5号住居跡がある。

【形状】北側半分と東側が調査区域外のため形状ははっきりしないが、円形を呈していると思われる。規模は検出した部分の最大径で5.65mを測り、確認面から床面までの深さは33cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。床面は平坦。

住居の覆土内に硬化面と焼土塊が存在する。硬化面

は7～10層で、床面から10～25cm上まで非常に硬く埋まっている。5・6層は焼土で範囲は192×110cm、厚さ19cm。中心部は非常に硬く焼けている。住居を埋めた状態で床面とし、炉を構築した跡と思われる。

【炉】北側は調査区域外。炉跡が2ヶ所連なる。炉1の赤化範囲は不整形で65×50cm、深さ16cm。炉2の赤化範囲は円形で48×43cm、深さ10cm。炉の掘り込みは125×80cmで平面形態は瓢箪型。土層の観察から炉1の方が新しい。

【柱穴】P2・8・9が主柱穴。主柱穴間の距離はP9・P2間が230cm、P2・P8間が295cmある。

第22表 神明後遺跡5号住居跡ピット一覧表 単位(cm)

No.	確認面径	底径	深さ	備考
1	52×(32)	38×(28)	10	隅丸三角
2	34×34	14×12	73	円形 主柱穴
3	26×24	6×6	31	隅丸方形
4	30×30	22×18	14	隅丸三角
5	50×34	14×4	33	不整形
6	28×14	14×6	15	円形
7	46×36	20×8	19	楕円形
8	40×22	6×6	82	楕円形 主柱穴
9	32×(22)	16×(16)	55	円形 主柱穴
10	33×27	16×12	6	円形 近世
11	45×26	37×17	11	楕円形 近世
12	32×36	13×10	21	円形 近世
13	39×26	12×9	11	楕円形 近世
14	59×42	24×21	13	楕円形 近世
15	38×31	24×18	10	隅丸方形 近世

【遺物出土状態】（第57・58図）

5号住居跡は、調査区域外のために住居の北東部は未調査である。埋設土器はなく覆土出土土器のみであり825片が出土したが、完形・準完形に復原し得たものは7個体である。

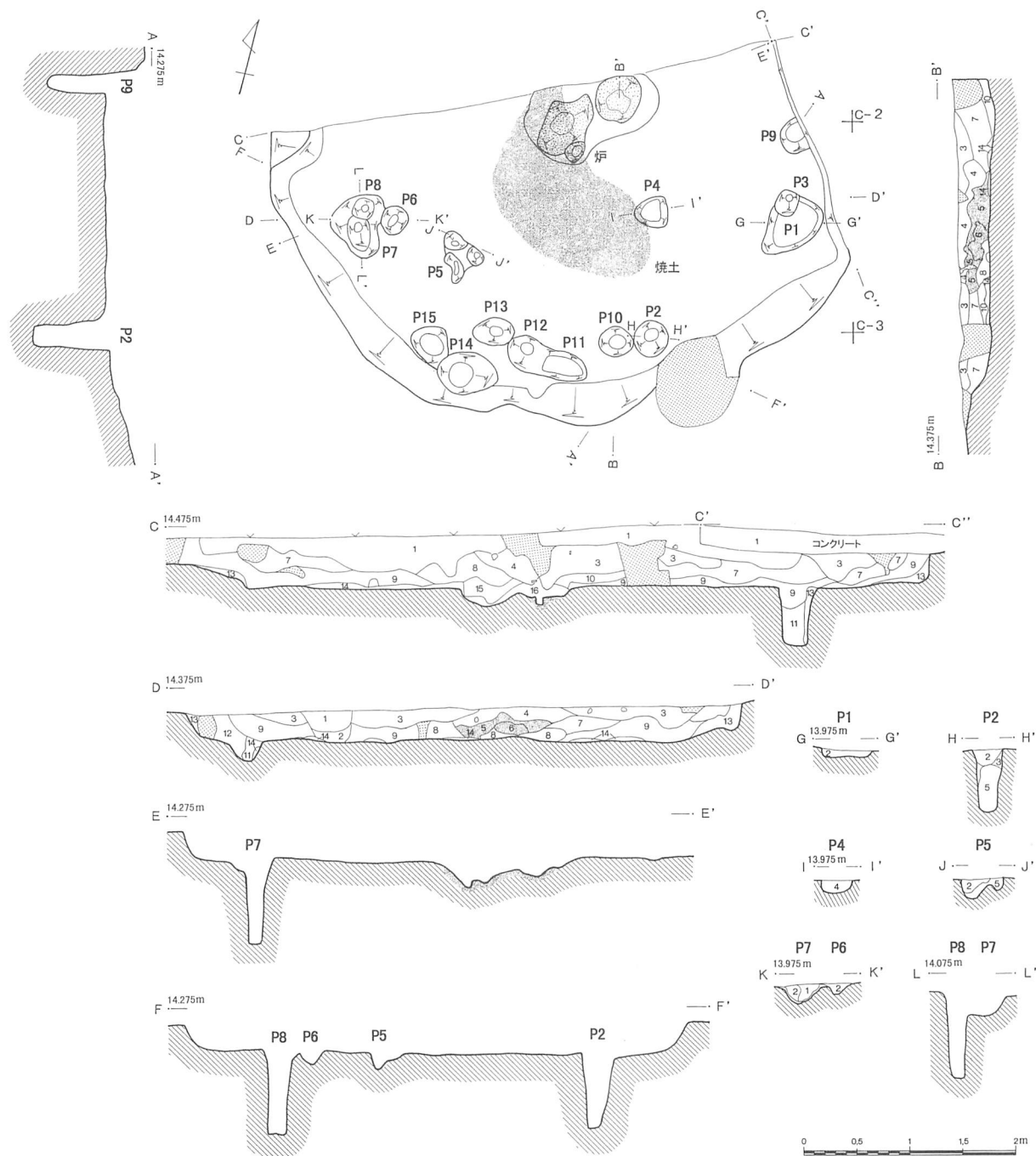
【出土遺物】（第59～67図）

復原土器（第59図）

1は、素口縁の小形深鉢であり、口縁から胴下部までの約55%を遺存する。復原口径20.0cm・現存高17.9cmで文様帯は単一で、地文は細い縦位回転のRL縄文のみである。胎土に黒色砂粒・橙色粒子を多く含み焼成良好で暗～茶褐色を呈する。

2は深鉢の胴下半の1/4を残す。縦位のRL縄文を地文とし、一部に縦位の磨消痕がある。胎土に黒色細砂粒・白色微砂粒を含み、焼成良好で明褐色を呈する。

3は、地文条線のゆるい波状口縁深鉢であり、復原口径24cmである。口縁沿いに2本の沈線をめぐらす波頭部で連弧状となる。胎土に白色細砂粒・橙色粒子



住居ベルト

1. 暗褐色土。締り有。ローム粒(1mm)やや多量。焼土粒(1~2mm)少量。炭粒少量
2. 褐色土。締り有。ローム粒(1mm)多量。炭化粒(1mm)多量。焼土粒極少量
3. 暗褐色土。締り有。ローム粒(1~2mm)少量
4. 暗褐色土。締り有。ローム粒・焼土粒(1~2mm)少量
5. 褐色土。硬く締まる。焼土粒(1~5mm)多量
6. 赤褐色土。非常に硬い。焼土粒(1~5mm)極多量
7. 褐色土。硬く締まる。ローム粒(1~2mm)多量。焼土粒極少量
8. 褐色土。硬く締まる。7層に焼土粒(1~2mm)多量
9. 褐色土。硬く締まる。7層に斑状のソフトローム混入
10. 褐色土。硬く締まる。9層に焼土粒(1mm)少量
11. 褐色土。締り有。ローム粒(1mm)少量

12. 黄褐色土。締り有。ローム粒(1mm)少量。ローム細粒多量
13. 黄褐色土。締り有。ソフトローム主体。壁の崩落土
14. 褐色土+ローム塊。床面
15. 褐色土。締り有。焼土粒多量
16. 赤褐色土。締り無。焼土粒極多量。ソフトローム混入

Pit

1. 黒褐色土。締り有。粘性無。炭化物含む
2. 褐色土。締り弱。粘性無
3. 褐色土。締り弱。粘性無。ソフトローム混入
4. 褐色土。締り弱。粘性無。焼土粒・炭化粒含む
5. 黒褐色土(褐色土+黒色土)。締り無。粘性無

第 56 図 神明後遺跡 5 号住居跡 (1/60)

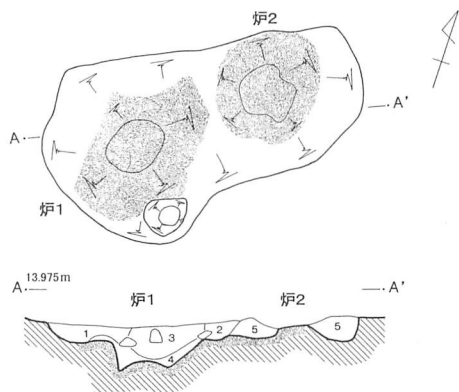
を多く含み、焼成良好で黒褐色を呈する。

4は、2または4の突起をもつ地文条線の小深鉢で復原口径16cmである。口唇下に波状沈線を入れ、その上下を粗く刺突する。胴上部に3本組沈線による連弧文を入れる。胎土には白色微砂粒・橙色粒子を含む。

5は、地文条線の小形深鉢で、口縁から底までの40%を遺存する。復原口径18.8cm・現存高21cmである。口縁下に粗雑に3本の沈線をめぐらせ、体部に2本の沈線を6単位垂下させ、その間を磨消した直下磨消懸垂文を入れる。胎土に白色細粒・白色軟質物質・角閃石粉末を含み焼成良好で黒褐色を呈する。

6は、口縁部文様帯をもつ地文条線の中形深鉢で、

炉



1. 暗茶褐色土. 締り無. 暗褐色土主体. 焼土粒・炭化物・ローム塊(1~2cm)含む
2. 暗茶褐色土. 締り無. 暗褐色土主体. 炭化粒多量. 焼土粒含む
3. 茶褐色土. 締り有. 褐色土主体. 焼土粒やや多量
4. 褐色土+茶褐色土. 締り弱. 焼土粒多量. 炭化粒少量
5. 暗褐色土. 締り有. 褐色土に炭化粒多量. ロームが斑状に混入

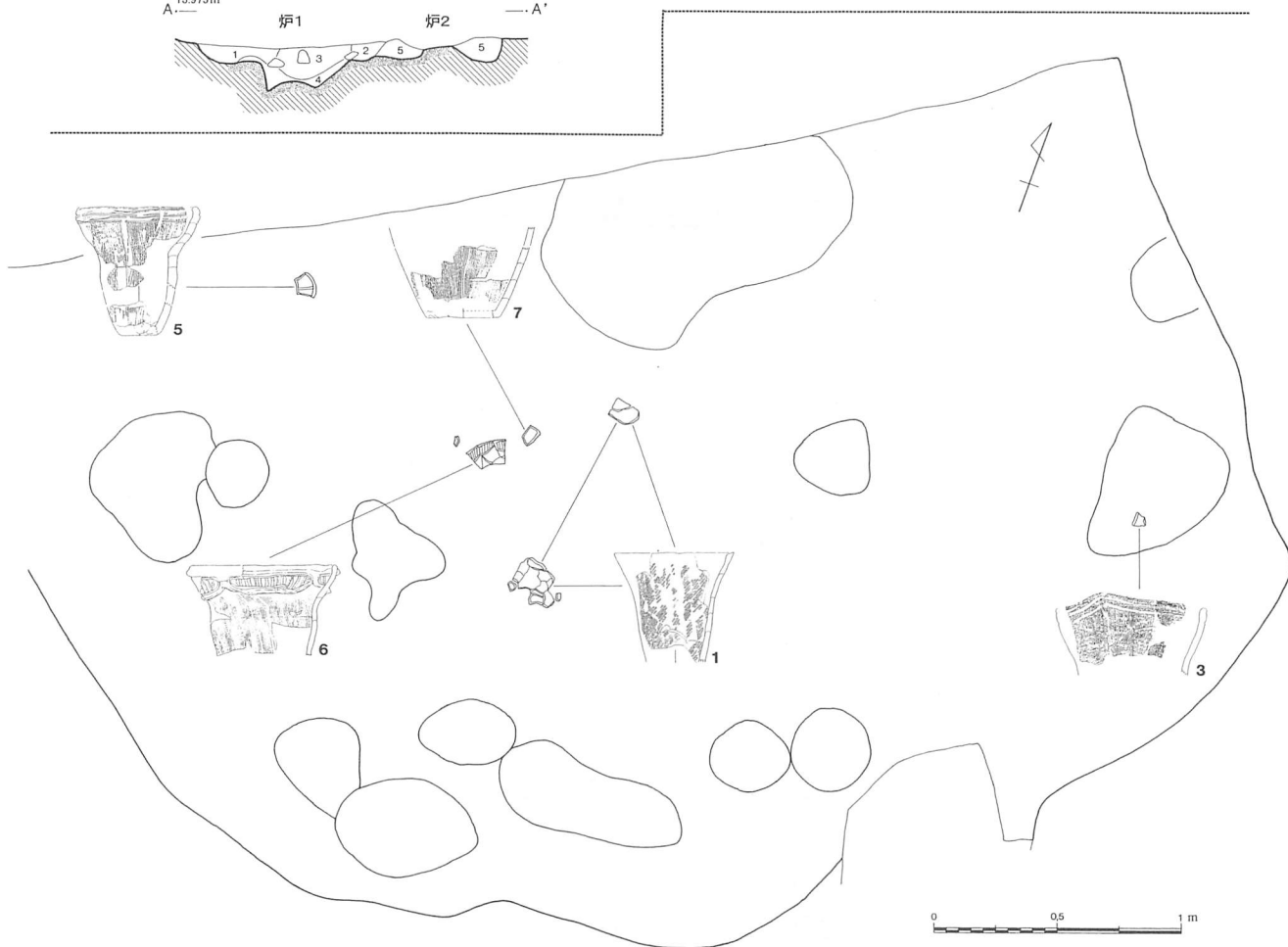
口縁から胴中部までの60%を遺存し、復原口径23.6cmである。口縁部文様帯は、隆帯で長楕円形区画4単位を作り、区画内に縦位の沈線列を入れる。体部は、櫛状工具による地文条線のみであるが、頸部に弧状をつくる。胎土に白色微砂粒・黒色微砂粒・橙色粒子を含み、焼成良好で暗～黒褐色を呈する。

7は、地文条線のみ、大形深鉢の胴下半部の約40%を遺存する。条線が弧状となるのが特色である。1～7は加曾利EⅡ期末からEⅢ期にかけてのもの。

覆土の土器 (第60～65図)

早期の土器 (第60図8)

尖底深鉢の口縁から体上部片で、やや肥厚した円頭



第57図 神明後遺跡5号住居跡炉・遺物出土状況1 (1/30)

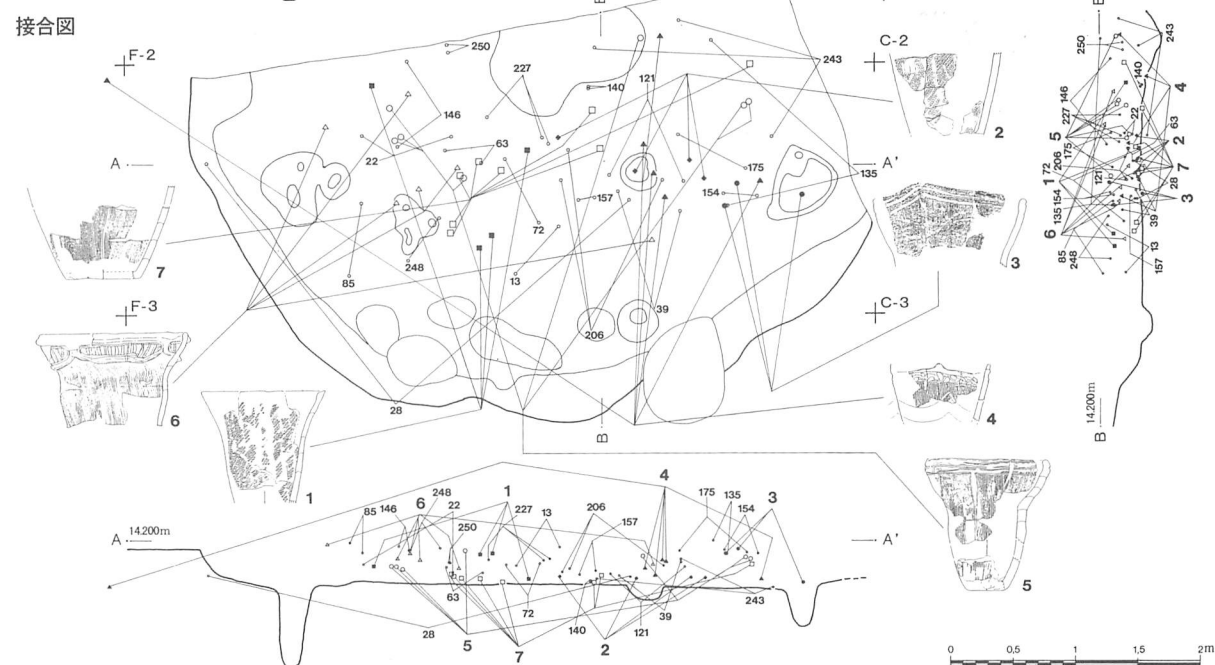
種類別



時期別



接合図



第 58 図 神明後遺跡 5 号住居跡遺物出土状況 2 (1/60)

形断面の口縁で、文様帯は口唇から体部まで単一の文様帯で、地文は斜位施文の縄文である。胎土には乳白色砂粒を含み器厚は6mmである。焼成良好で明るい黄褐色を呈する。夏島Ⅱ式である。

中期後半の土器（9～270）

9～23は地文撚糸文の一群である。9は小形深鉢の口縁で、10の上部には頸部無文帯の一部がある。12～15には隆帯貼付懸垂文があり、16～18の懸垂文は沈線で表現される。19は大形深鉢の胴部で、胴上半には沈線による不定弧状文が加わる。21～23の底部のうち21には隆帯による懸垂文の下部が残る。

24と25は地文縄文の口縁部文様帯の破片で、26は波状口縁で渦巻文と区画文をもつが区画内には沈線列が施される。27～29は地文条線の大形深鉢片で同一個体であり、胴上半には沈線で渦巻文と直線が描かれる客

体土器である。胴下半は2本組み隆帯による太い懸垂文がある。30もこれに近い。31は波状口縁下に沈線で小区画を埋める。32と33は重弧文をもつ口縁部で、32の口唇上部には沈線文を入れ、体部には隆帯の懸垂文を加える。34～36は、口縁下に横位に蛇行状に粘土紐を貼りつけた曽利系の土器片である。37は貼付け把手が剥離したもの。38は深鉢。39は浅鉢であるが共に口縁下に弧状沈線を多用する類である。40～46は、沈線を地文とする胴下半部片で、42～46は隆帯による蛇行懸垂文をもつ。47は沈線による蛇行懸垂文をもつ。48は沈線による垂下懸垂文の両側に沈線で綾杉文をつくる。49と50は地文条線で、49は隆帯による蛇行懸垂文基部で、50は胴下部である。

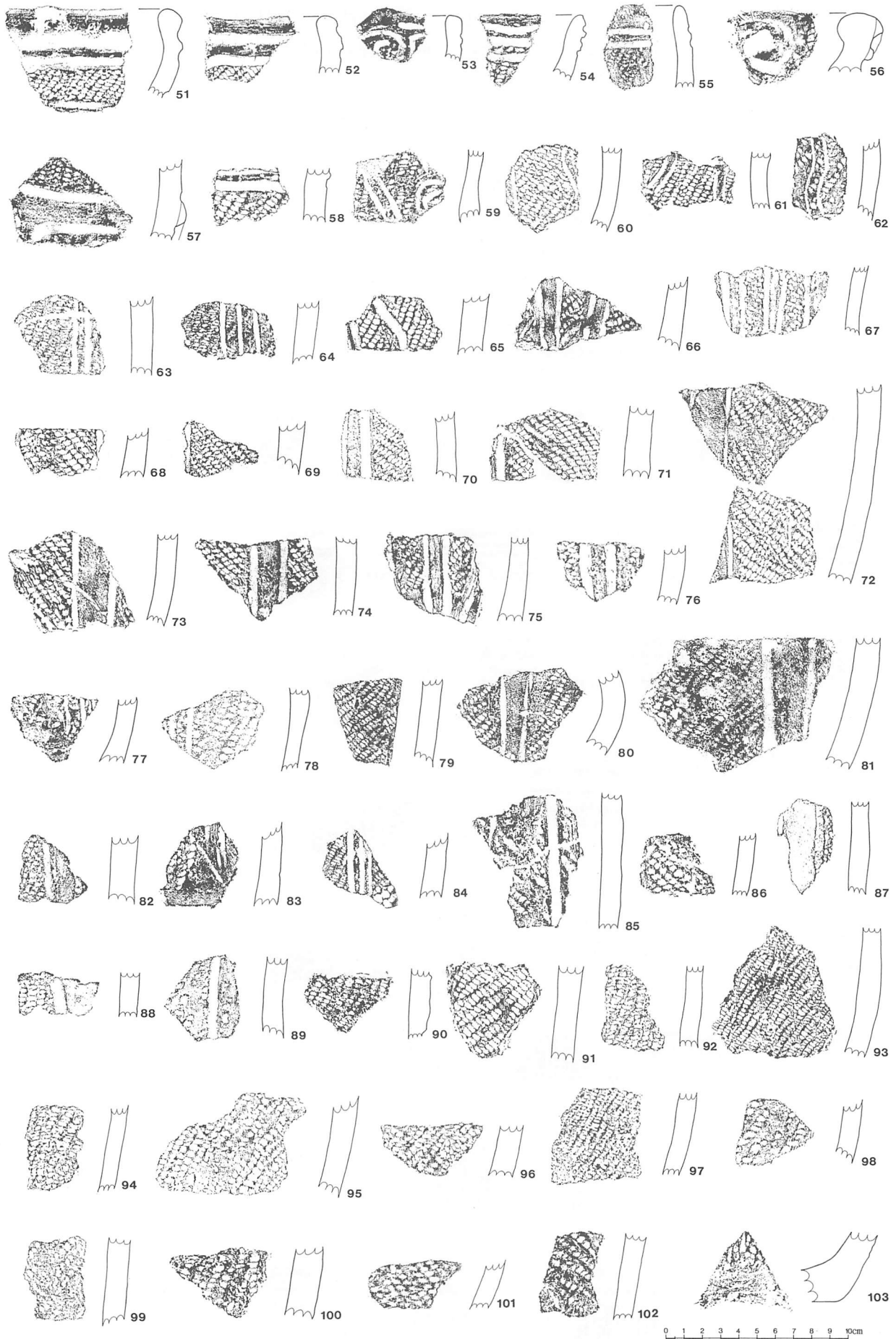
9～50は、加曽利EⅠ新期で、曽利式を含むが、27～29は異系で47・48は新相である。



第59図 神明後遺跡5号住居跡出土土器1（1/4）



第 60 図 神明後遺跡 5 号住居跡出土土器 2 (1/3)



第 61 図 神明後遺跡 5 号住居跡出土土器 3 (1/3)

第61図(51~103)は地文縄文の土器群である。51~56の口縁部のうち、51と52は区画文部、53は渦巻文部、54と55は沈線のもの、56の渦巻文周辺に若干の地文が残り、57と58は文様帯下部片である。

59~65は、懸垂文が沈線で描かれる類で古相である。66~89は、2本の沈線間を磨消して懸垂文を作る類で90~102は、地文部のみの胴部である。103はこの類の底部である。第61図は加曽利EⅡ式であるが、59は胴部に直線・曲線の沈線を多用する異系のもの。

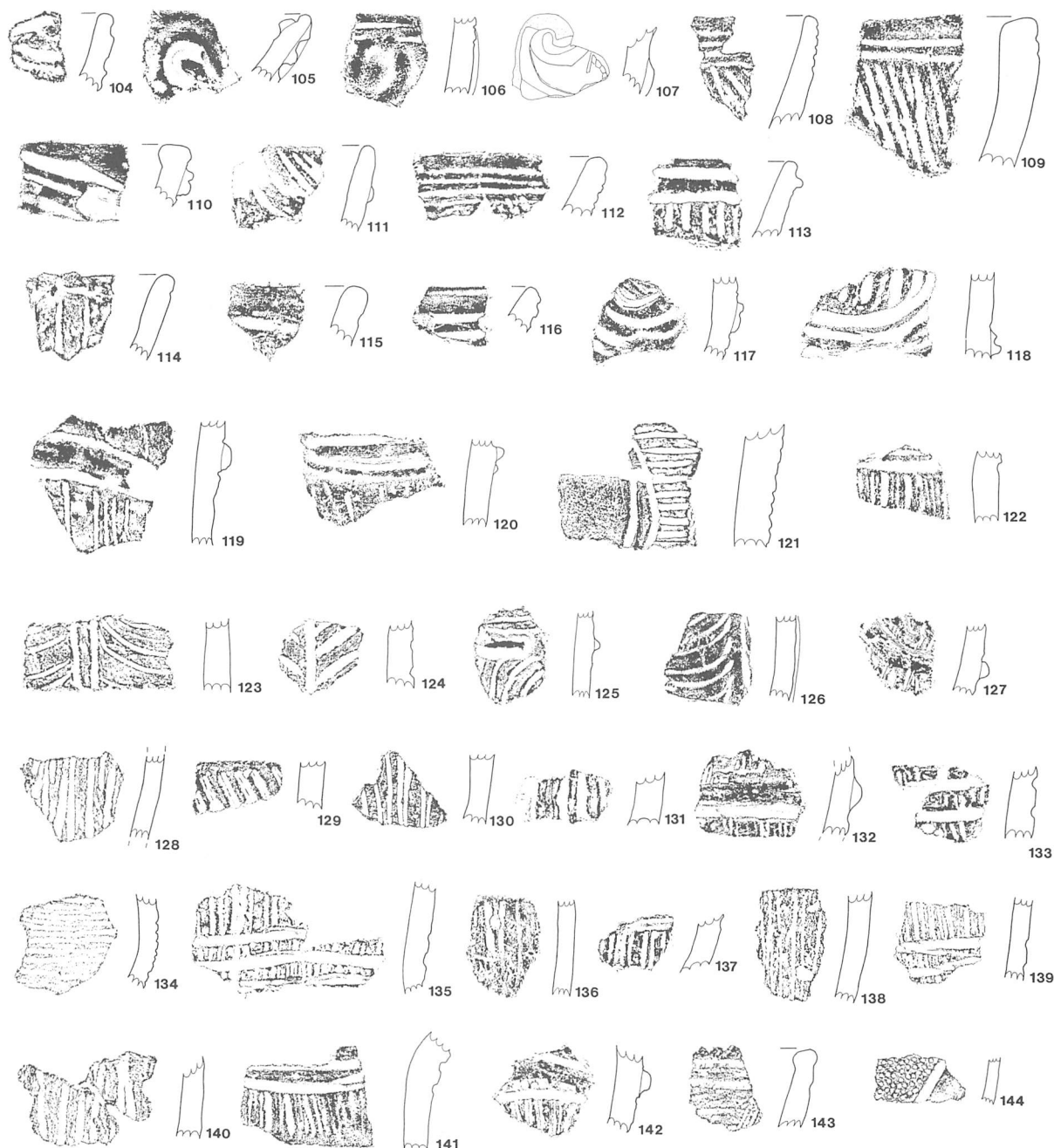
104~107は、口縁のうち渦巻文部のみで、地文部を欠く小片であり、縄文の可能性が高いが地文不明。

108~142は、沈線を基本とする類である。108~112

は口縁又は直下に斜位の沈線列をもち、113~116は縦位の沈線列を配する。117と118は、口縁部文様帯下部片で118は区画内に沈線列を入れる。119と120は頸部の上下にかかる破片で、胴部には縦位沈線が雑に入る。121は蛇行沈線の片側に横位の沈線列が描かれる。

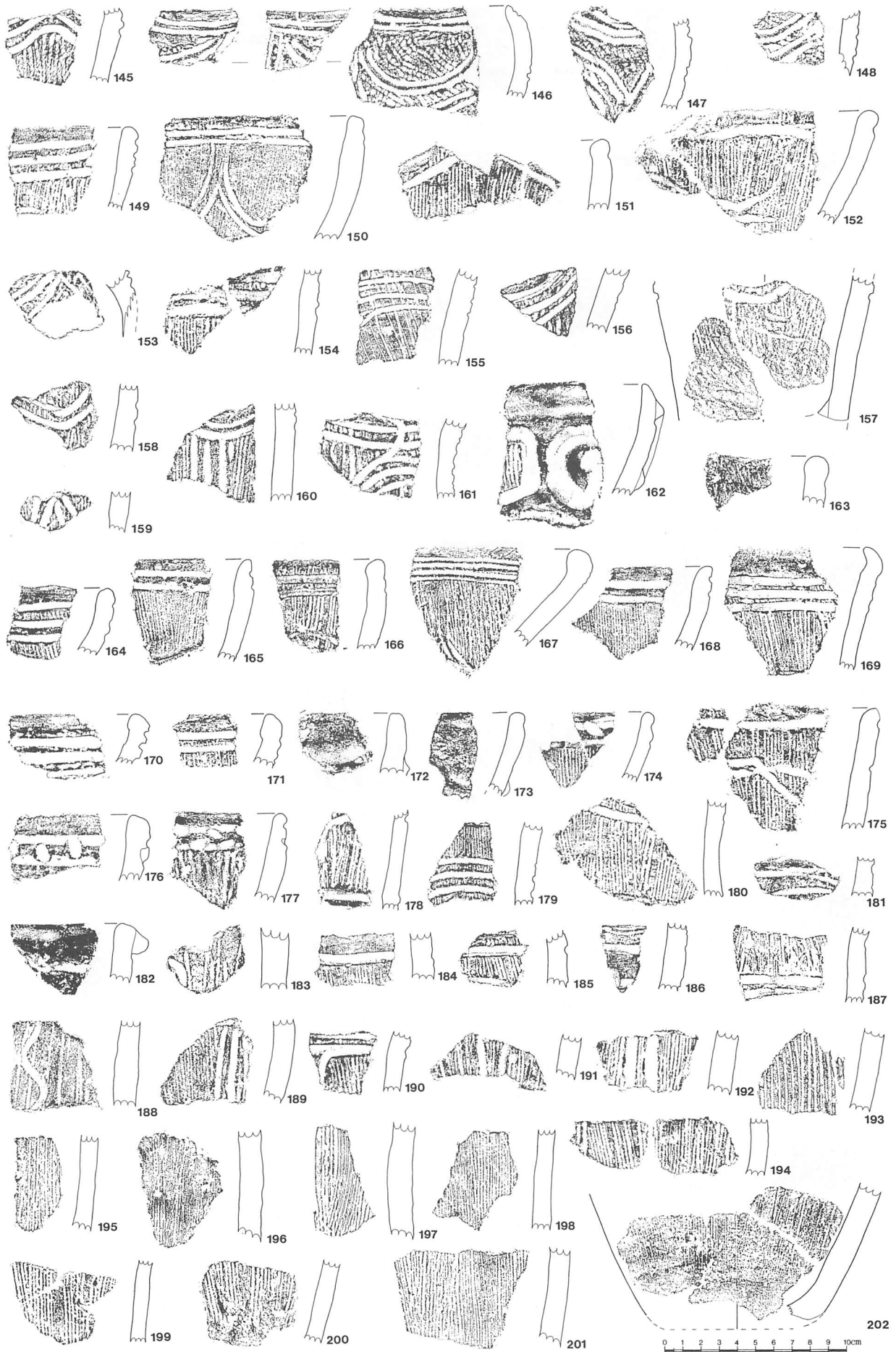
123~126は、沈線で肋骨文をつくり曾利4式新相といえる。127~142は、斜位の129や横位の134を除いて縦位の沈線列で埋め地文としてよい。143は口縁部に2本の沈線をめぐらせ、その下方にも細い細い沈線を斜位に施文する。

144は円形小刺突文群を地文として、広い磨消無文部のある胴部片で、系統・時期細分ともに不明。

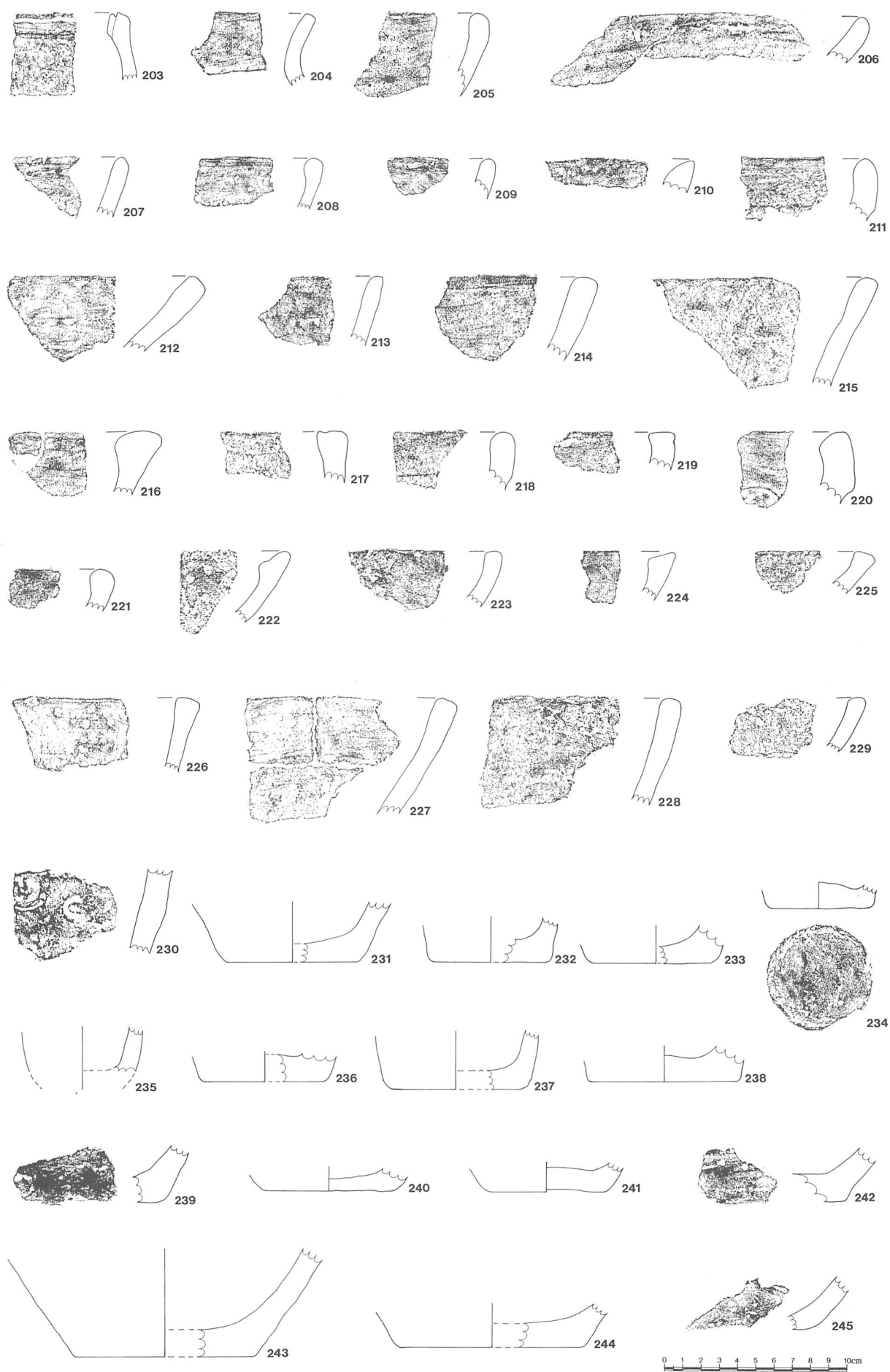


第62図 神明後遺跡5号住居跡出土土器4 (1/3)

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10cm



第 63 図 神明後遺跡 5 号住居跡出土土器 5 (1/3)



第 64 図 神明後遺跡 5 号住居跡出土土器 6 (1/3)

第63図(145~202)は連弧文と地文条線の類である。

145は地文撚糸文で連弧文を加える。3片が同一個体の146~148は地文縄文で連弧文を加える類。149~152は、地文条線で、口縁直下の沈線の下に連弧文を描く。153~161は地文条線の上に連弧文を入れる胴上部片で、続く2片もこの類の可能性が大きい。162は、区画文と渦巻文で口縁部文様帯をつくるが区画内には地文の条線が残る。163は口唇から地文条線のための小片。164~171は、地文条線で口縁下に沈線2~3本をめぐらすのみの口縁部片。172と173は地文条線で口縁近くが無文である。174と176・177は、地文条線で口縁下の沈線間に交互刺突文・刺突文を加えたもの。178~181は地文条線で連弧文になる可能性の高い沈線のある胴部片。184~187は横位沈線が加わった胴中部

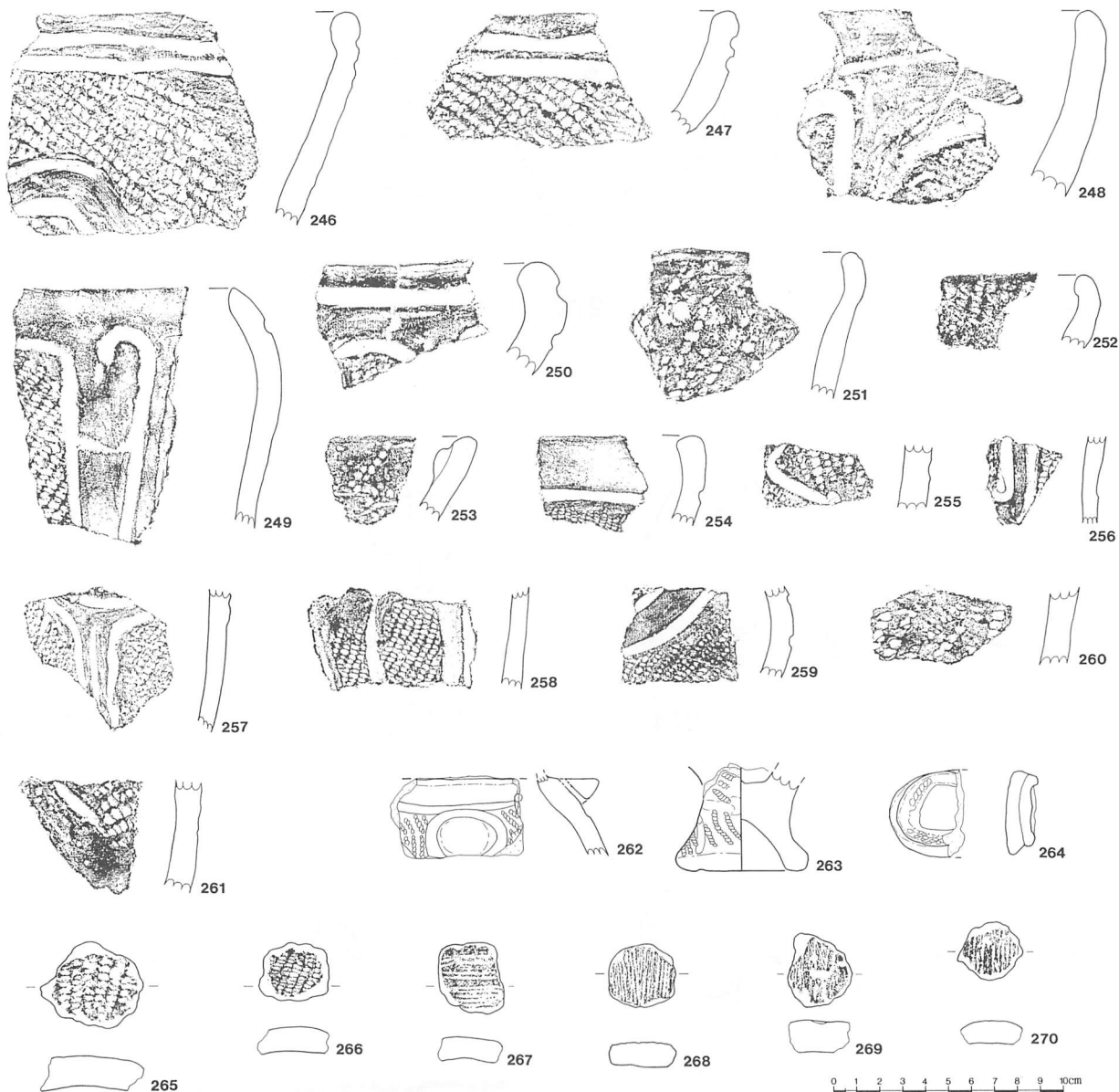
である。188~194は、地文条線に懸垂文をもつ類で、沈線のみのもものと、磨消が付加されたものがある。195~201は地文条線のみの胴部片。この類の小片多数を割愛した。202は地文条線のみの底部片。

第64図(203~245)は無文浅鉢の口縁部と底部であり浅鉢の体部破片は一切割愛した。

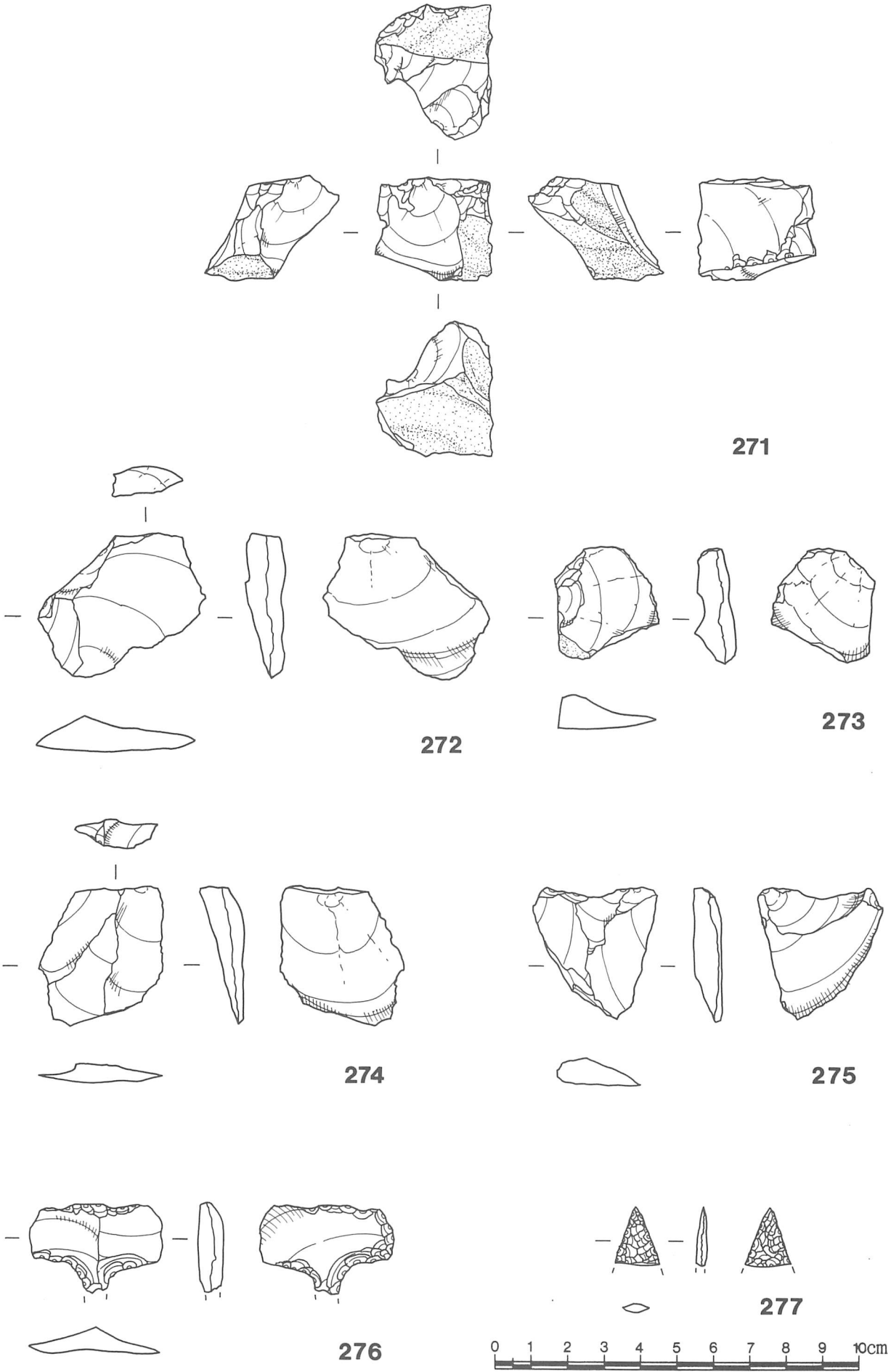
203~211・217~221は口縁に直立部をもつ類で、他は口縁から底近くまで段のない類の口縁。このうち二次被熱によるハジケ現象が著しいのは222と226で、体部片の230も同様である。231~238は深鉢の239~245は浅鉢の底部で、234には繊維圧痕が見られる。

第65図は加曽利EIII期と土製品である。

246~250は、口縁下に沈線をめぐらすものと欠くものがあるが、地文縄文を逆U字状に残して広く磨り消



第65図 神明後遺跡5号住居跡出土土器7 (1/3)



第 66 図 神明後遺跡 5 号住居跡出土石器 1 (2/3)

す大深鉢の口縁部である。251～253は、口縁と体部の区分がなく全面に粗な縄文を全面施文する。254は口縁を無文として、胴部の地文は細縄文である。

255～261は、上述の類の胴部片で、粗な縄文と細縄文を地文とし、弧状の磨り消し・蕨手状沈線の特徴としている。246～261は加曽利EⅢ式である。

262は口唇を欠く有孔罌付き土器で、球状胴に縄文を地文として沈線による渦巻文をいれる。小孔は罌の基部を上下に貫通する。263は器底を支える台部の破片で台の底径5.5cmで縄文が施文されている。

264は、把手よりも土盤の可能性が高い。板状の楕円形の片面側に粘土紐を貼付け上面に縄文を施文する。胎土は緻密で白色粉末を含み、側面・裏面は平滑で焼成良好・暗褐色を呈する。町内での初出土例である。

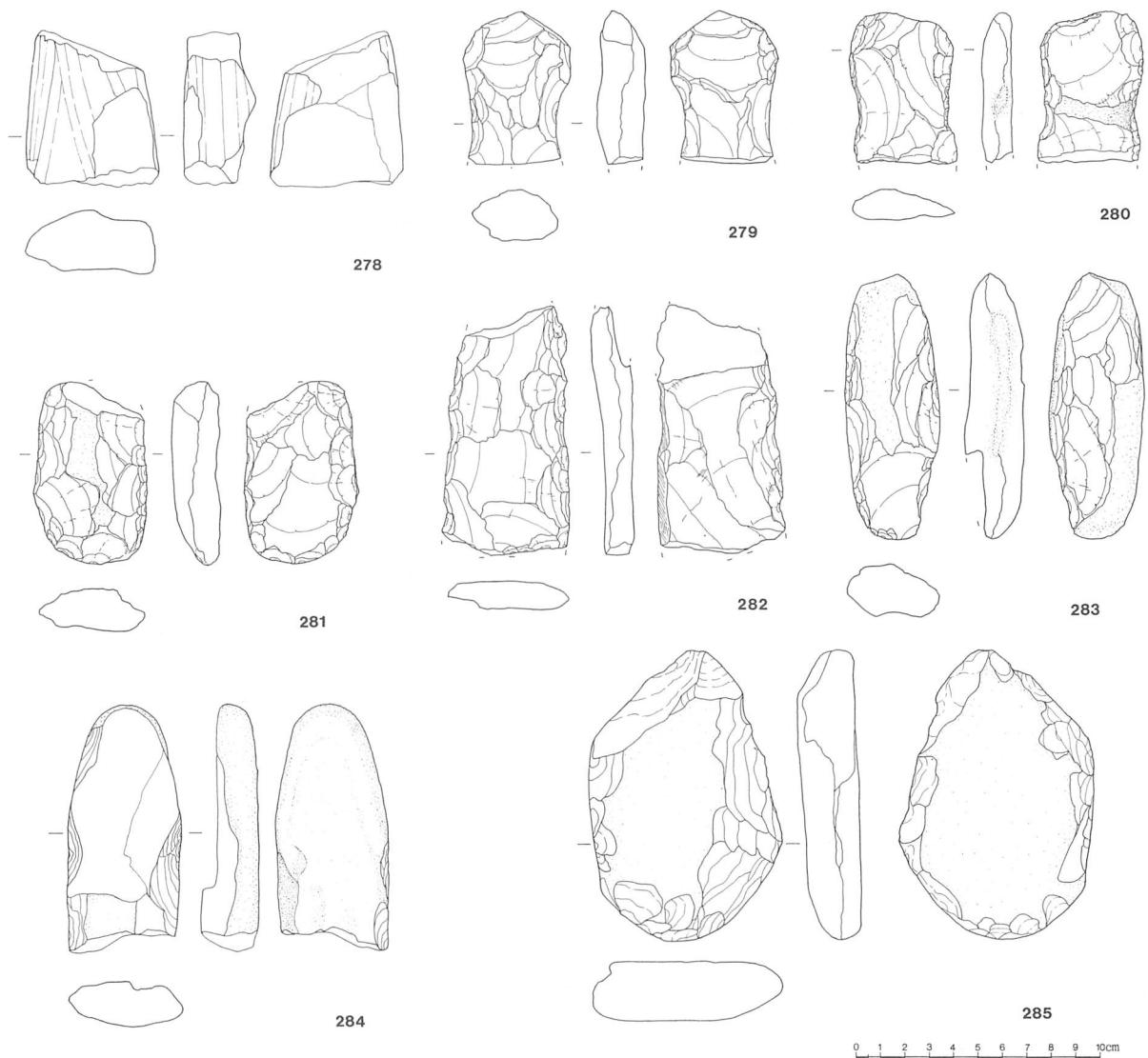
265～270は土製円板で、いずれも側面調整は明瞭、

265と266は地文縄文で、267～270は地文条線である。

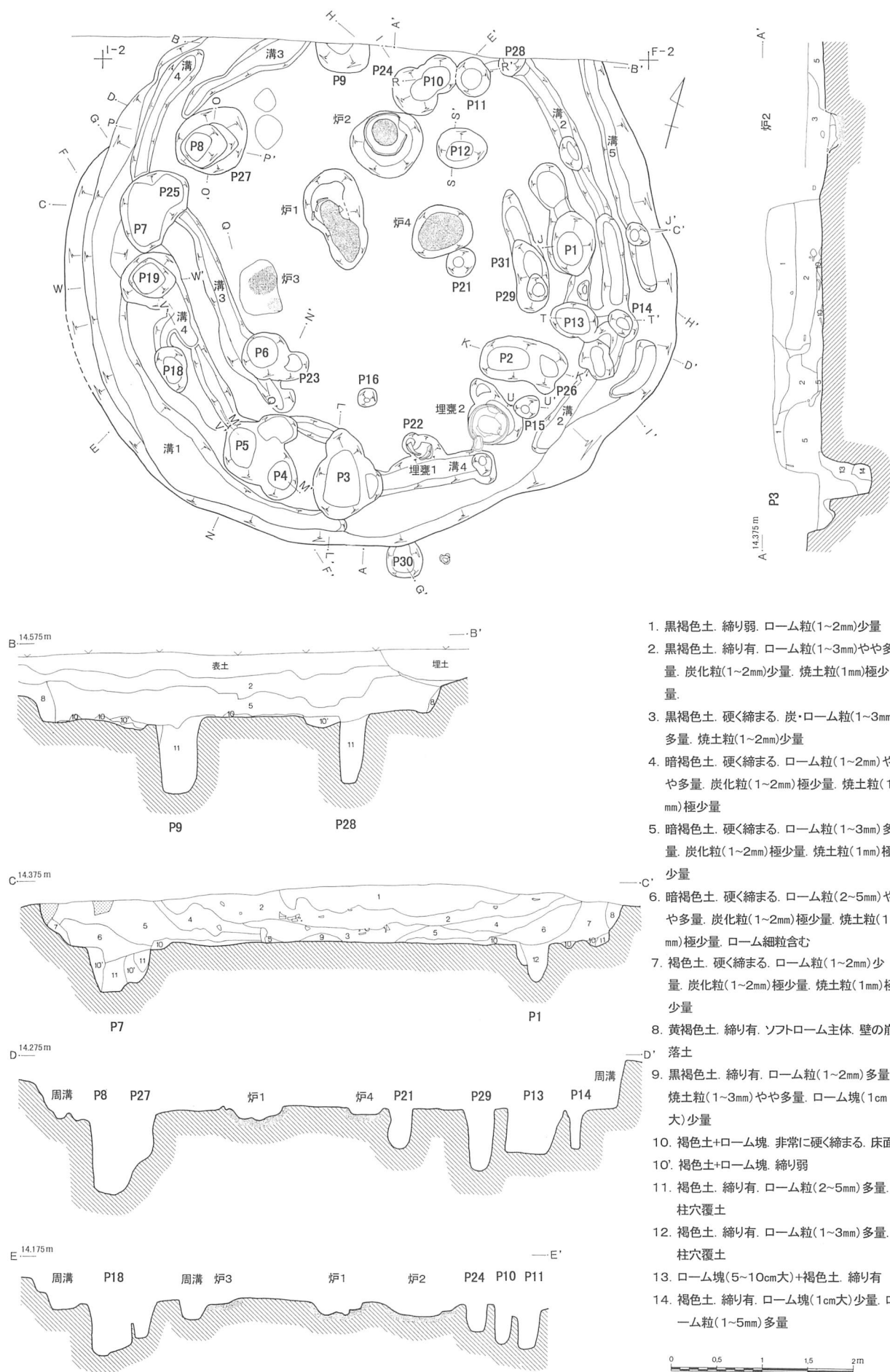
【時期】5号住居跡は、復原土器や下層の土器からして加曽利EⅡ期新相であり、地文条線の土器が多いことと、明瞭な加曽利EⅢ式片をかなり含む特徴がある。

第23表 神明後遺跡5号住居跡出土石器一覧表 単位(cm・g)

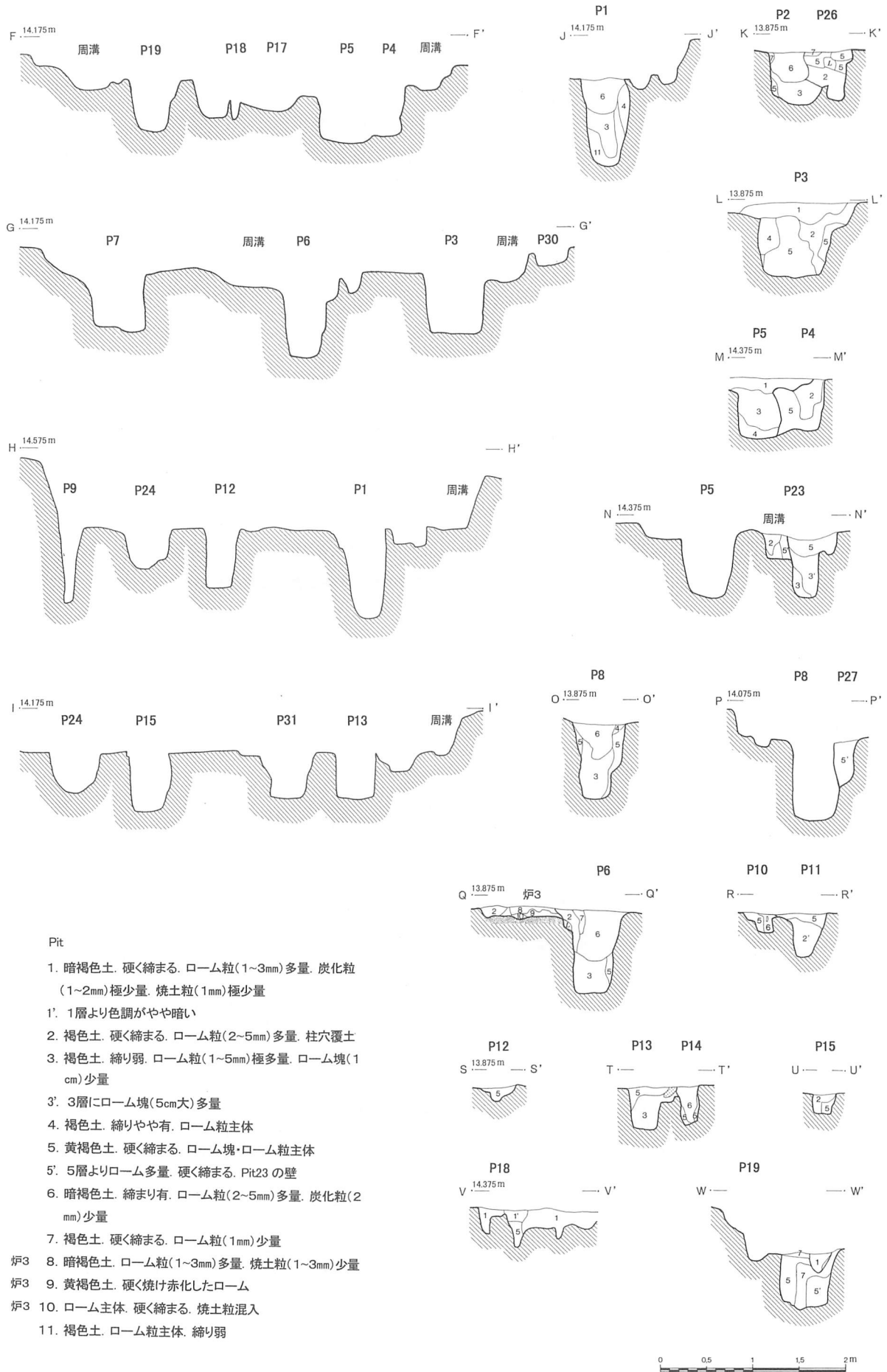
No.	材質	種類	長さ	幅	厚さ	重量
271	黒曜石	石核	3.7	3.3	3.7	24.3
272	チャート	剥片	3.8	4.6	1.1	14.6
273	チャート	打面再生剥片	3.1	2.9	1.1	7.8
274	チャート	剥片	3.6	3.4	1.2	9.6
275	硬質頁岩	調整剥片	3.7	3.4	0.8	8.4
276	安山岩	石錐	2.4	3.7	0.7	4.8
277	黒曜石	石鏃	1.6	1.2	0.3	0.3
278	砂岩	磨製石斧	6.3	5.4	3.0	143.1
279	ホルンフェルス	打製石斧	6.3	4.4	2.0	75.2
280	粘板岩	打製石斧	6.1	4.2	1.2	48.6
281	砂岩	打製石斧	7.3	4.7	1.9	87.0
282	緑泥片岩	打製石斧	9.9	5.1	1.6	120.2
283	粘板岩	敲石	10.9	3.9	2.4	106.3
284	片麻岩	敲石	10.0	4.6	2.4	135.2
285	砂岩	敲石	11.7	7.8	2.4	349.5



第 67 図 神明後遺跡 5 号住居跡出土石器 2 (1/3)



第 68 図 神明後遺跡 6 号住居跡平・断面 (1/60)



第 69 図 神明後遺跡 6号住居跡柱穴土層 (1/60)

③6号住居跡

【位置】調査区の南東部、さかい川の南55mに位置する。0.6m東に5号住居跡、2m南東に7号住居跡がある。

【形状】建替えと拡張が行なわれている。

旧住居は炉1と埋め甕1を中心軸に溝1・溝2を周溝とする住居で、形状はほぼ円形を呈する。未調査部分があるが、規模は主軸方位5.96×横軸5.98m(溝2の立ち上がりまで)。支柱穴はP12－P26－P4－P19と、P24－P2－P5－P25の4本柱の組み合わせと、P11－P13－埋め甕2－P3－P5－P7の6本柱の組み合わせが想定できる。また、炉3・炉4も炉2から等距離にあること、褐色土で硬く埋められていたことから、旧住居に伴うものである。周溝は幅22～62cm、深さ15cm、断面形態は「U」状を呈する。

新住居は炉2と埋め甕2を中心軸に溝3・溝4・溝5を周溝とする住居で、形状は隅丸方形を呈する。未調査部分があるが、規模は主軸方位5.96m×横軸5.42m(溝4の立ち上がりまで)。拡張が行なわれている。最初は溝3を周溝とし、支柱穴はP28－P1－P23－P27－P9の5本柱の組み合わせ。次に、西側の周溝を溝3から溝4に拡張、柱穴をP23→P6、P27→P8へ移動した住居が想定できる。周溝は幅15～30cm、深さ7～19cm、断面形態は「U」状を呈する。

新住居の床面は褐色土とロームブロックが非常に硬く混じりあい、貼り床状になっており、概ね平坦である。旧住居の周溝や柱穴は硬くしまった褐色土やローム等で埋められている事が多かった。新旧住居共に確認面からの深さは45cm測り、壁は垂直に近い。主軸方位は新旧ともにN-38°-Wを示す。

【炉】炉跡は4ヶ所検出した。

炉1は旧住居の炉で旧住居の中央北寄りにある。深鉢口縁部を転用した埋設土器(第75図1)を伴い、約1/3が残る。炉の一部に焼土が堆積する。炉の掘り方は瓢箪形で111×61cm、深さ17cm。南側の部分が新しく掘られている。

炉2は新住居の炉で新住居の中央北寄りにある。深鉢口縁部を転用した埋設土器(第75図3)を伴い、内側には焼土が堆積する。炉の掘り込みは円形で81×72cm、深さ15cm。土器は掘り込みの北側に埋設される。

炉3は旧炉の西60cmにあり、床面上が焼けて赤化する。

る。赤化範囲は2ヶ所で35×26cmと19×13cm。P6より古い。

炉4は旧炉の東50cmにある。炉の掘り込みは70×56cm、深さ12cm。赤化範囲は49×42cm。

【埋め甕】埋め甕1(第75図2)は旧住居に伴ない、溝1に切られる。埋め甕の掘り込みは30×20cm、深さ18cm。ローム主体の褐色土で埋る。

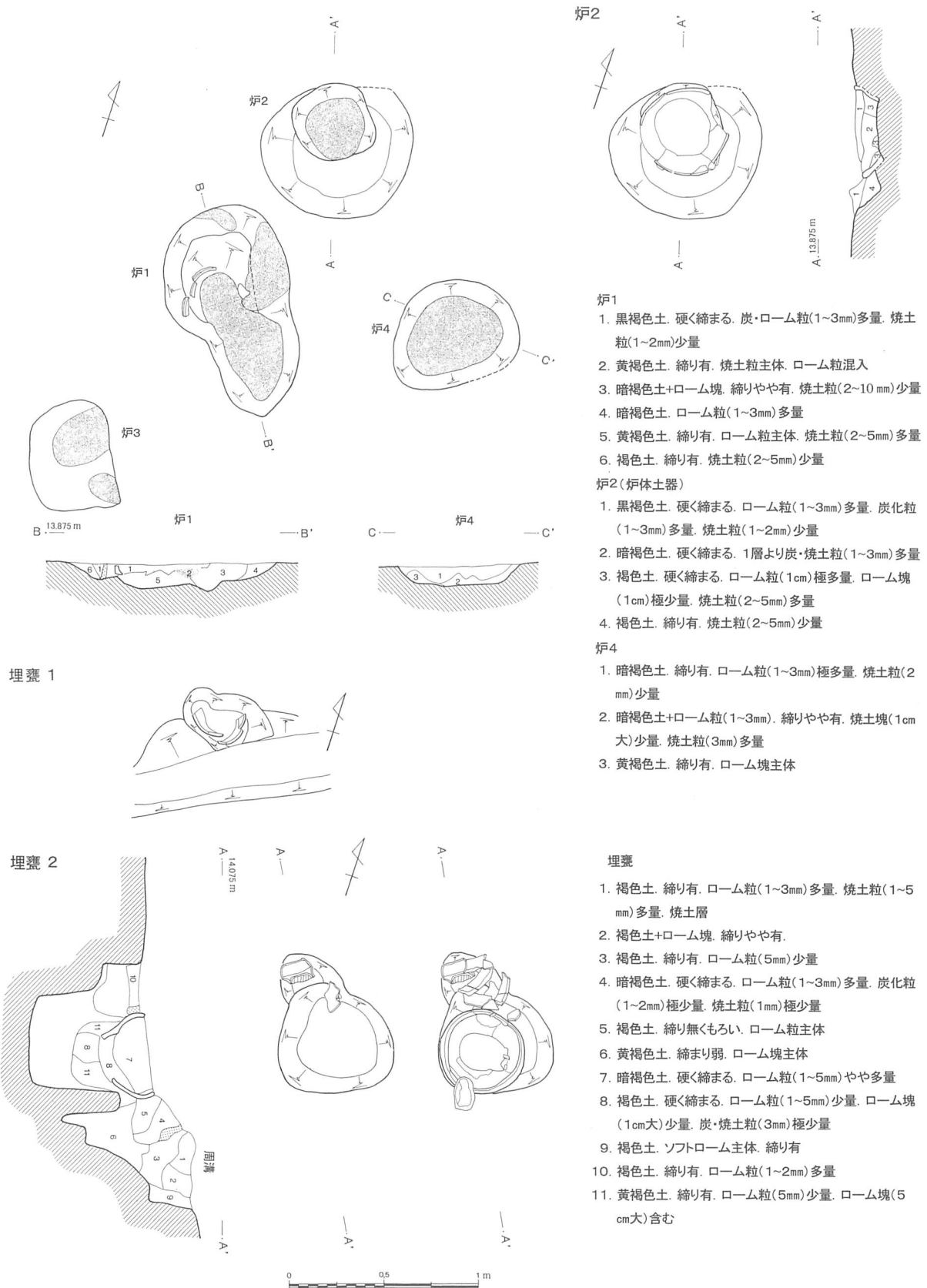
埋め甕2(第75図4)は新住居に伴なう。旧住居の柱穴を利用して土器を埋設してある。元の掘り込みは62×56cm、深さ59cm。ローム主体の褐色土で埋めた上に深鉢上半を正位に埋設する。

【柱穴】旧住居のP12－P26－P4－P19間の距離は250～360cm、P24－P2－P5－P25→P7間は285～320cm、P11－P13－埋め甕1－P3－P5－P7間は120～390cmである。新住居のP28－P1－P23－P27－P9間の距離は190～350cm。

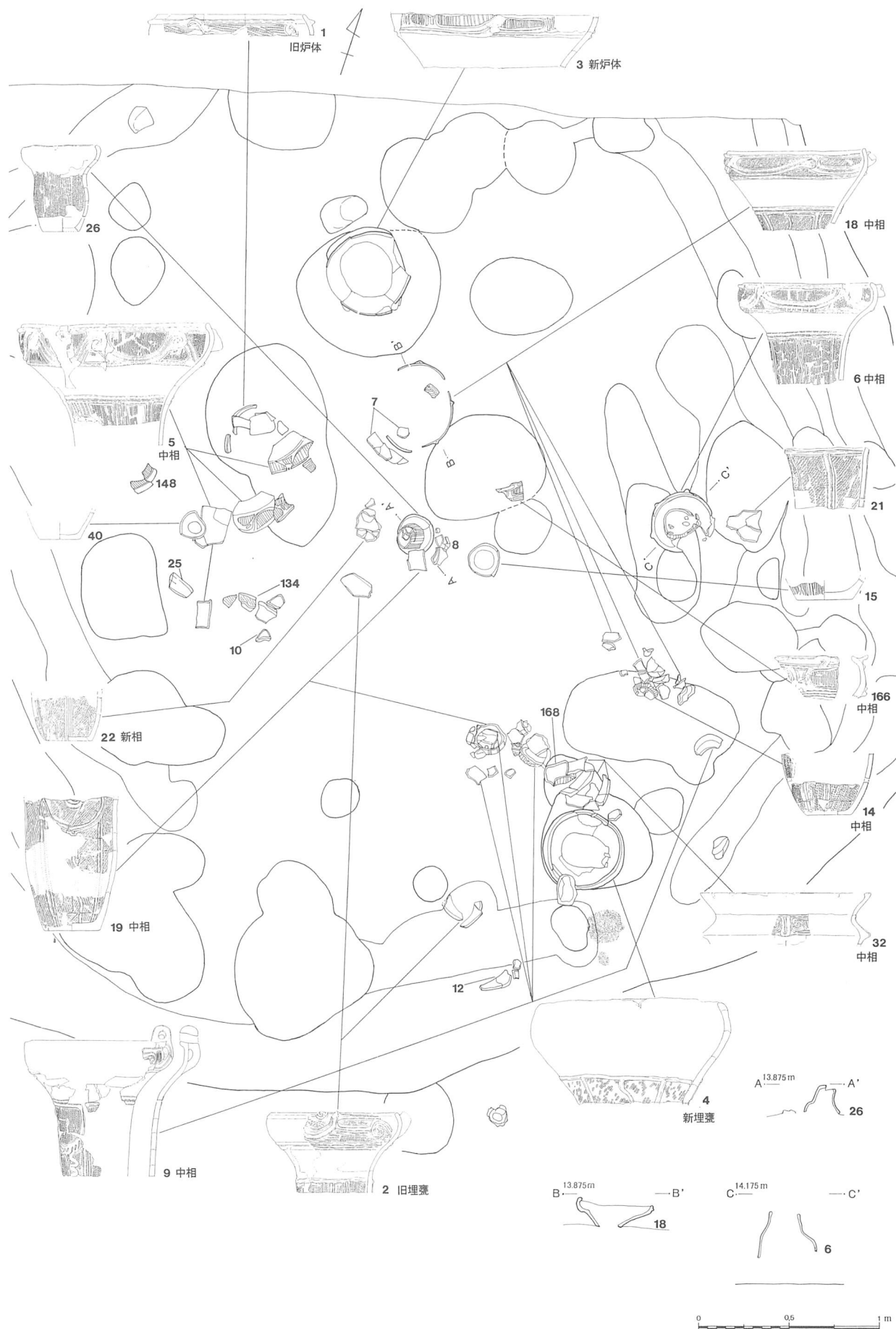
第24表 神明後遺跡6号住居跡ピット一覧表 単位(cm)

No.	確認面径	底径	深さ	備考
1	72×50	38×28	100	楕円形
2	(54)×50	46×24	63	楕円形
3	98×76	62×38	70	楕円形
4	(56)×56	30×26	65	楕円形
5	(64)×61	42×30	58	楕円形
6	54×(52)	34×34	95	円形
7	90×()	70×()	69	楕円形
8	61×58	32×28	88	円形
9	58×(32)	30×(12)	82	未掘 円形
10	42×()	24×()	45	円形
11	42×38	24×22	56	円形
12	58×44	32×22	65	楕円形
13	54×40	36×28	50	楕円形
14	32×22	18×10	47	楕円形
15	28×26	10×8	29	円形
16	22×20	6×4	18	円形
17	—	—	—	欠番
18	52×32	30×22	61	楕円形
19	66×62	36×34	62	隅丸方形
20	—	—	—	欠番
21	36×30	12×12	44	円形
22	20×18	10×8	21	円形
23	42×(40)	18×(16)	75	楕円形
24	58×()	24×()	45	楕円形
25	56×()	40×()	61	円形
26	56×(42)	30×18	55	楕円形
27	54×32	38×(10)	54	円形
28	34×(20)	16×(6)	76	未掘 円形
29	42×26	14×14	68	楕円形
30	40×(34)	(30)×24	21	円形
31	42×30	28×18	50	楕円形

【遺物出土状況】住居跡中央を中心に、1,800点余りの土器破片、石器、礫が出土した。覆土下層から上層まで完形品も多い。

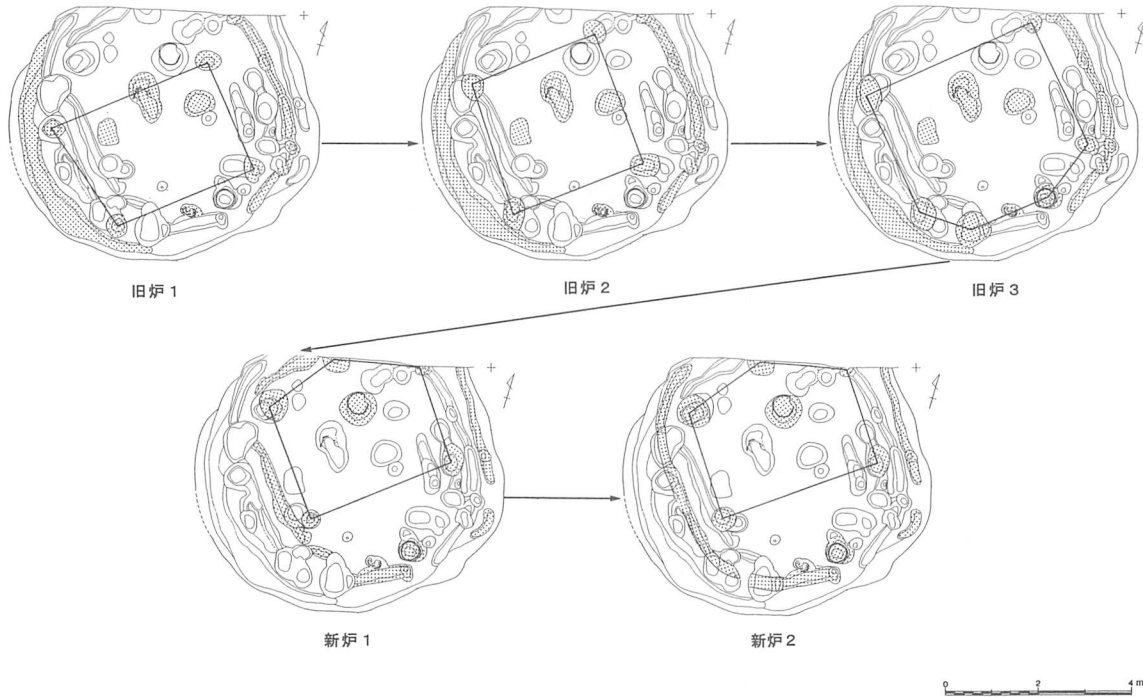


第70図 神明後遺跡6号住居跡炉・埋甕(1/30)

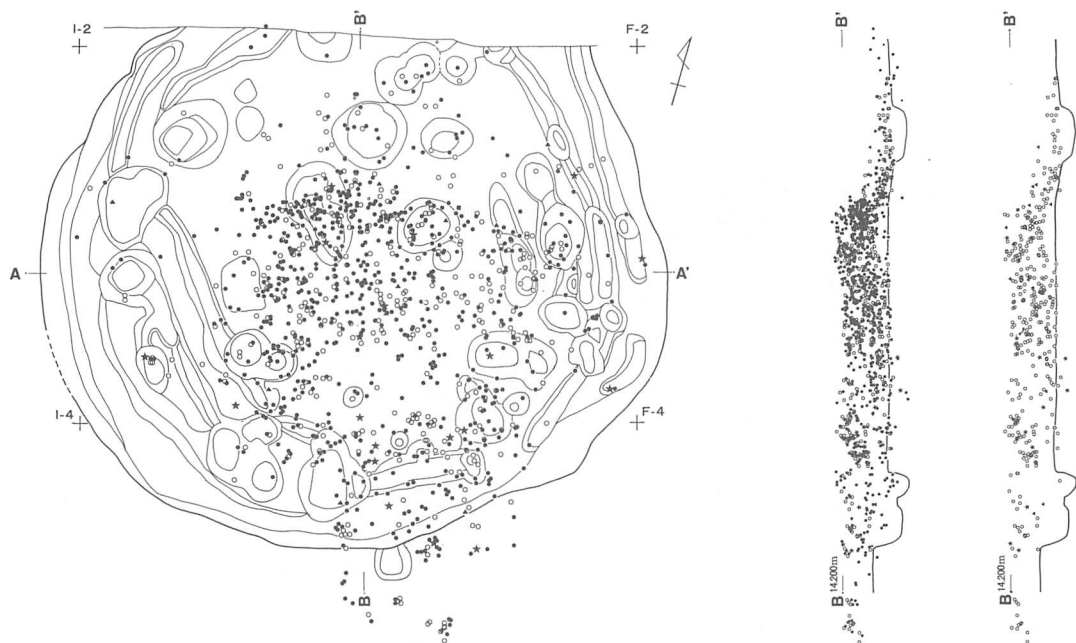


第 71 図 神明後遺跡 6 号住居跡遺物出土状況 1 (1/30)

住居変遷図



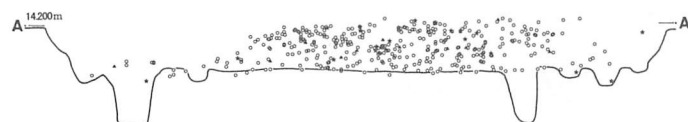
種類別



全種分布断面図



土器を除く分布断面図

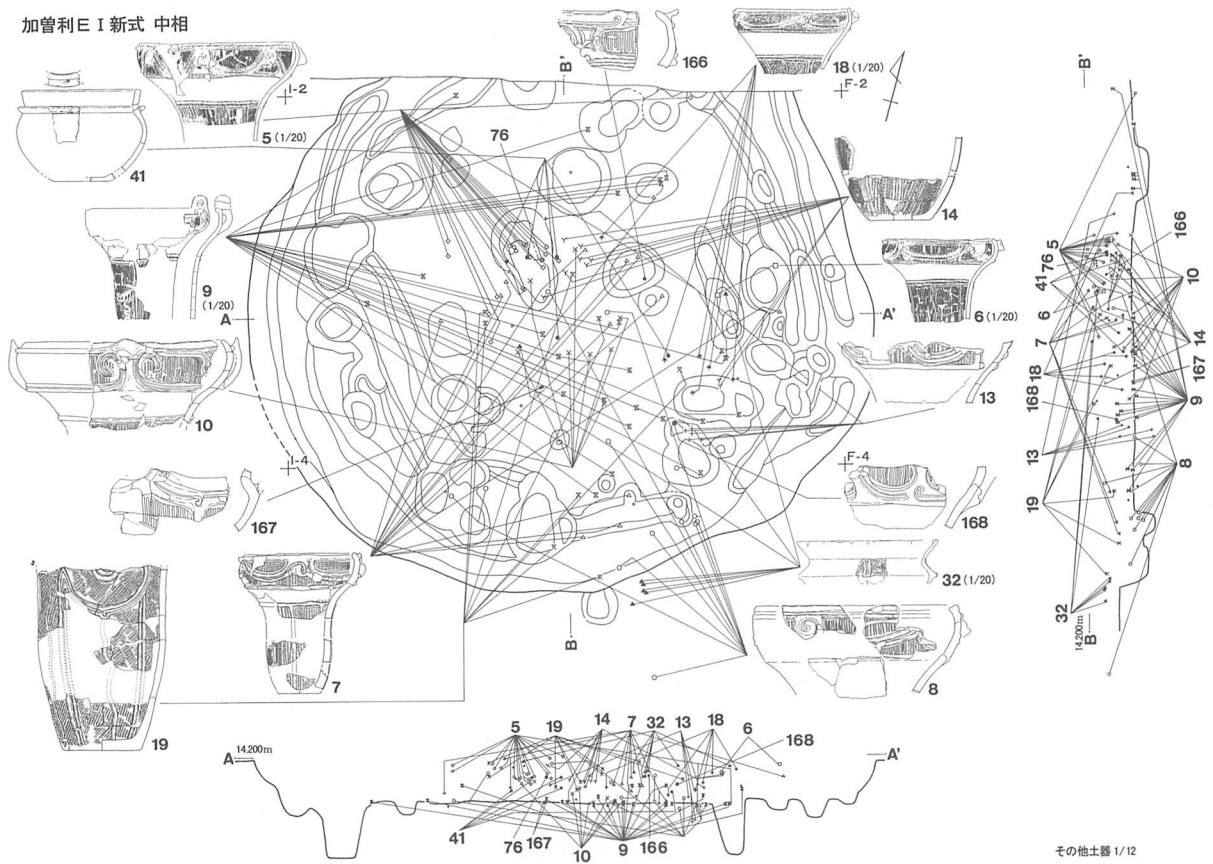


- 土器
- ★ 石器
- 礫
- ▲ 黒曜石・チャート
- 土製品

0 0.5 1 1.5 2m

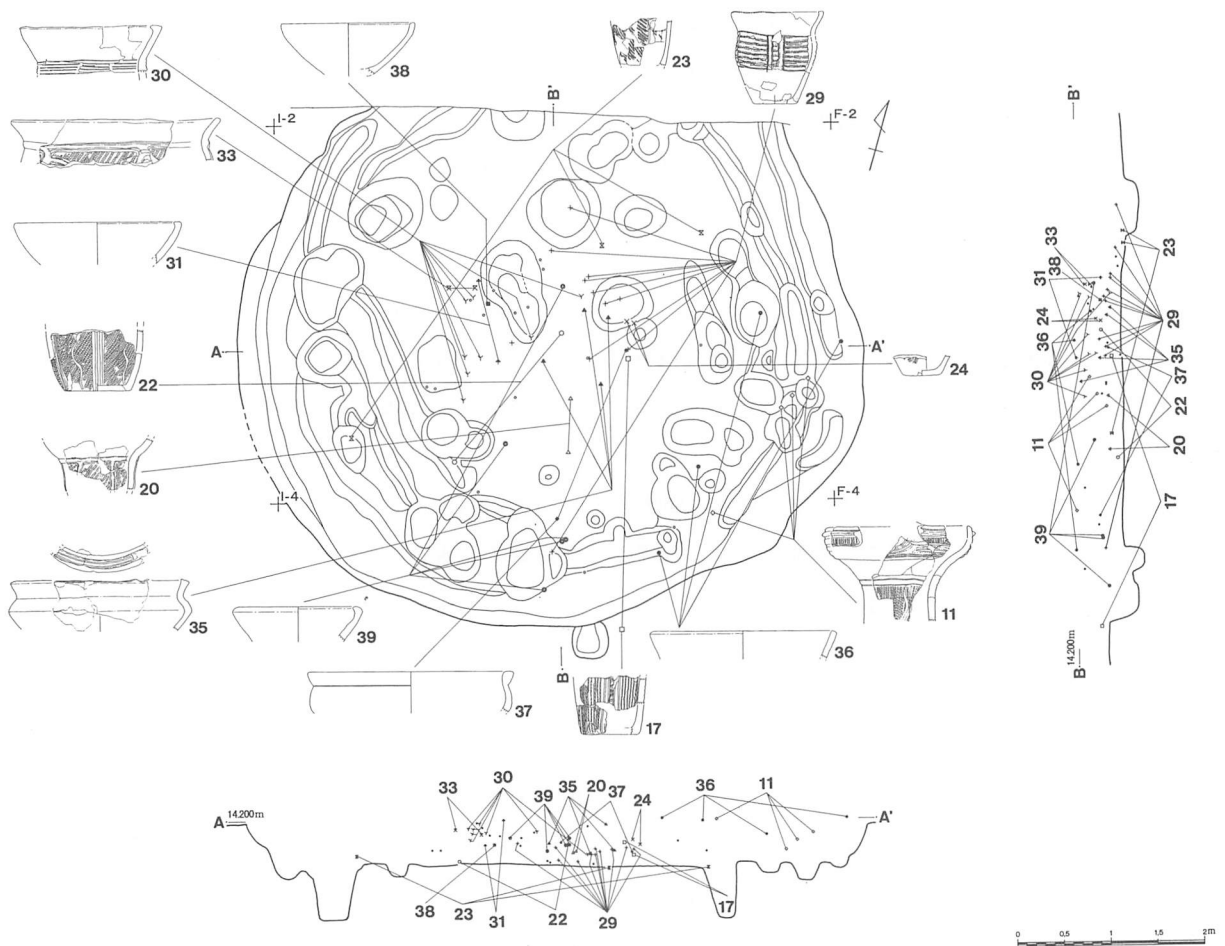
第 72 図 神明後遺跡 6 号住居跡遺物出土状況 2 (1/80)

加曾利E I 新式 中相



その他土器 1/12

加曾利E I 新式 新相



第74図 神明後遺跡6号住居跡遺物出土状況4 (1/80)

【出土遺物】（第75～84図）

旧炉体土器（第75図1）

1は、当初の住居の炉体土器であり、口唇から口縁部文様帯の中ほどまでの約4割を遺存し、復原口径約33cm・現存高5.1cmである。口縁部は内傾し、横に長いS字状文の端部が口縁までのびて前方に突出した渦巻文となる。地文はLrの撚糸を横位・斜位に施文する。胎土には1～3mmの砂粒若干と白色軟質物質・角閃石粉末を含み、口唇外面・口縁内面を平滑にナデ調整する。焼成良好で明褐色を呈する。

旧埋甕（第75図2）

2は当初の住居の埋甕であり、キャリパー型深鉢で口頸部の半分と胴上部以下を欠失する。復原口径28.4cm・現存高17.8cmである。2本組隆帯を貼付けてS字状と渦巻文をつくり、突起部と渦巻文中央を2本組の横位隆帯で連結する。前方に突出した隆帯は中空の把手状となるが最突出部を欠失する。口縁部の区画内はLrの撚糸を横位に施文する。頸部無文帯の上下は隆帯で区画する。胴部は縦位の撚糸文を施文とし、2本組隆帯で蛇行懸垂文と直下懸垂文4単位をつくる。胎土には約1～3mmの白色砂粒・黒雲母粉末を含み、焼成良好で黒斑部以外は黄褐色を呈する。

1と2は、渦巻文を突出させ、撚糸文を横位に施文するという特徴があり、このことから当初の6号住居跡は、加曽利EⅠ新式古相段階のものといえる。

新炉体土器（第75図3）

3は新住居の炉体土器である。キャリパー型大深鉢の口縁部文様帯下半部から頸部文様帯最下部までを遺存し口径47.0cm・現存高12.5cmである。口縁文様帯の口縁側を欠くこと、全面に突出する広い隆帯が剥離していたために全容は不明である。隆帯により下側7cm程度の楕円又は隅丸三角形の区画と、長さ約15cmの楕円区画をつくり、楕円区画の間に隆帯を交互刺突した間帯をつくる。楕円区画内にはへら状工具による深い沈線列を入れ、隆帯沿いに沈線をめぐらす。

渦巻文があると想定される部分は欠損しているが、連結文様・小区画・連結文様・大楕円区画・渦巻文の2単位といえる。渦巻文部は前に突出していたといえる。口縁部文様帯と頸部無文帯の間には区画隆帯がめぐらされている。

胎土には、白色微砂粒若干、白色軟質物質・角閃石末・橙色粒子を含み、口縁内面はナデ整形され、焼成良好で茶～暗褐色を呈する。口縁部内面には二次被熱によるハジケ現象が認められる。土器の特徴は、加曽利EⅠ新式中相を示し、口縁部文様帯の区画内を沈線列で充填するという特色をもっている。

新埋甕（第75図4）

4は新住居の埋甕であり、胴上部までを完存し、輪積部で以下を欠き、口径40cm・現存高23.3cmである。無文口縁深鉢であるが、広く上方に広がる無文部の口縁近くが内傾する。胴部との境は隆帯を貼付けて区画する。胴部にはRLの直段多条縄文を縦に施文して地文とし、隆帯を貼付けて蛇行懸垂文と直下懸垂文を5単位つくるが広狭の小差がある。

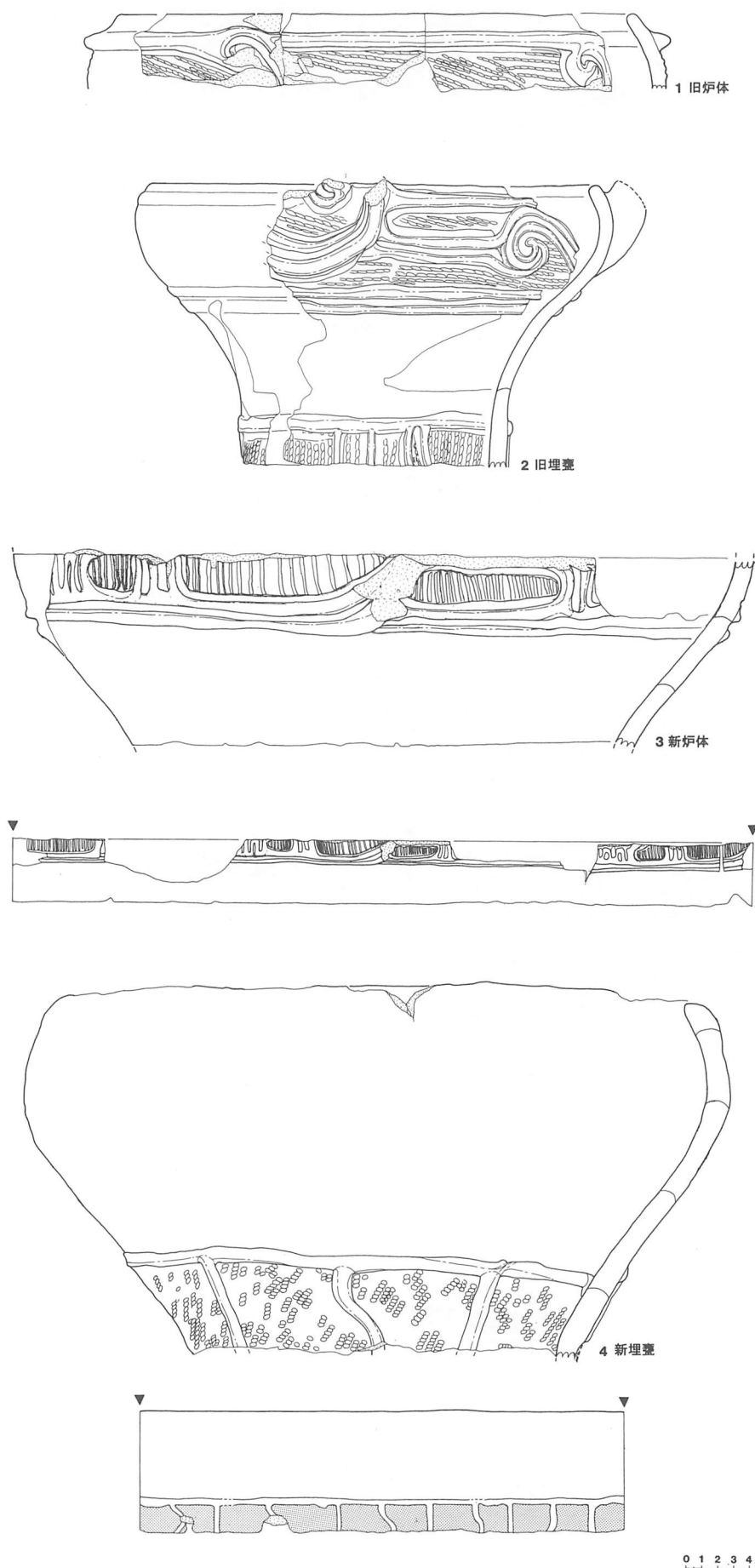
胎土には0.1～0.5mmの白色砂粒・白色軟質物質・黒雲母片を多く含み、焼成良好で明褐色～褐色を呈し、焼成黒斑が著しい。時期は加曽利EⅠ新式である。

復原土器（第76～79図）

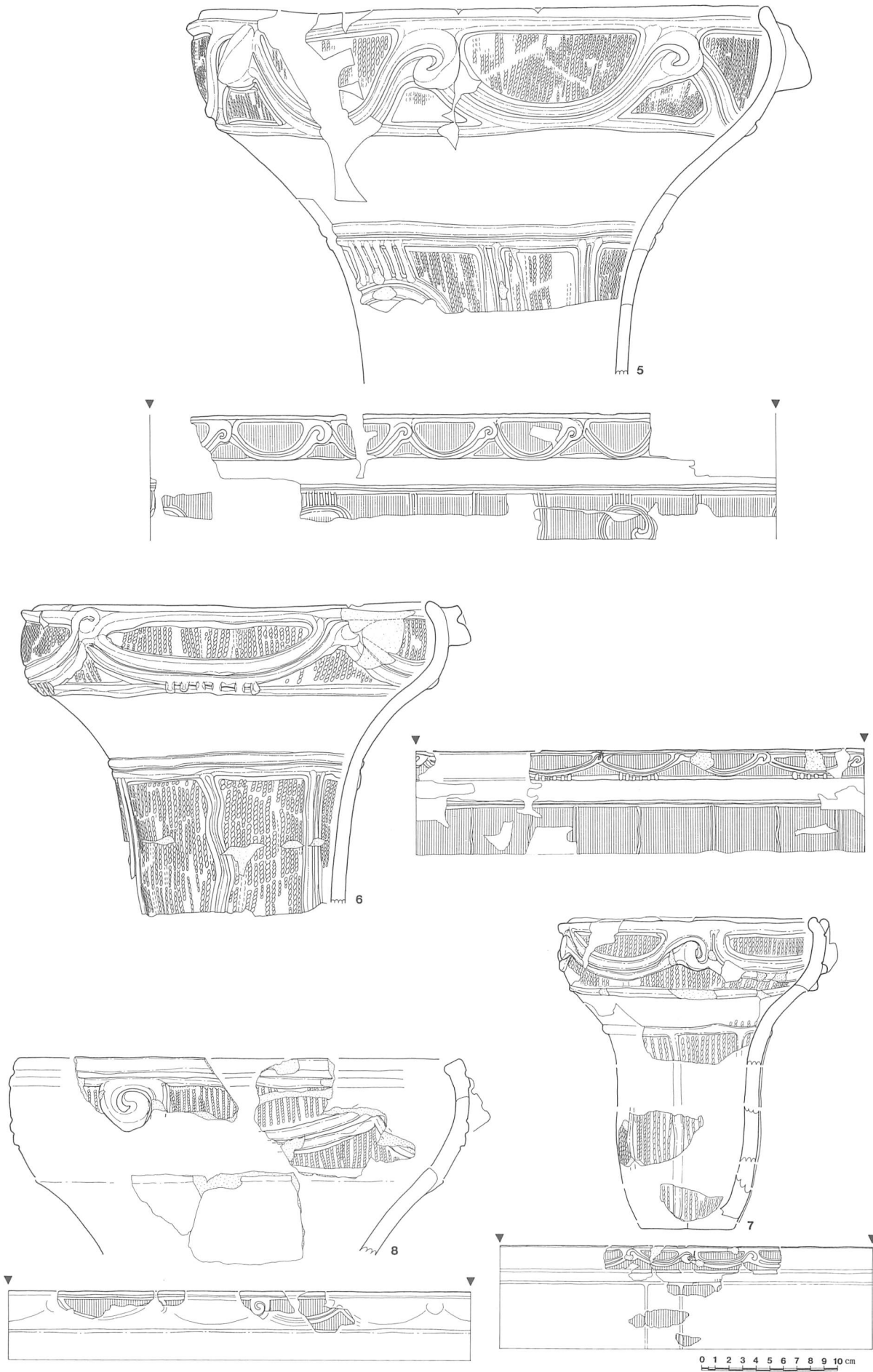
5は、口縁から胴中部までの約70%を残すキャリパー型深鉢で、口径41.5cm・現存高27cmである。口縁部文様帯は、太い2本組隆帯による区画文と渦巻文で、下絃の半楕円形区画と台形小区画及びその上部の突出を伴う渦巻文7単位で構成され、区画内の地文は縦位施文の撚糸文である。頸部無文帯に続く胴上部は撚糸文を地文とし、貼付けによる2本組隆帯で蛇行懸垂文と直下懸垂文を垂下させる。その間隔の広い3ヶ所には、先端が渦巻となる2本組隆帯で、円形弧を描出し、頸部の隆帯に4本の短い隆帯で連結する。

胎土には、乳白色細砂粒・白色軟質物質・輝石粉末と角閃石粉末を含み、口縁内面上部もナデ整形し、焼成良好で黄褐色～暗褐色を呈する。

6は、キャリパー型深鉢で、口縁の約20%を欠くが口縁から胴中部までをほぼ完存し、口径28.2cm・現存高22.8cmである。口縁部文様帯は2本組隆帯で、口縁寄りに半楕円形区画・頸部よりに山形区画をつくり、山形頂は口唇に近付いて突出した渦巻文をつくる。半楕円形区画隆帯下端と、頸部無文帯の区画隆帯間を6本の短隆帯で連結し支える。口縁部の区画内と胴部の地文は撚糸文である。胴部には2本組の直下隆帯と1本の蛇行隆帯を貼付けて懸垂文とするが、その間隔は



第 75 図 神明後遺跡 6 号住居跡出土土器 1 (1/4)



第 76 図 神明後遺跡 6 号住居跡出土土器 2 (1/4)

不同である。胎土には乳白色細砂粒若干と白色軟質物質・角閃石・橙色粒子を含み、焼成良好で暗褐色を呈する。

7は、小形深鉢で口縁から胴上部までと、直接接合しないが胴中部・底部片が残り、口径19.9cm・残存高10.7cm・復原高22.7cmである。口縁部は2本組隆帯で半楕円形と中間下部に山形の区画をつくり、山形の上方には隆帯の端部が渦巻文をつくりその一部を突出させる。

口縁の区画内と胴部の地文は撚糸文であり、頸部無文帯の一部に磨消し残りの撚糸文がある。胴部には、1本の隆帯による直下と蛇行の懸垂文がある。口縁文様帯・胴部文様共に6単位といえる。胎土には1mm前後の砂粒を多く含み、輝石・角閃石を少量含み、焼成良好で赤褐色～黄褐色を含む。外面の一部にタールが付着し、内面には剥離があり下半に煤が多く付着する。

8は、口縁部から頸部無文帯までの約1/4を残し、復原口径32.4cm・現存高14.6cmである。2本組隆帯で上方に半楕円形・下方に山形区画をつくり、山形の頂上の口縁側隆帯に接して渦巻文をつくり、その端部を前方に突出させる。胎土は7と大差なく口縁内側に磨き調整を加え、赤褐色～暗褐色を呈する。

9は、中空把手のあるキャリパー型深鉢で、口縁から胴下部まで接合し得たが、口縁部の60%・無文帯の60%・胴部の40%を欠損するが、復原口径32cm・現存高34cmである。

口唇は19mmの平坦面で、上方と前方に突出した中空で4孔をもつ把手があり、反対側にも把手があった可能性がある。口縁部文様帯は、隆帯によって短い楕円形と長い楕円形の区画がつくられ、横長区画の端部の内側隆帯は渦巻文となる。楕円形区画内は、半截管状工具による縦位の沈線列で充填される。

胴部の地文は撚糸文であり、2本組隆帯による直下懸垂文で胴部を縦位に3分割する。広い区画内に2本組隆帯を波打たせて左右を連結させその先端で渦巻をつくる。弧状の上部と、2ヶ所の最下部に直下懸垂文と蛇行懸垂文を各1本の隆帯で密接させてつくり、弧状部では2本の隆帯間に楕円状の刺突を加える。

10は、口唇から胴最上部までの約30%が残るキャリパー型深鉢で復原口径32cm・残存高15cmである。口縁

部文様帯は、大きい楕円状区画が接する部分が中空の橋状把手となって前方に張り出し、把手の左右端部隆帯は弧状を描き、隆帯端は区画内まで伸び、先端は渦巻文をつくる。把手部は口唇よりも突出し波頭部となる。楕円形区画の他方端は不整形区画となるが欠損のために全容は不明である。地文は口縁の区画内・中空把手の下部・胴部とも撚糸文である。頸部無文帯と胴部の境には隆帯をめぐるせ、胴部には蛇行懸垂文と2本組の直下懸垂文を交互に6単位配する。胎土は6と同様で、黄～暗褐色を呈する。

5～10は、中空の把手又は突出した渦巻文をもち、立体的装飾であることで共通し、2本組隆帯で区画をつくる点でも共通している。楕円区画文と渦巻文が平板化し、渦巻文が文様帯の中央に描かれるE I新式新相に先行することは明らかで、加曽利E I新式中相である。

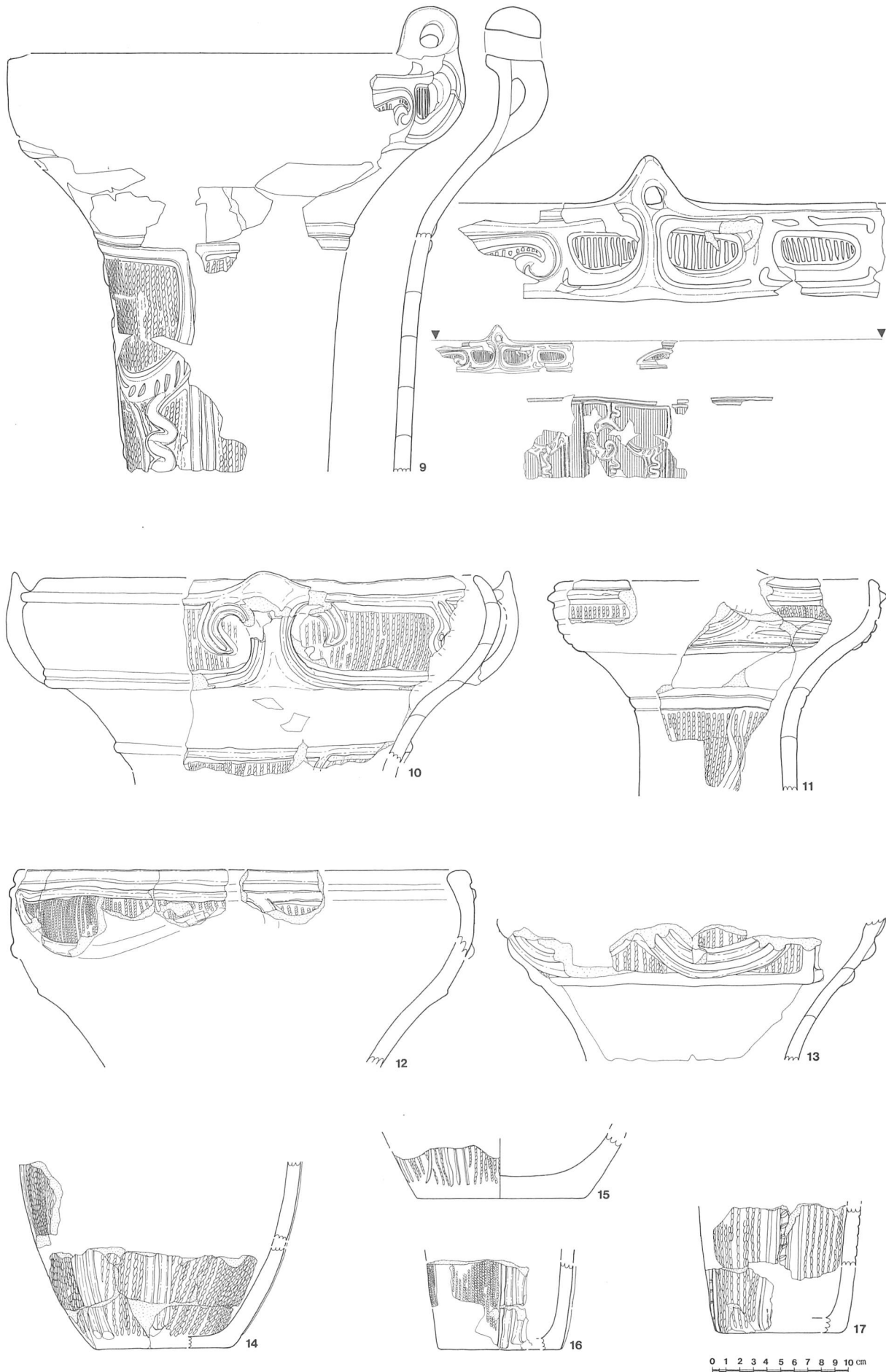
11は、口縁から胴部までの約2割を残す波状口縁小形深鉢で、推定口径22.6cm・現存高15.4cmである。口縁部文様帯は横に長い楕円形区画を上半につくり下半は2本の隆帯であり、渦巻文は文様帯の上下いっばいに描かれ、その上方が波頭部となり、地文は撚糸文である。胴部の蛇行懸垂文は2本の沈線で描かれ新相を示している。胎土には、乳白色砂粒と角閃石を含み、焼成良好で明褐色を呈する。

12は口縁部文様帯の約2割弱を残す平縁のキャリパー型深鉢で、推定口径33cmである。地文撚糸で区画文と渦巻文からなるが渦巻文の実態と文様帯の下半は不明である。胎土は11に近く赤褐色を呈する。

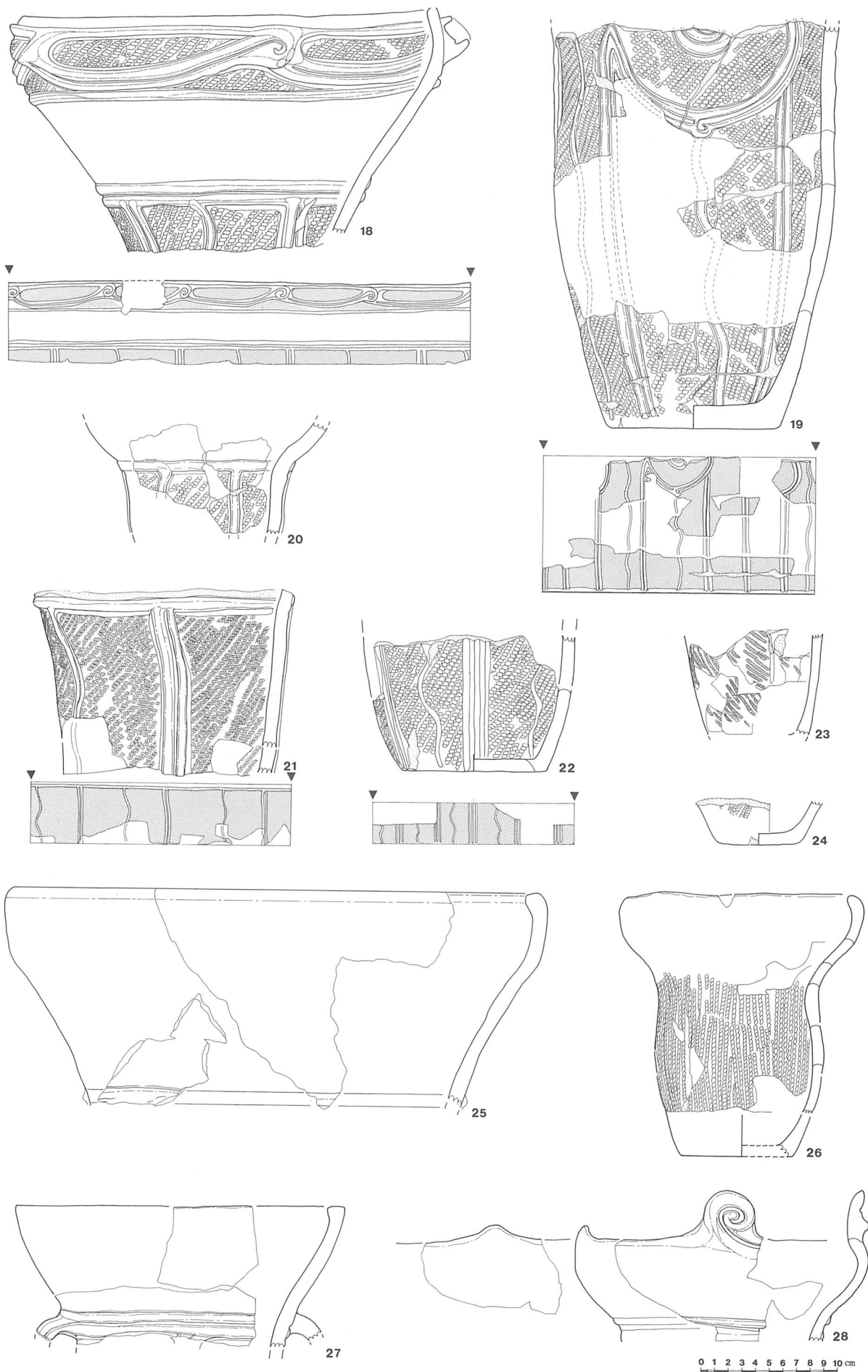
13は、口縁部文様帯の下半から頸部無文帯下端までの4割を残すキャリパー型深鉢で、推定口径は約30cm強である。口縁部文様帯は、2本組隆帯で上方に半楕円形区画・下方に山形区画をつくり渦巻文部は遺存しない。胎土は11と同様で暗褐色を呈する。

14は、胴中部から底部までの6割を残す大きい深鉢で、底径10cm・現存高13.6cmである。地文撚糸で低い隆帯貼付けによる2本組懸垂文を基調とするが2ヶ所は3本組隆帯である。内面に煤の付着が著しい。

15は、胴最下部と底部を残す大深鉢底で、底径12.4cm・現存高4.7cmである。撚糸文を地文とし、2本組の沈線による直下・蛇行懸垂文を入れる。



第 77 図 神明後遺跡 6 号住居跡出土土器 3 (1/4)



第 78 図 神明後遺跡 6 号住居跡出土土器 4 (1/4)

16は、胴下部から底までの6割を残し、撚糸文を地文とし2本組の隆帯による直下懸垂文6組を入れるが蛇行懸垂文を欠いている。

17は、胴中部から底までの約5割を残し復原底径9.2cm・現存高9.4cm。地文はL rの撚糸文で半截工具による2本組沈線を2本並べて垂下させ、その間に斜位に刻目を入れる。胎土には径1mmの白色砂粒と角閃石を多く含み、焼成良好で明るい明褐色を呈する。

11や15～17のように沈線による懸垂文をもつ新相のものはいずれも上層からの出土である。

18は、口縁から胴上部までをほぼ完存するキャリパー型深鉢で、口径30.4cm・現存高17.8cmである。口縁部文様帯は、2本組隆帯によって長い半楕円形区画を上方に、山形区画を下方につくり、その上方＝楕円区画間は突出した渦巻文となり、5単位につくる。渦巻文が前に突出すること、文様帯のうち口縁よりに位置することが特徴である。頸部無文帯と胴部は2本の隆帯で区画され、胴部は隆帯貼付けによる蛇行懸垂文と2本組の直下懸垂文5単位である。地文はL r縄文である。

胎土には、1～3mmの砂粒若干と多量の白色軟質物質・輝石粉末を含み、焼成良好で暗褐色を呈する。

19は、胴上部・中部の約半分と胴下部から底をほぼ完存し、底径12.2cm・現存高29.9cmである。地文はR L Lの前々段反撚による縄文で、隆帯貼付けによる胴部文様が著しい。胴最上部から底までの蛇行懸垂文の他は、2本組隆帯間の広い空間に、2本組隆帯を円弧状に回転して貼付ける。先端は渦巻文と想定しうるが胴最上部を欠失する。隆帯による円形回転文は5個あるが、細部は異なり、円形最下部から蛇行懸垂文を垂下させるものと、2本組直下懸垂文を入れるものがある。胎土は緻密で1～2mm程度の白色砂粒を約3%程度含み、焼成良好で、黒斑部を除いて赤褐色を呈する。18と19は加曽利E I新式中相である。

20は、無文口縁の小深鉢であり、口唇部と胴中部以下を欠失し、その間の約3割を遺存し、現存高8cm・胴基部径13.6cmである。口縁部は無文で弧状に上に開く。区画隆帯下の胴部は、R L縄文を縦に回転施文して地文とし、蛇行懸垂文と直下懸垂文を交互に入れる。懸垂文は1本の隆帯を貼付けて、両側に細い沈線を加

える。胎土には0.5mmの砂粒を多く含む。

21は、頸部無文帯より上部と、胴下部以下を欠き、胴上部径18cm・現存高13.7cmである。地文は、前段多縄・複節縄文で、隆帯による蛇行懸垂文と2本組隆帯による直下懸垂文を3単位につくる。懸垂文は隆帯の両側に沈線を入れる。胎土には1～2mmの砂粒を多く含み、焼成良好で赤褐色を呈する。

22は胴下部から底までを残す深鉢で底径10.8cm・現存高9.8cmである。地文はR L rの縄文を縦に右回りに重ねたもので、棒状工具による沈線で蛇行沈線1本と3本組の直下懸垂文を5単位につくる。胎土には1mm以下の砂粒を多く含み、内面におこげが付着する。

23は胴下部から底まで残すが底板を欠く。復原底径7.6cm・現存高8.5cmである。地文はRの素撚り縄文で、1本の沈線による直下懸垂文がある。

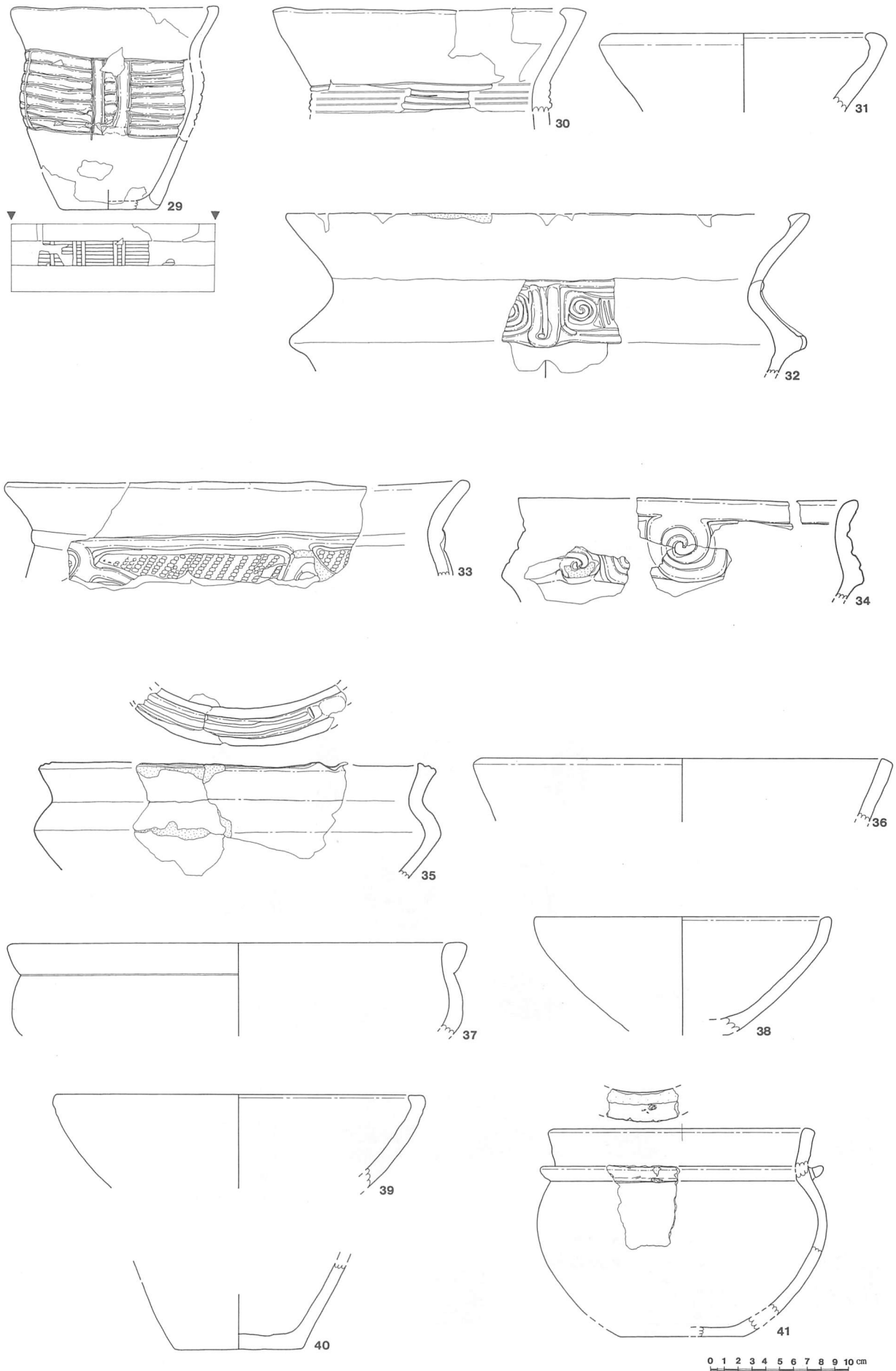
24は小深鉢の底部で、底径6.6cm・現存高3cmである。最下部は無文で、地文のL R縄文が僅かに残り残存部に懸垂文は見られない。

25は、無文口縁深鉢で、口縁から体部との区画隆帯までの約2割を遺存し、復原口径39cm・現存高16cmである。無文の口縁部は上に開くが、端部は僅かに内湾する。体部はほとんど遺存せず地文も不明であるが隆帯による懸垂文の基部が区画隆帯に接してごく僅かに残る。胎土には1～3mmの砂粒若干と白色軟質物質を多量に含み、焼成良好で外面は暗褐色を呈する。

26は、無文口縁の小深鉢で、口縁から胴下部までを遺存し、口径16.6cm・現存高16cmである。口縁部は上に開き端部が内湾する。地文は撚糸文でL rの撚糸を上から下へ左回りに重ねて縦位施文とする。体部には地文のみである。胎土には1mm以下の砂粒を多く含み、明褐色を呈する。内面上半には剥離が多く、下半には多量のおこげが付着する。

27は、無文口縁深鉢で胴基部までの3割を遺存し、復原口径24cm・現存高10.3cmである。無文の口縁部は上に開き、口唇上面は平坦となる。胴部との区画隆帯上から下方にかけて把手状突出があるが、端部や全形は不明で把手基部には沈線が入る。胎土には1mm程度の砂粒を多く含み、内面に煤の付着が著しい。

28は、突起のある無文口縁深鉢で胴部をすべて欠失し、口径20cm・現存高11cmである。上に開き端部がや



第79図 神明後遺跡6号住居跡出土土器5 (1/4)

や内湾する口縁には、大・小の突起がある。正面の突起が大きく突出した部分に沈線で渦巻文をつくり、頂は口唇より3.7cm突出する。反対側は山形の小突起で無文である。胴部との境には2本組隆帯をめぐらす以下は不明である。胎土には1～2mmの砂粒を多く含み輝石粉末と1～2mmの橙色粒子が目立つ。ナデ整形が著しく、焼成良好で暗褐色を呈する。

29は、無文口縁小深鉢で、口唇から底までの7割を遺存し、口径15.1cm・底径7.1cm・器高14.1cmである。口縁は上に開き上面は平滑面をもつ。胴部上半が文様帯で、胴下半は無文である。胴上半部文様帯は、半截管状工具で8本の沈線をめぐらせ、少し離して縦に2組の沈線を4単位入れ、その間を磨消して無文としている。胎土には1～3mmの砂粒・白色軟質物質・輝石を含み、口縁部の内外面と胴下半を磨き調整する。焼成良好で、上半は暗褐色・下半は明褐色を呈する。

30は、無文口縁深鉢で、胴最上部までを遺存し、口径23cm・現存高7.6cmである。上に開く口縁端は広い平滑面をもつ。胴最上部には、半截管状工具による沈線4本が残る。胎土は29に近く暗褐色を呈する。

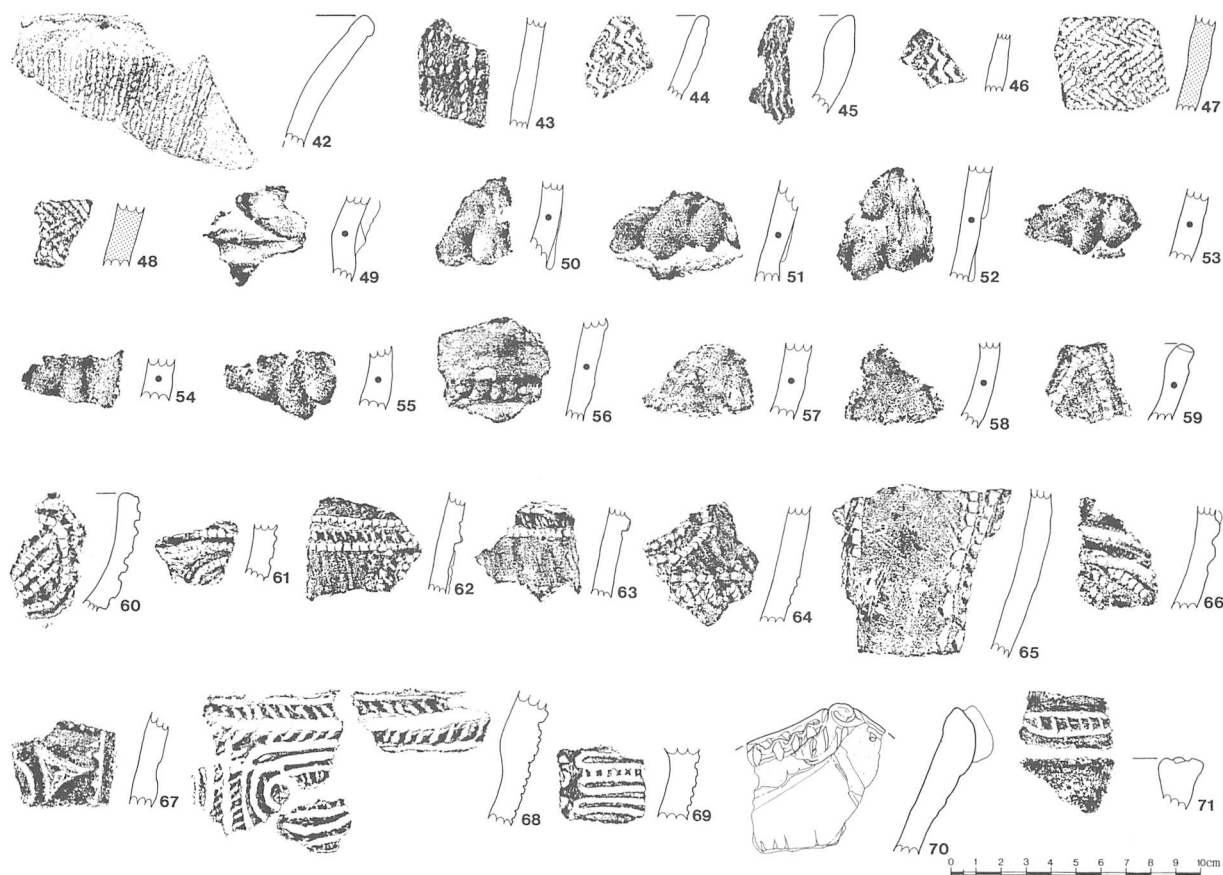
31は無文口縁小深鉢であるが胴部をすべて欠失しており、口径18cm・現存高5.7cmである。

32は、浅鉢の体最上部以下を欠失するが、口径38.4cm・現存高11.6cmである。外反する無文の口縁部の下に、内傾する文様帯がある。文様帯は、上と下の隆帯と2本組の縦位隆帯で長方形区画をつくり、区画内に縦の沈線を入れ、端部を渦巻文につくる。胎土には約1mmの砂粒と白色軟質物質を含み、焼成良好で暗褐色を呈する。口縁の無文部のほぼ全面を朱彩している。

33は、口唇から文様帯の上半までの3割を残す浅鉢で、復原口径33.4cm・現存高7.8cmである。外反する無文口縁下の文様帯は、隆帯で半楕円形を上側に山形を下側につくり、貼付隆帯の両側は沈線で撫でる。

地文はLRの前段多条の縄文である。胎土には3mm以下の砂粒と橙色粒子若干、白色軟質物質を多量に含み、焼成良好で明褐色を呈する。

34は、口縁から体最上部までの2割弱を残す浅鉢で復原口径24.5cm・現存高7.2cmである。外反する短い無文部下に文様帯があり、渦巻文と長方形区画文からなるが、区画文部は欠落地文も不明である。貼付隆帯



第80図 神明後遺跡6号住居跡出土土器6 (1/3)

による区画の端部が、隆帯裾の沈線と合体し渦巻文となる。胎土は33と近く黄～暗褐色を呈する。

35は、口縁から体部上半部までの2割弱を残す浅鉢で、復原口径29cm・現在高7.3cmである。外反する口縁の外面と屈曲内傾部は無文である。広くつくられた口唇は凹部を除いて、内側と外側に2本の沈線を入れ端部には直交する短い沈線を入れる。胎土には径1mmの白色砂粒若干と白色軟質物質を多量に含み、外面は平滑に調整され焼成良好で赤～茶褐色を呈する。

36は、外反する無文口縁をもつ浅鉢で屈曲部以下を欠失し、推定口径29cmである。体部までに内傾した屈曲部をもつ可能性大であり、破片は赤褐色を呈する。

37は、直立する口縁の口唇が肥厚する類の浅鉢で、体部は稜がなく僅かに膨らんで底に向かう。推定口縁部径33cm・現存高6.7cmであり黄褐色を呈するが、口唇上面・口縁の内外面に朱彩が残る。

38は、口縁から底近くまで残る小浅鉢で、復原口径21cm・現存高8.3cmである。口縁の区分のない類で暗褐色を呈す。胎土は35～38はほぼ同様である。

39は、口唇上面に平滑面があり、口縁と体部の区別のない浅鉢で、復原口径27cm・現存高6.7cmである。

40は無文の底部片で、底径9cm・現存高5.7cmであり、縦位のナデ痕跡があるが無文である。底には植物繊維の圧痕があるが編んでいない。赤褐色を呈す。

41は、口唇から底部まで接合し得るが全体の15%を遺存する有孔罎付土器で、復原口径18.8cm・現存高15.2cmである。口唇はやや外反し、幅約1cmの罎の基部に上下に貫通する小孔がある。罎下からやや膨らみ胴中部以下は球形に近く、復原底径8.8cmである。胎土は緻密で径1mmの砂粒若干と白色軟質物質・輝石・角閃石の紛失を含み、口縁から胴下部までヘラ磨調整が著しく、平滑である。焼成良好で黒斑部を除いて明褐色である。内外面ともに煤やおこげの痕跡は全く見られない。口唇の上面と外部の一部に朱彩の痕跡が残る。

6号住居の復原土器の特徴は4つある。1は口縁部装飾が立体で中空把手や渦巻文部が前に突出すること、5～10・18～20などがそうである。2は胴上部に隆帯を回転させて渦巻に至る文様帯をもつものが目立つことで、5・9・18が好例である。3は口縁部文様帯の区画内などに沈線が多用されていることである。

4は有孔罎付土器や浅鉢に朱彩が目立つことである。

1は加曽利EⅠ新式のうち中相が多いことを示しこれらが下層出土である事も重要である。2と3は、異系統地域との交流・影響を示している。4は集落内祭祀の存在を強く印象付ける。

覆土の土器（第80～84図）

早期の土器（42～46）

42は尖底深鉢の口縁部片で、口縁がやや肥厚する断面円頭状で、口縁下から縦位の撚糸文が密に全面に施文される。胎土には乳白色砂粒を含み焼成良好で茶～暗褐色を呈する。夏島Ⅱ式。43は縦位に撚糸文を条間をやや空けて施文する胴部片。胎土・焼成は42に近く器厚7mm。稲荷台式といえる。

44は、尖底深鉢形土器の口縁を含む細片で、口縁から全面に山形押型文を縦位に施文する。胎土に白色粒状物質を含み明赤褐色を呈する。45は口唇内面に削りを伴い山形押型文を縦位に施文し赤褐色を呈する。44～46は細久保式に含まれ、樋沢式に後続するもの。

前期の土器（47・48）

47・48ともに羽状縄文をもつ胴部片で、胎土に多量の植物繊維を含んでいる。黒浜式古相といえる。

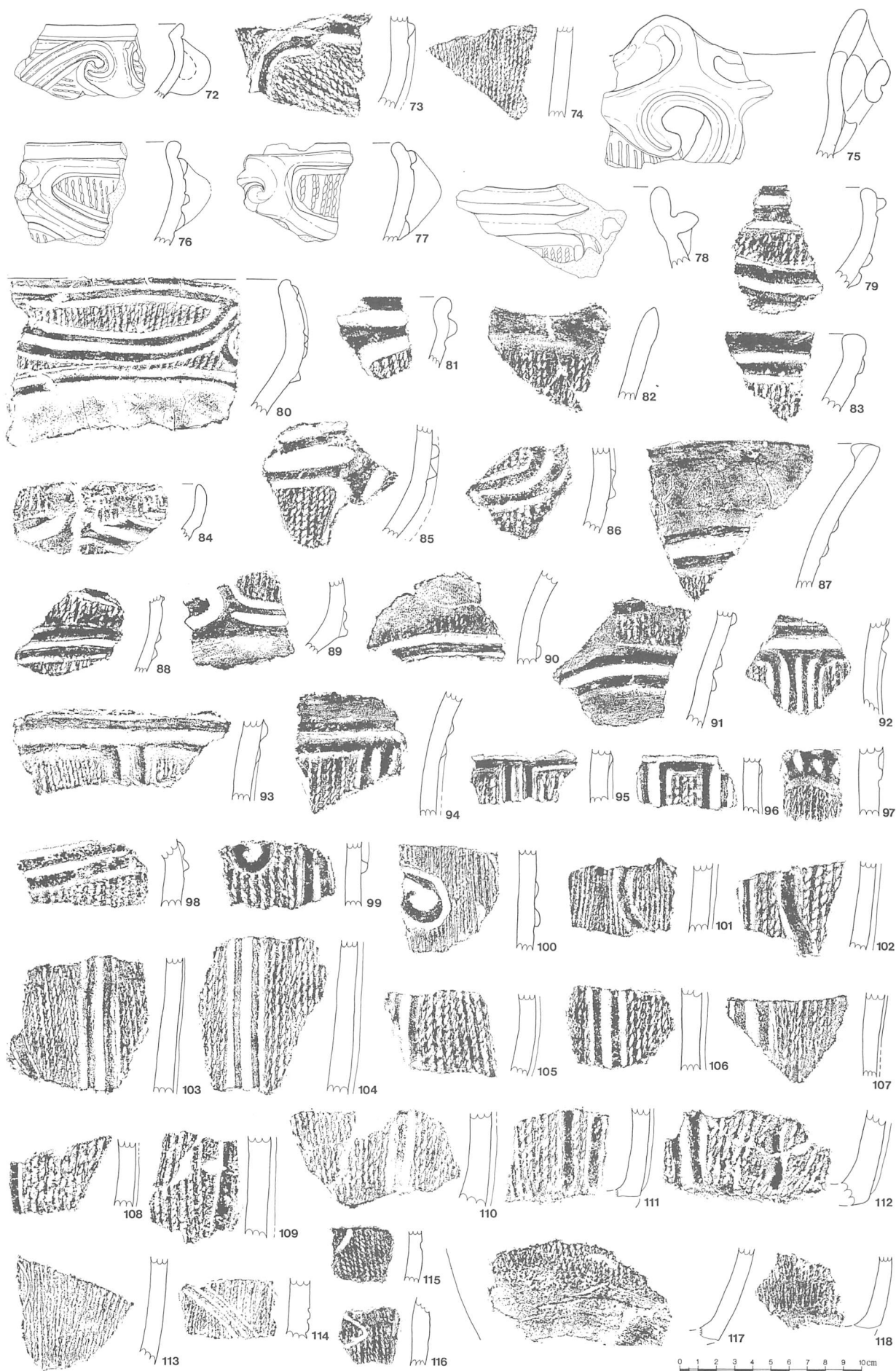
阿玉台系土器（49～58）

49は口縁部文様帯下部の破片で、断面三角形の区画隆帯がある。50～56は胴下部片で顕著な指頭圧痕が残る。57・58の胴部片は浅い指頭圧痕が残る。いずれも胎土に金雲母を多量に含み、地文はなく暗褐色ないし黒褐色を呈する。49～56は阿玉台Ⅰb式。57・58は阿玉台Ⅱ式といえる。

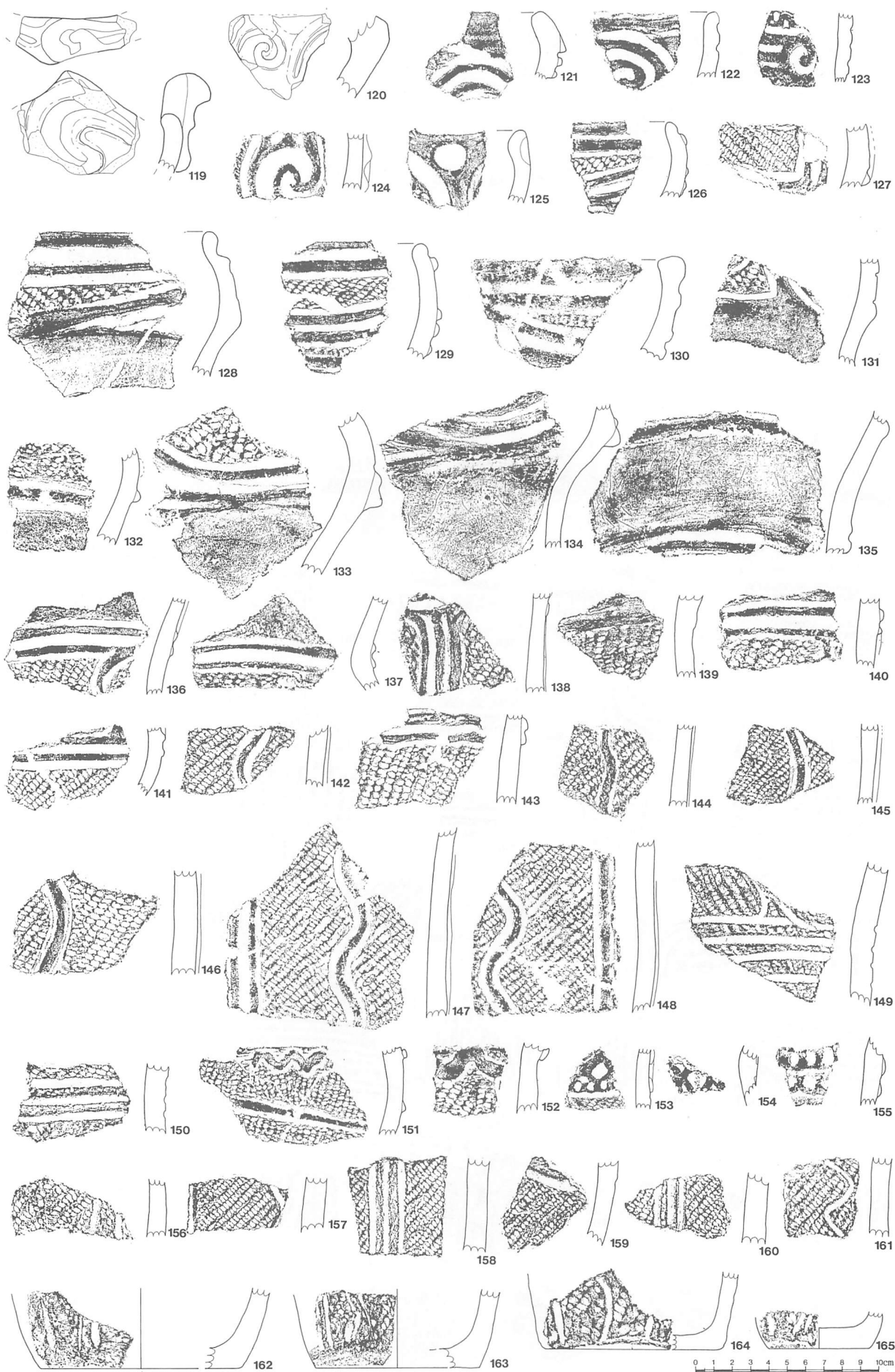
貉沢・勝坂系土器（59～71）

59は波状口縁の頂部片で、口縁沿いと頂から縦位の単列の角押文を入れる。60・61は口縁部文様帯の破片で、61は区画沿いの角押文のほか区画内を斜位の角押文列で充填する。62は胴中部片で隆帯とクランク状懸垂文沿いに角押文を入れ、隆帯上面は押引きによる刻目が入る。63も62と同部位の破片。65は胴下半の大型片で62と同様の隆帯と角押文がある。64は口縁部文様帯下半部片で、区画沿いの角押文のほか押引き技法による波形文がつくられる。59～65は貉沢期のもの。

66は文様帯下部片で、隆帯沿いに複列の幅広押引文を加える。勝坂Ⅰ式後半であろう。



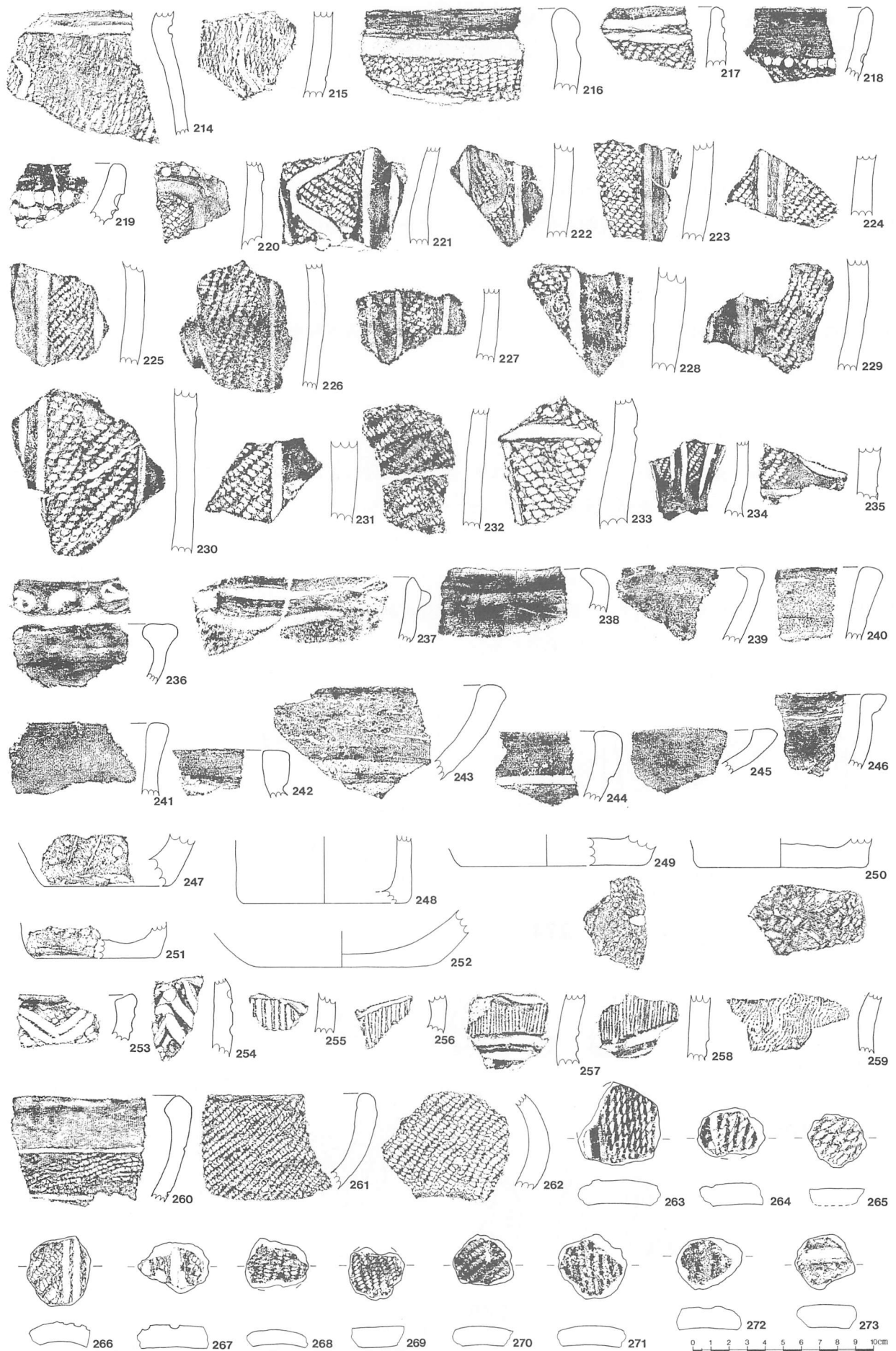
第 81 図 神明後遺跡 6 号住居跡出土土器 7 (1/3)



第 82 図 神明後遺跡 6 号住居跡出土土器 8 (1/3)



第 83 図 神明後遺跡 6 号住居跡出土土器 9 (1/3)



第 84 図 神明後遺跡 6 号住居跡出土土器 10 (1/3)

67は筒形深鉢の胴上部片で、沈線で縦長区画を作り区画縁に刺突を加え、区画内に弧状文と三叉文を入れる。68は上面に刻みをつけた貼付隆帯で方形区画を作り、区画内は3本の沈線で長半月形を作り斜位の刻目を入れ、一つおきに刺突列を入れる。70は波状口縁の波頭部で、口縁沿いの隆帯に交互刺突を加え、波頭は沈線で渦巻を作る。71は小浅鉢で沈線間に深い刻目を入れる。沈線内には朱が残る。

67～71は、末期に下らない勝坂Ⅲ式である。

中期後半の土器（第81～84図）

第81図は、加曽利E I期のうち地文撚糸文のもの。

72は、区画文と渦巻文の連結部が大きく突出して中空突起となり、区画内の撚糸文は横位に施文される。

73は大深鉢の口縁文様帯片で撚糸文は斜位施文である。74は小さく密な粒の撚糸文を深く全面に施文した胴部片である。72～74は加曽利E I古式である。

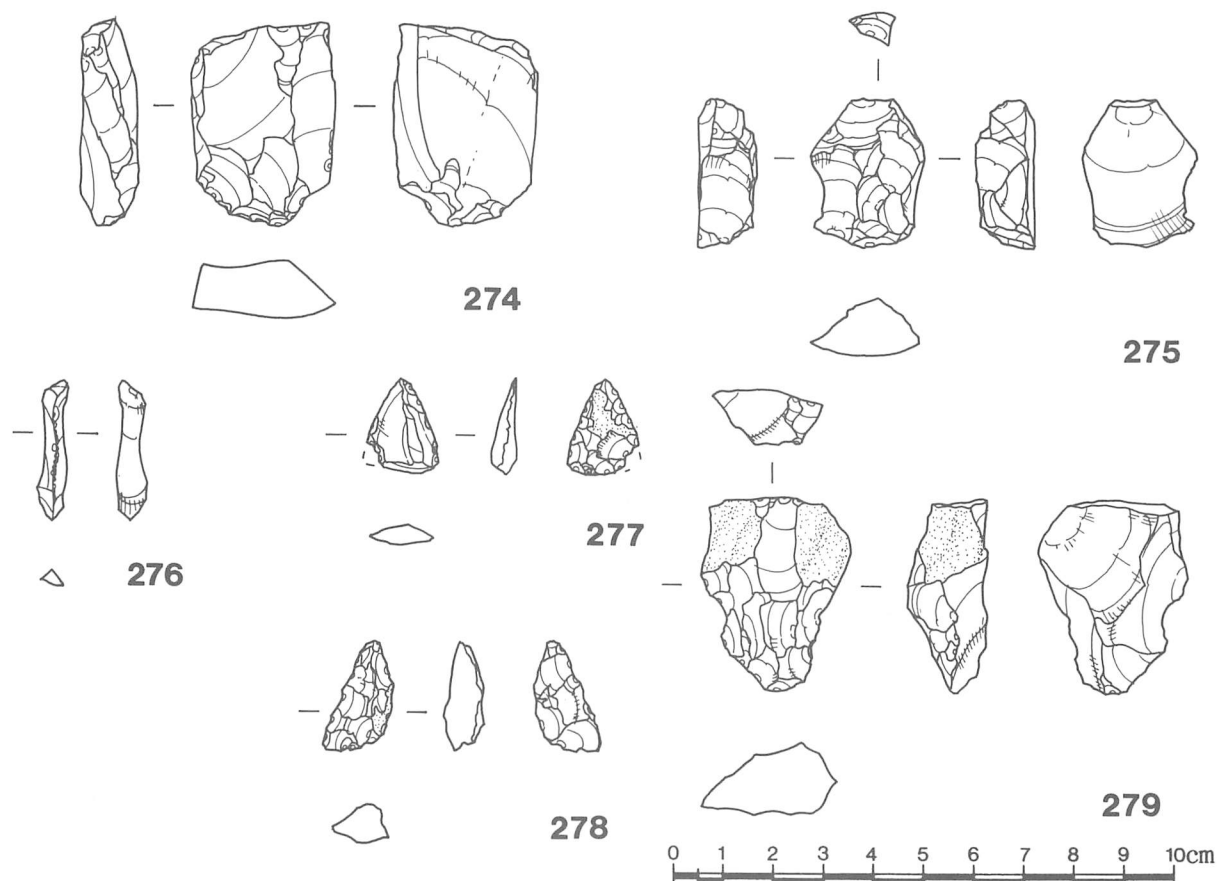
75は、大形波状口縁深鉢の波頭部で、波頭下は大きく突出し突起中空部縁は渦巻文とする。突起内中空部の器面には撚糸文が残り、区画内には沈線列がある。

76～78は、渦巻文と区画内接合部が前に突出する平

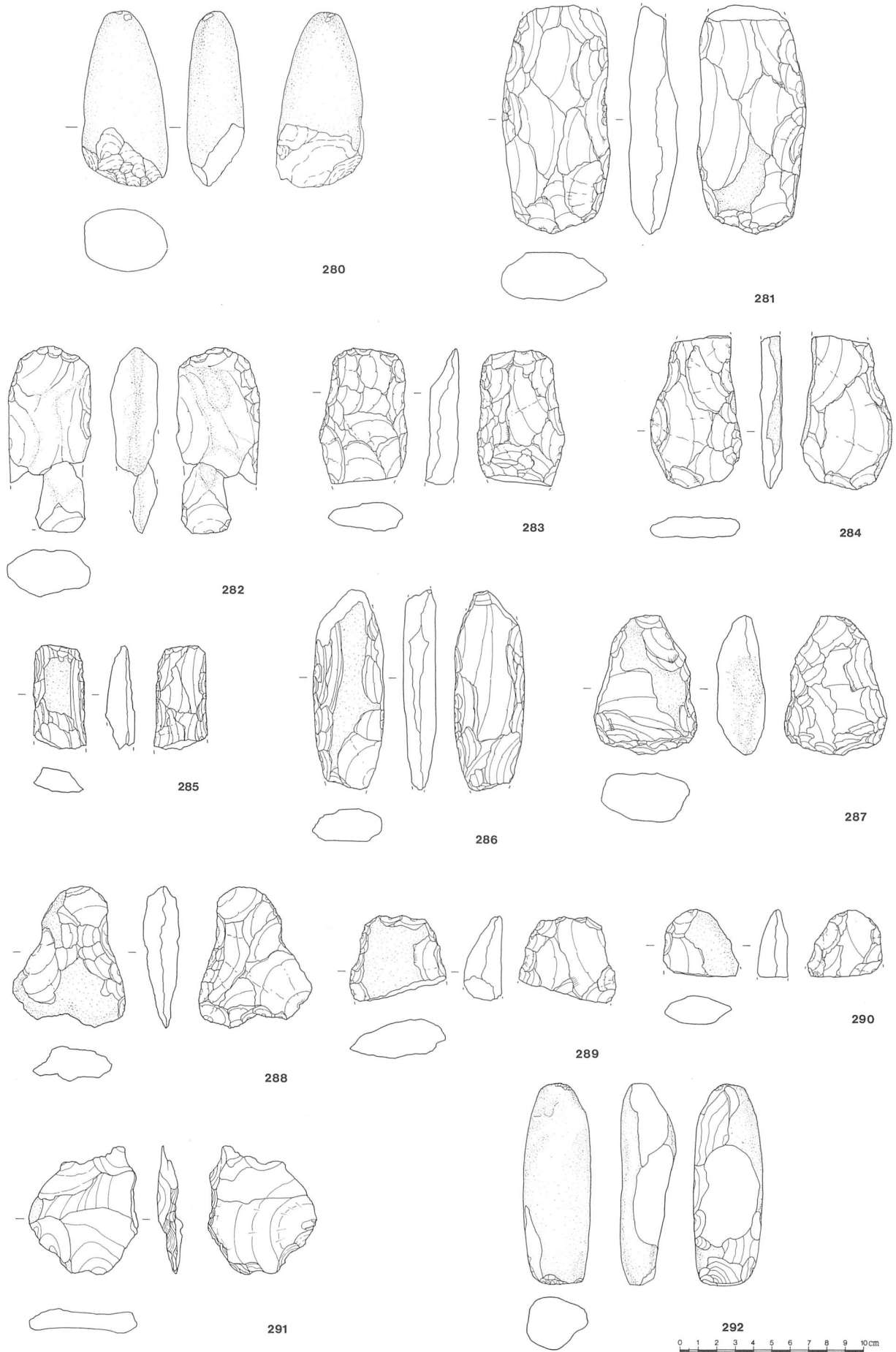
縁の口縁部片であり、79もこれに近い。80は2本組隆帯で区画文を作る口縁から頸部無文帯までの中形深鉢である。81～84は80に近い構成の口縁であるが82は波状口縁、84は小形深鉢である。87は上に大きく開く無文口縁深鉢で、2本の隆帯で胴部と区分する。85・86・88は口縁文様帯破片で、89～91は文様帯から頸部無文帯にかけての破片。92～96は胴上部片で、隆帯貼付けによる2本組直下懸垂文の基部。97～100は地文上に隆帯貼付けによる渦状・弧状を作る。101と102は隆帯による蛇行・直下懸垂文を、103～110は貼付隆帯による直下懸垂文をもつ胴部片。111と112はこの類の低部。113～116は沈線で懸垂文を描く新相のもの。117と118は地文の撚糸文のみが残る底部片である。

第82図は、渦巻文など口縁部文様帯で地文不明のものと、加曽利E I新期の地文縄文の類である。

119は、波頭部頂を肥大させ、全面と口唇上面に渦巻文を描く。120は突起した口唇部頂に渦巻文を描いた部分が剥離したもの。121～124は渦巻文部のみの破片。126と127は隆帯による区画文をもつ深鉢の口縁部文様帯で129と130も同様である。128は口縁部から頸部無文



第 85 図 神明後遺跡 6 号住居跡出土石器 1 (2/3)



第 86 図 神明後遺跡 6 号住居跡出土石器 2 (1/3)

帯にかけてのもの。131～134 は口縁文様帯下部から無文帯にかけての破片。135 は頸部無文帯部全体を残す。136～141 は無文帯から胴上部にかかる破片で隆帯による蛇行・2 本組直下懸垂文をもつ。142～148 は蛇行懸垂文部分の破片。147 と 148 は 2 本組直下懸垂文と蛇行懸垂文 4 単位となる大形片。149・150 は胴部に沈線多用する。151～155 は頸部に横位の貼付蛇状文をもつ前 2 者と斜格子文を貼付ける類である。156～161 は沈線による懸垂文をもつ胴部片で、162～165 は同構成の深鉢底部である。151～155 は曽利系の要素を含み 156～165 は加曽利 E I 期のうち新相である。

第 83 図は、地文を沈線・条線とする類である。

166～168 は、楕円形区画と渦巻文で口縁部文様帯をつくり、区画内を縦位の沈線列で充填する。区画の接合部は前方に突出して中空部をつくり、上方に突出して口縁の波頭部となる。渦巻文は口唇側・頸部側の隆帯に付着している。168 は頸部無文帯を含み 169・170 は中空の把手状部の破片である。166～170 は加曽利 E I 新式の内、古相または中相で、新相に下らない。

171 は、区画内に斜位の沈線を入れる口縁部片。172・173 は口縁部文様帯片、174～181 は口縁文様帯下部から頸部無文帯にかけて、頸部無文帯下部から胴上部にかけての破片で、区画内・胴上部ともに列状沈線が全面的に描かれるという共通性がある。

182～186 は浅鉢の口縁部であり、184 は沈線で重弧文が描かれ口唇上にのび、口唇から蛇行懸垂文を垂下させる。186 は口縁内側にも沈線列を斜位に施文する。

187～192 は、太い沈線列を地文とする胴部片であり 193～196 は太い沈線で肋骨文、細い沈線で綾杉文を描く。197 と 198 は沈線が重なり、199・200 は細い沈線列を地文とし、2 本組沈線を垂下させ中を刺突する。201 は横位の沈線列に刻目を部分的に入れる。

202 は半截竹管による波状・直線の沈線間に刺突文を入れる。203 と 204 は、地文沈線で貼付隆帯の懸垂文が加わる。205 と 206 は細い沈線を地文とし、隆帯上を押圧・沈線による不定形線を入れる。207 は口縁下に 2 本の沈線を入れる他は細い沈線列をもつ深鉢口縁部。

208～210 は地文条線の口縁部片で、211～213 は地文条線の胴部片で、沈線による懸垂文をもつ例もある。

第 84 図は加曽利 E II 期・無文浅鉢・連弧文とそれ以

降の土器、土製円板である。

214 と 215 は、撚糸文を地文とし沈線による蛇行・直下懸垂文をもつもので、加曽利 E II 期古相である。

216～219 は、地文縄文で、沈線や円形刺突文をめぐる口縁部。221・222 は沈線による蛇行懸垂文と直下懸垂文をもつ古相。223～235 は、地文縄文で磨り消し手法を伴う懸垂文をもつ胴下部片である。

236 は口唇上面に渦巻文を持ち、237 は隆帯を持つ。

238～246 は無文浅鉢の口縁部で、242・244 は口縁の直立部のある浅鉢。247～251 は深鉢の無文底部で、249 と 250 の底には網代痕が残る。252 は浅鉢の底部。253 と 254 は地文縄文で連弧文をもつ。255～258 は地文条線で連弧文をもつ類である。

259 は縦位の弧状条線をもち加曽利 E III 期に近い。

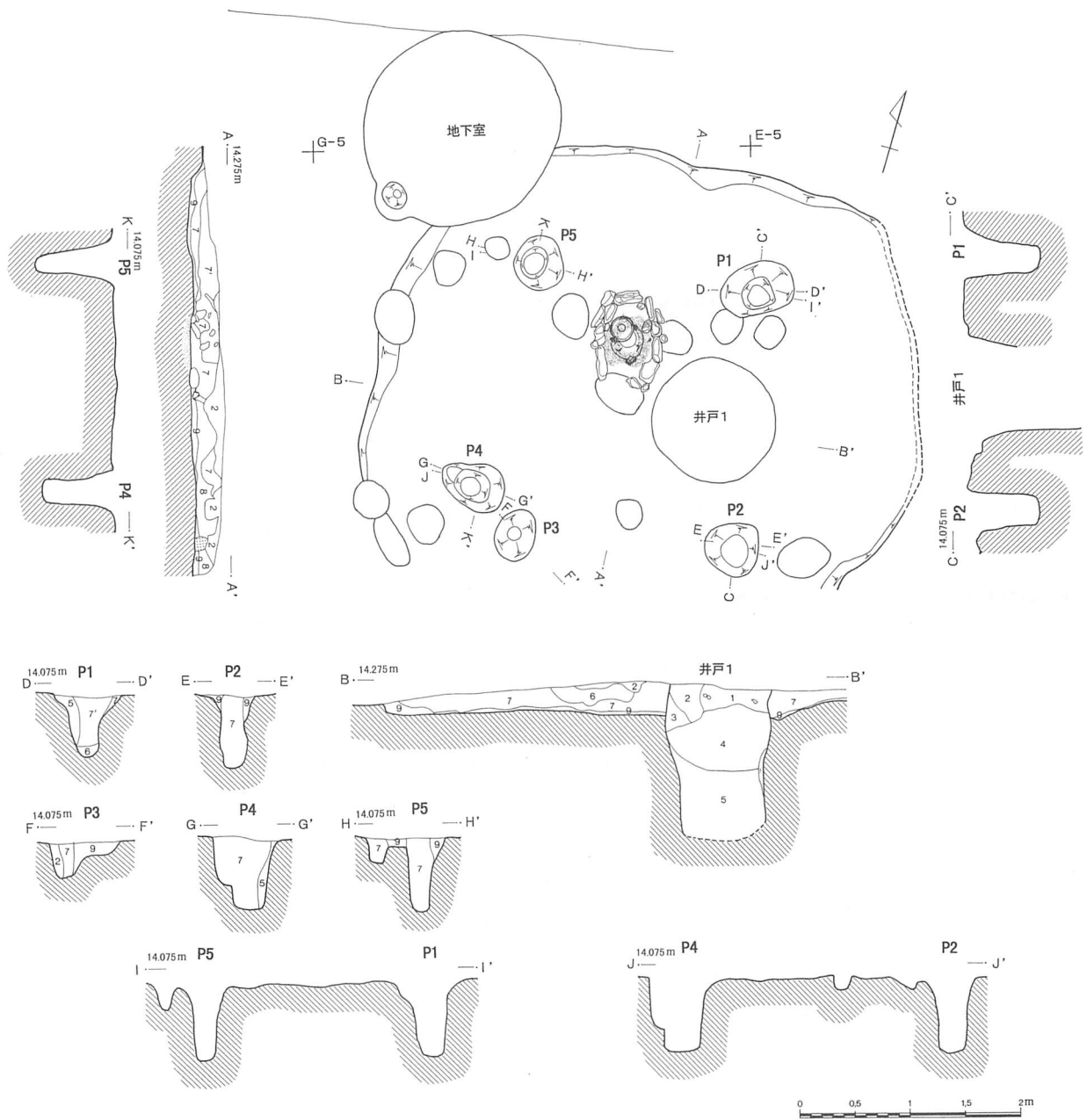
260 は、細縄文を地文とし、無文口縁で 2 本の沈線による地文の横位分断が行われている。261 と 262 は共に細縄文の密な全面施文で後者は碗形土器の胴部片。

263～273 は土製円板であり、破損部を除いて側面調整は明瞭である。263～265 の地文は撚糸、265～290 は地文縄文、271 は地文条線、272 と 273 は無文である。263 が隆帯による懸垂文をもち E I 新期、266 と 267 が沈線による懸垂文をもち加曽利 E I 期新相～E II 期古相のほかは細分困難だが加曽利 E I ～II 式であろう。

【時期】 炉体土器及び埋甕から、旧住居は加曽利 E I 新式の古相、新住居は加曽利 E I 新式であるが、中相か新相か不明である。

第25表 神明後遺跡 6号住居跡出土石器一覧表 単位 (cm・g)

No.	材質	種類	長さ	幅	厚さ	重量
274	チャート	彫器	4.0	2.9	1.1	16.1
275	黒曜石	石核調整剥片	2.9	2.3	1.2	7.3
276	黒曜石	剥片	2.7	0.6	0.6	0.5
277	チャート	石鏃未製品	1.9	1.5	0.5	1.0
278	黒曜石	調整剥片	2.2	1.2	0.8	1.5
279	チャート	調整剥片	3.9	2.9	1.6	16.5
280	緑色凝灰岩	磨製石斧	9.7	4.7	3.1	211.6
281	砂岩	打製石斧	12.5	5.8	2.6	250.7
282	クイソード	打製石斧	10.1	4.4	2.5	104.6
283	ホルンフェルス	打製石斧	7.4	4.3	1.6	75.5
284	粘板岩	打製石斧	8.3	4.8	1.2	65.1
285	粘板岩	打製石斧	5.7	2.8	1.6	31.8
286	緑泥片岩	打製石斧	10.9	3.8	1.8	112.9
287	粘板岩	打製石斧	7.6	5.6	2.6	139.2
288	砂岩	打製石斧	7.7	6.0	2.0	69.9
289	ホルンフェルス	打製石斧	4.7	5.3	2.1	54.3
290	ホルンフェルス	打製石斧	3.6	4.1	1.6	27.1
291	砂岩	打製石斧	6.9	5.9	1.2	44.8
292	緑色凝灰岩	敲石	11.0	3.7	3.0	173.6



1. 黒褐色土(黒色土+褐色土). 締り無. 粘性無
2. 暗茶褐色土. 締り無. 粘性無. 褐色土に茶色土混入・ソ
フトローム混入
3. 暗褐色土. 締り無. 粘性無. ソフト粒・ソフトローム混入
4. 黒褐色土. 締り無. 粘性無. 砂質. ソフトローム混入
5. 黒色土. 締り無. 粘性無
6. 黒褐色土. 締り弱. 粘性無. ローム粒少量

7. 暗褐色土. 締り弱. 粘性無. ロームが斑状に混入. 炭化
粒混入
7. 黒褐色土. 締り有. 粘性無. 炭化粒7層より多量. 焼土粒
少量
8. 黒褐色土. 締り有. 粘性無. 炭化粒7層より多量
9. 黄褐色土. 締り弱. 粘性弱. 黄褐色土主体. 7層土が斑
状に混入

第 87 図 神明後遺跡 7 号住居跡 (1/60)

④ 7号住居跡

【位置】調査区の南東部、さかい川の南60mに位置する。約2m東に4号住居跡、約3.5m北に5号住居跡、約2m北西に6号住居跡がある。

【形状】住居の東から南にかけて削平を受け、遺存状態は悪い。形状は円形を呈していると思われる。規模は検出した部分の最大径で4.98mを測り、確認面から床面までの深さは18cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。床面は平坦。

【炉】住居中央北寄りにある。石囲い炉で、浅鉢が炉の中央に埋設される。石囲いは95×71cmの範囲を約10cm程掘り込んだ中に、細長い石を85×67cmの楕円形に組んで作る。炉の中央は49×46cmの範囲が赤化する。炉体土器(第90図1)は炉のやや北側に置かれる。中央にピットがあり29×25cmで深さ35cm。ピット壁面も赤化する。

【柱穴】P1・2・4・5が主柱穴の4本柱。主柱穴間の距離は205～250cm。

第26表 神明後遺跡7号住居跡ピット一覧表 単位(cm)

No.	確認面径	底径	深さ	備考
1	67×47	20×20	71	楕円形 主柱穴
2	50×50	30×25	67	円形 主柱穴
3	47×36	13×12	35	楕円形 主柱穴
4	60×43	19×18	67	卵形 主柱穴
5	50×45	20×20	68	円形 主柱穴

【遺物出土状況】炉を中心に遺物が出土した。削平のため周辺部の出土が少ない。

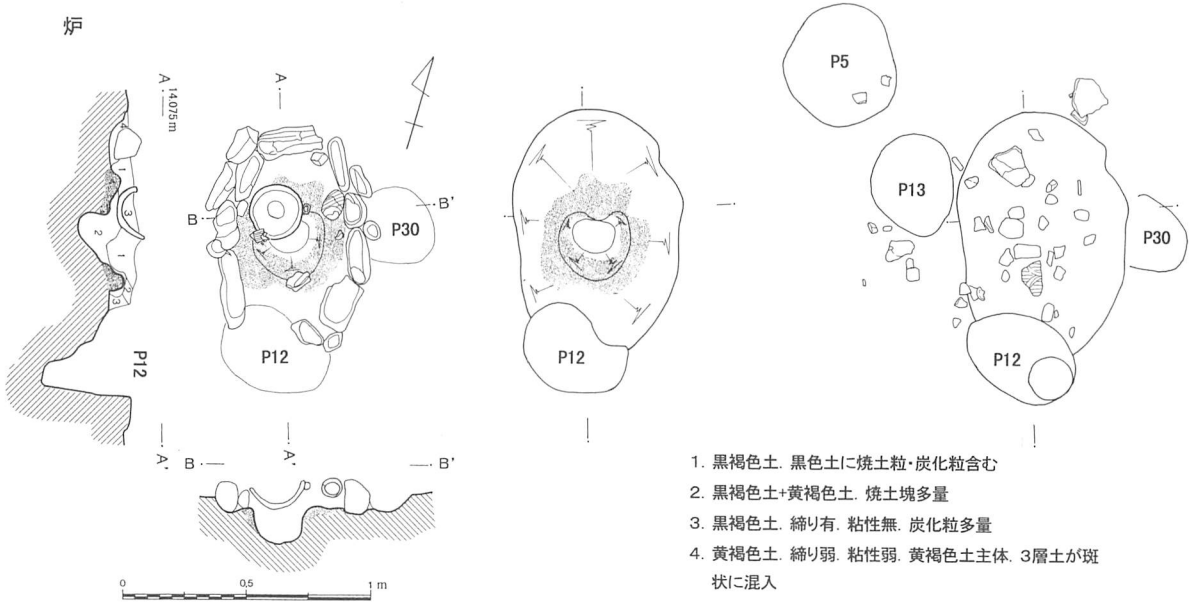
【出土遺物】(第90～95図)

復原土器(第90図)

1は、炉内に正位埋設された無文の小浅鉢で2個の小波頭を除いて完存する。口径21.2cm・底径7.5cm・器高8.5cmで口唇上面を平坦につくる。胎土に白・茶色細砂粒・橙色粒子を含み、口縁内外を横ナデ整形し、焼成良好で、黒斑部を除いて明るい茶褐色を呈する。

2は、炉のそばやや上方から横位で出土した小深鉢の胴下部～底の部分で、底径6cm・現存高10.4cmである。短い原体によるLR縄文を地文とし、2ヶ所にラフな縦位の磨消し痕跡がある。胎土に白色・乳白色の細砂粒・白色砂粒・橙色粒子を含み、焼成不良でもろく、暗い赤褐色を呈する。

3は、口縁から頸部無文帯上部までの1/6が残り、復原口径31cm・現存高11cmであり、口唇に接する渦巻部と区画部が接する部分が前と上に突出し中空部と波頭部をつくる。地文はLR縄文である。胎土には白色細・微砂粒・角閃石と輝石粉末・橙色粒子を含み口縁内面はへう調整されている。焼成良好で黒斑部以外は黄褐色を呈する。加曽利EI新期中相であるが、上層出土であり、住居の時期を示すものではない。



第88図 神明後遺跡7号住居跡炉(1/30)

覆土の土器 (第91~94図)

4~16は地文撚糸の土器片である。4は2本組隆帯で区画文主体の口縁部文様帯をつくり、頸部無文帯が続く。5は文様帯中部、6と7は下部の小片で、8は頸部無文帯につづく。9は頸部無文帯から胴上部の大

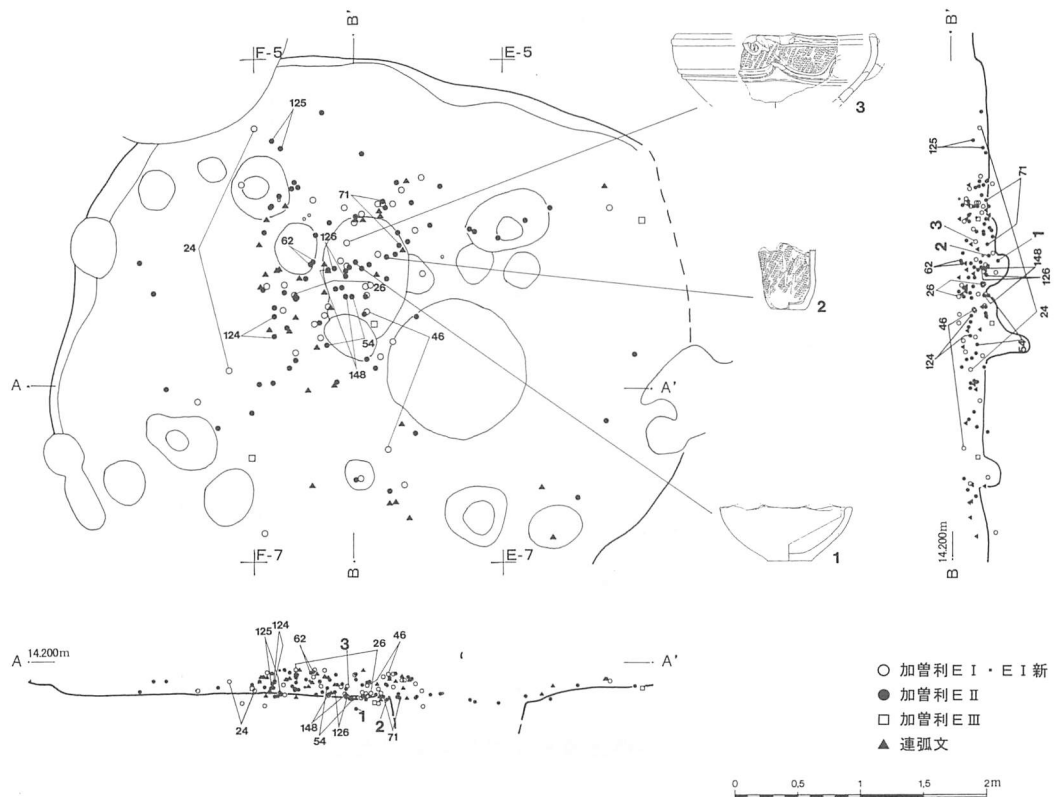
形片で、2本組隆帯による懸垂文を加えている。10~13は地文撚糸文のみの胴片で、14~16は隆帯貼付けによる蛇行・直下懸垂文を含む。

17と18は、渦巻文部のみの口縁片で、19は口縁部文様帯の区画内を沈線列で埋める。

種類別



時期別



第 89 図 神明後遺跡 7 号住居跡遺物出土状況 (1/60)

20～22は、頸部に細い粘土紐を蛇状に横位に貼付ける類で、20は撚糸・21は沈線・22は縄文を地文とする代表で曽利系の可能性大である。

23～37は、地文縄文の類で、23と24は口縁部、25～27は無文帯部片である。28～37は、直下懸垂文または蛇行懸垂文を隆帯貼付でつくる類の部分片。

38と39は区画隆帯と無文帯のみの小片の代表。

40～42は地文を沈線とし無文帯をもつ類である。

45は口縁文様帯の区画内に粗い条線を残し、43は列点下に隆帯をめぐらせ、地文条線のもの。44・46～48は地文条線で、隆帯による蛇行懸垂文をもつ胴部片。

第92図は加曽利EⅡ・併行期の地文撚糸・縄文の類である。49は地文撚糸文で、磨消を伴わない沈線による蛇行懸垂文をもつもの。50～53は、口縁下に沈線をめぐらす小深鉢の口縁と同文様帯片で、52には連弧文が加わる。54と55は、大深鉢の胴部片で、胴部に直線・弧状沈線を多用する異系統の土器。56～61は、地文撚糸のみと沈線による懸垂文の胴部片。62は同類の底部。

63～91は地文縄文で、63～70は口縁に沈線のみと刺突文を加える中・小深鉢片。71～82は、沈線による懸垂文をもつが磨消を伴わない類。83～90は、懸垂文に磨消手法を伴う類。91は同類の底部。

92～102は、沈線を地文とする類である。92は渦巻文と区画文をもつ口縁で区画内は沈線列で充填する。94は剥離した把手部。99～102は、胴部の貼付隆帯上に押圧する類。103は太い条線を地文とし、連弧文を加えるもの。104～134は地文条線の一類である。104は、2本の

沈線内に交互刺突文を加え、107～114は口縁下に沈線を入れるのみの小深鉢である。115～126は沈線による懸垂文を伴う類である。123は口縁から胴上部の大形片で、胴上部に3本沈線による連弧文を加える。127～132地文条線のみ破片。この類の底部133・134のうち133には磨消懸垂文がある。

135～156は浅鉢の口縁部であるが、135は口唇に刻目を入れ136は口唇上面に沈線を入れる。浅鉢の無文帯部片はすべて割愛した。157～159は胴中部の沈線片。160～163は深鉢、164は浅鉢の底部片で21片を割愛。

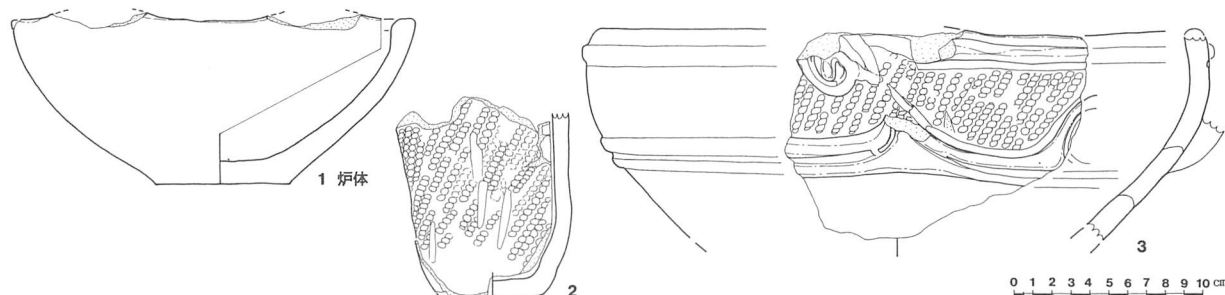
165～168は、地文縄文で弧状の磨消を伴うもので、165の裏面には近世の鉄片が付着する。169は逆U字状に地文を残して他を広く磨消す。165～169は加曽利EⅢ期のもの。170は薄手のもので無文地に沈線で格子目文を入れる堀之内式のもの。

171～173は土製円板で、破損部を除き側面調整入念で、地文撚糸のみ・撚糸と連弧文・地文条線である。

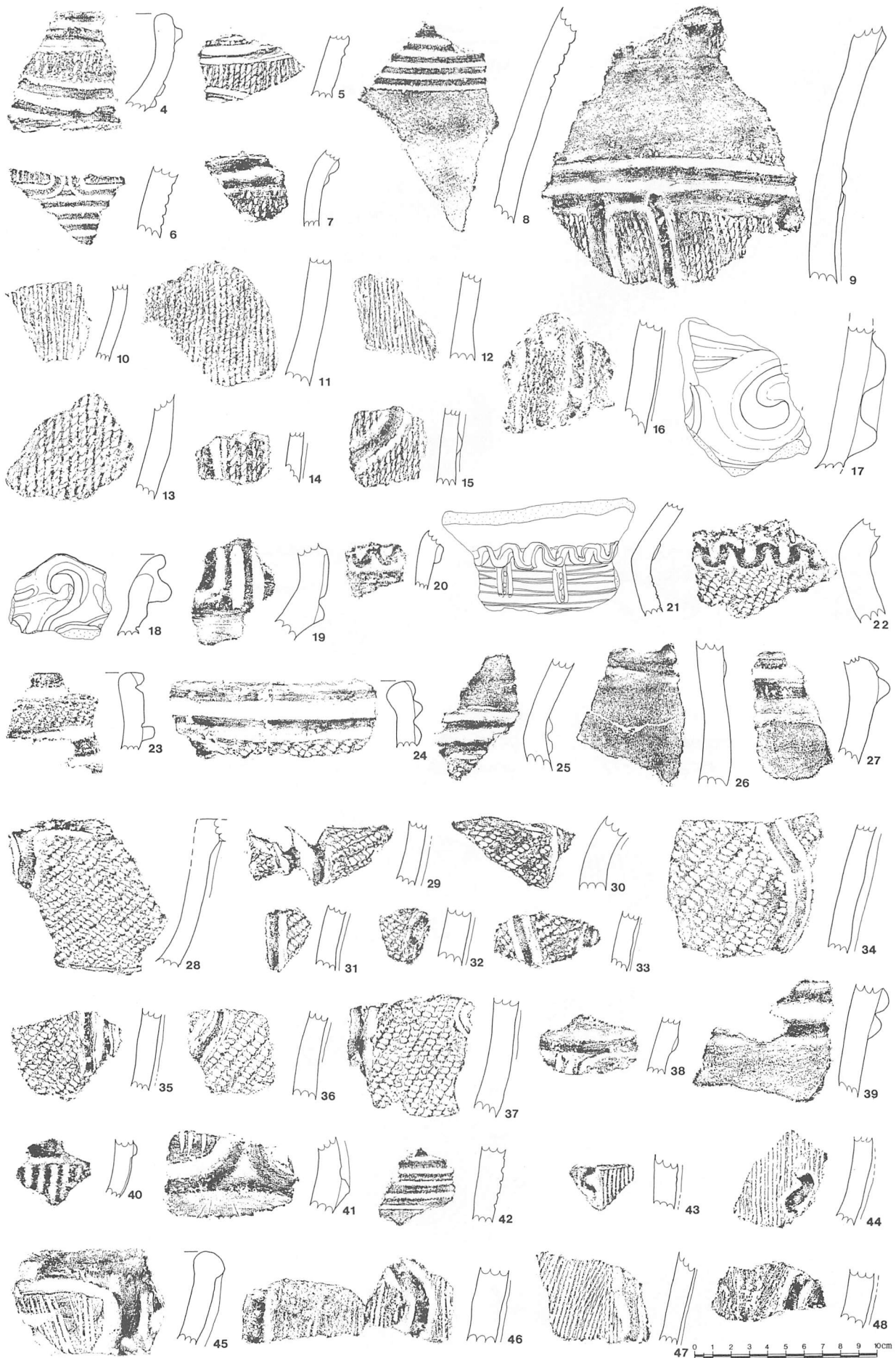
【時期】 住居の時期は炉体・炉付近土器から加曽利EⅡ期であるが、住居の特徴は地文に沈線・条線をもつものが1/3以上を占めることである。

第27表 神明後遺跡7号住居跡石器・鉄製品一覧表 単位(cm・g)

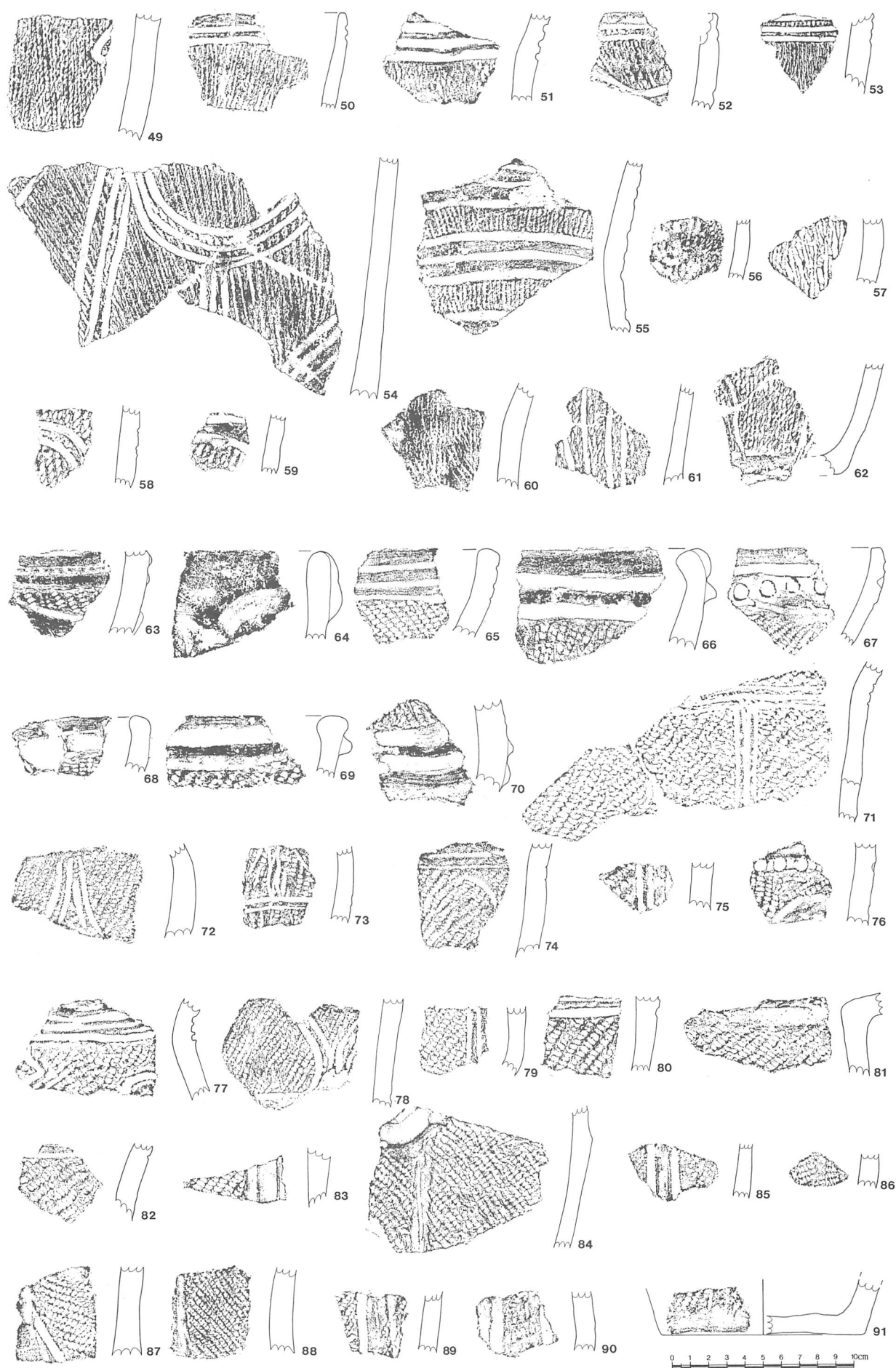
No.	材質	種類	長さ	幅	厚さ	重量
174	黒曜石	細石刃	2.7	0.5	0.3	0.4
175	緑色凝灰岩	磨製石斧	5.1	3.1	2.8	63.7
176	砂岩	打製石斧	10.8	5.6	2.0	163.3
177	砂岩	敲石	13.2	3.9	2.0	154.4
178	凝灰岩	砥石	11.5	2.7	1.5	68.4
179	鉄	?	2.5	6.5	0.7	11.8
180	鉄	釘	5.6	0.7	0.7	3.8



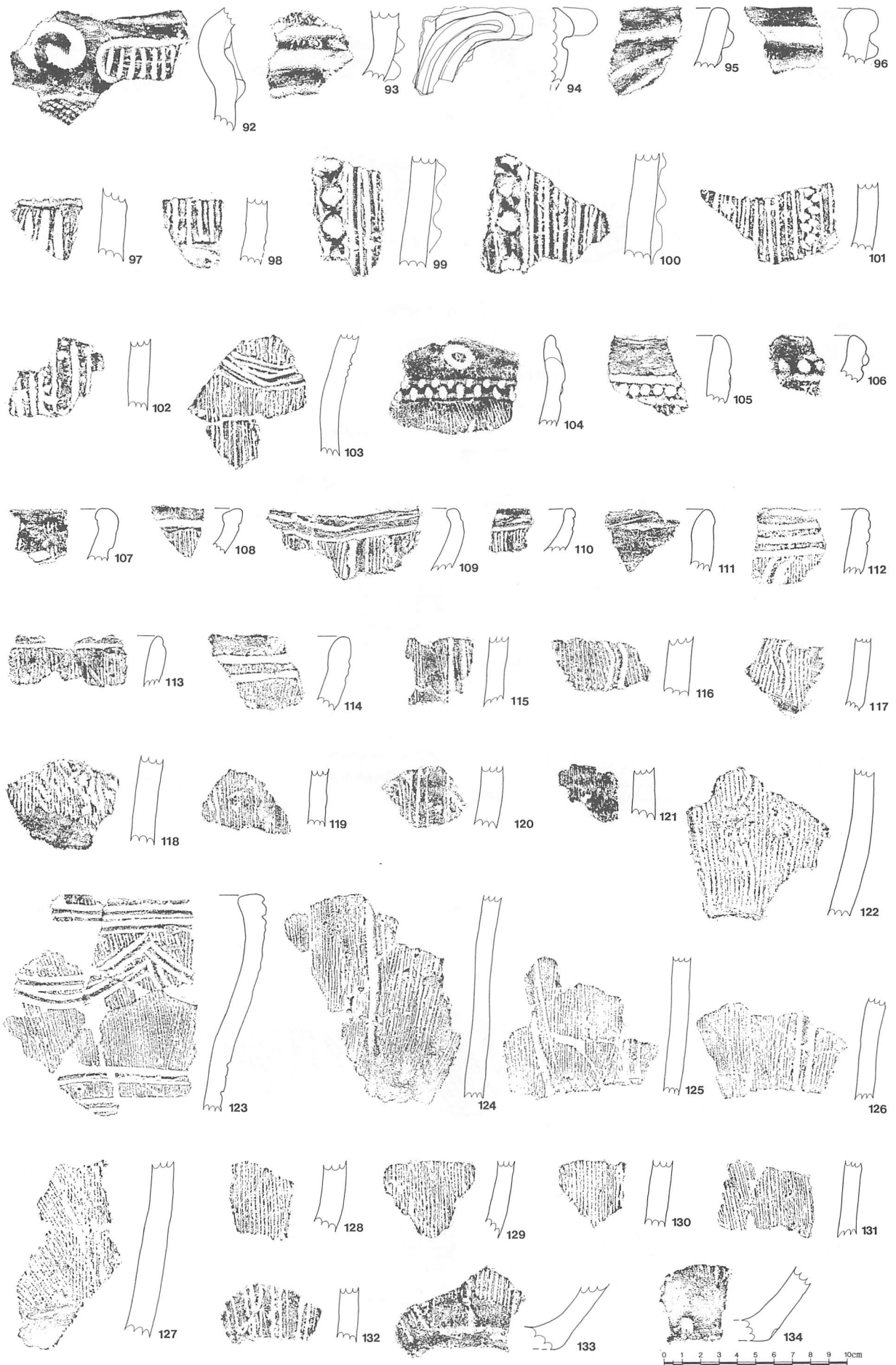
第90図 神明後遺跡7号住居跡出土土器1 (1/4)



第91図 神明後遺跡7号住居跡出土土器2 (1/3)



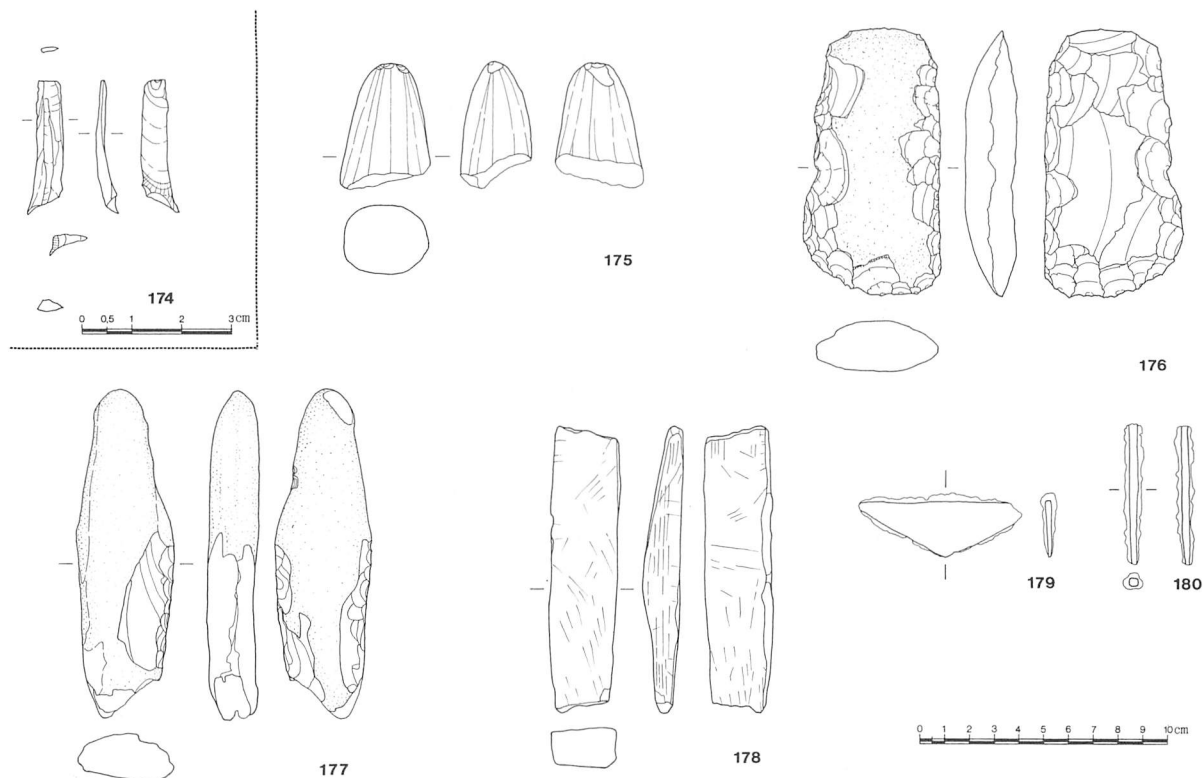
第 92 図 神明後遺跡 7 号住居跡出土土器 3 (1/3)



第93図 神明後遺跡7号住居跡出土土器4 (1/3)



第 94 図 神明後遺跡 7 号住居跡出土土器 5 (1/3)



第95図 神明後遺跡7号住居跡出土石器(2/3・1/3)

⑤その他の遺構

【土坑集石】7号住居跡の東側に位置する。7号住居跡の覆土中に検出されており、7号住居跡より新しい。出土土器の時期も主体は7号住居跡より新相を示す。土坑4・P27・P29よりも古い。

集石の範囲は150×140cmに礫が散在し、99×83cmの範囲に礫が集中する。礫の下は65×60cmの範囲が10cmの深さで掘り込まれ、中央部の39×31cmの範囲が焼けて赤化している。礫の総点数は139点、総重量10,322gで、平均重量は74.2gである。礫は若干焼けている。時期は出土土器から加曽利EⅡ期。

【集石出土遺物】(第96・97図)

第96図1は旧石器時代の石器で黒曜石の調整剥片(R.f)。長さ2.2×幅1.3×厚さ0.7cm、重さ1.4g。

集石から土器127片が出土したが、無文など細片は割愛した。加曽利EⅠ期や以前のものを含まない。

第97図1は波状口縁深鉢で区画文をもち、2は区画文と渦巻文をもつ口縁部文様帯の破片で地文は不明。

3は撚糸文を間隔をあけて施文する胴下半部片。4と5は撚糸文を地文とし連弧文を加えた胴上部片。

6～25は地文縄文の深鉢片であるが、6は直行・蛇行懸垂文を1本の沈線で表現する古相のものである。

7～9は口縁部文様帯破片であり、10～18は2本の沈線間を磨消した懸垂文をもつ類である。15の大形片は16と同一個体でRL縄文を地文とする。19と20は地文縄文のみの胴部片で裏面を横に削調整する。21～24は多方向に縄文を施すという特徴をもっている。25は蛇行・直下懸垂文をもつ類の可能性がある。

26は斜位・27は縦位・28は集合沈線である。29と30は地文条線に円形刺突文を口縁下方に入れる類。31は無文口縁で体部全面に粗い沈線を入れる。32～36は地文条線の胴部片。37は地文条線で磨消懸垂文をもつ。38と39は、縦位の条線を弧状にしたもの。

40はLR縄文を地文とし、半截竹管による沈線を口縁下にめぐらすほか、縦位にも沈線を入れる。41～45は浅鉢で、41～43は口縁部・44と45は体部の無文片でこの類を若干割愛した。46～48は、いずれも磨消懸垂文末端の2本組沈線のある深鉢である。

49は土製円板で、地文撚糸文に磨消懸垂文のある胴部片の側面調整したもので加曽利EⅡ式である。

【土坑1】調査区の南西隅に位置する。P1より古い。西側が調査区域外で、検出部分の上幅148cm、下幅115cm、深さ13cmを測る。土坑に伴うピットを1基検出した。上幅48×45cm、下幅38×32cm、土坑底面からの深さ38cmを測る。出土遺物から時期は加曽利EⅡ式以前。

【土坑1出土遺物】（第101図1・2）

1は、渦巻状に隆帯を貼付けて頂に刻みを入れ、隆帯沿いと外側に棒状工具による沈線を入れる勝坂Ⅲ式。

2は、頸部無文帯から胴上部の大破片で、地文は撚糸文。区画隆帯は2本で、無文帯の一部に消し残りがあある加曽利EⅠ新式。

【土坑2】調査区の東側に位置する。P21より古い。平面形態は長方形で、規模は上幅118×59cm、下幅98×47cm、確認面からの深さ43cm。出土遺物から、時期は中世。

【土坑2出土遺物】（第99図・第101図3～13）

第99図は政和通宝（北宋・1111年）で、楷書体の小平銭。径25.2mm、内径21.55mm、孔幅6.8mm、厚さ1.55mm、

重量2.47g。

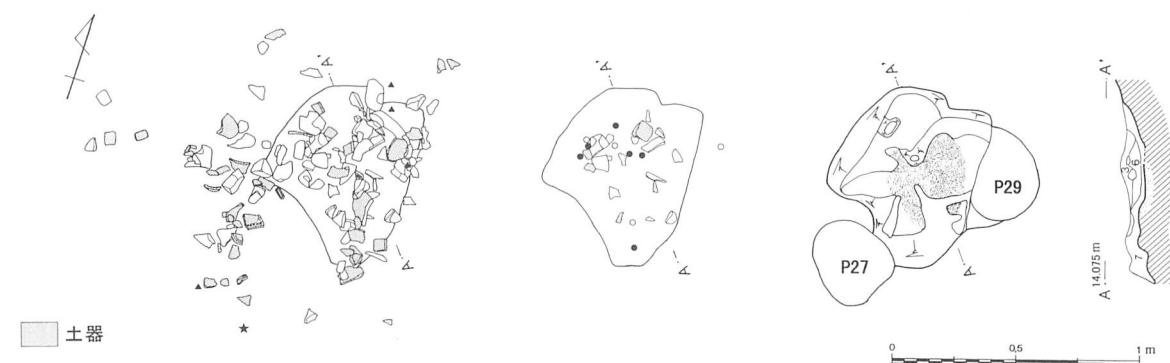
第101図3は口縁部文様帯中の渦巻文部。4は口縁文様帯の最下部。5～10は地文縄文で、9には連弧文が、10には磨消懸垂文を伴う。11～13は地文条線で磨消懸垂文を伴うものもある。

【土坑4】調査区の中央東側、集石より新しい。P29を伴う。平面形態は隅丸長方形で、規模は上幅106×75cm、下幅87×60cm、確認面からの深さ23cm。土坑の時期は不明。

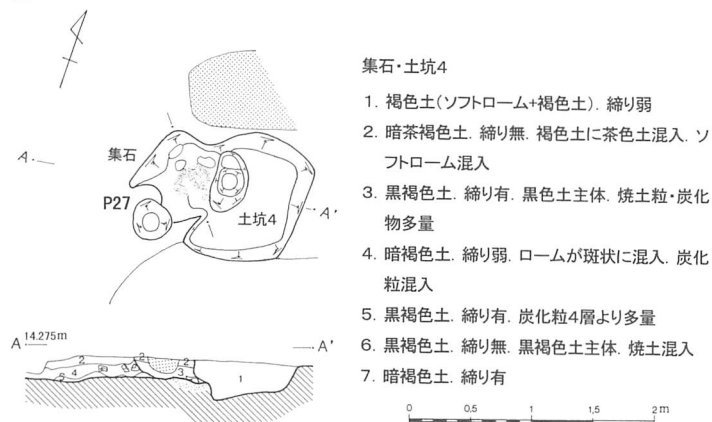
【土坑4出土遺物】（第101図14～29）

14は頸部に隆帯を蛇状にめぐらせ、区画斜位隆帯と沈線列を入れる曾利系。15は口縁渦巻文部で16は胴部の2本組隆帯部小片。17は地文の撚糸文の上に沈線で菱形を作る異系統の胴部小片。19は地文撚糸で隆帯による直下懸垂文をもつ胴部小片。21はLR縄文を地文とし、隆帯による蛇行懸垂文をもつ。22～25は地文縄文で磨消懸垂文をもつ類。26と27は地文条線で、28・29は加曽利EⅡ期である。

集石

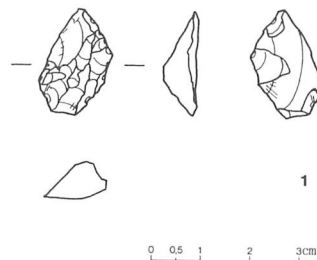


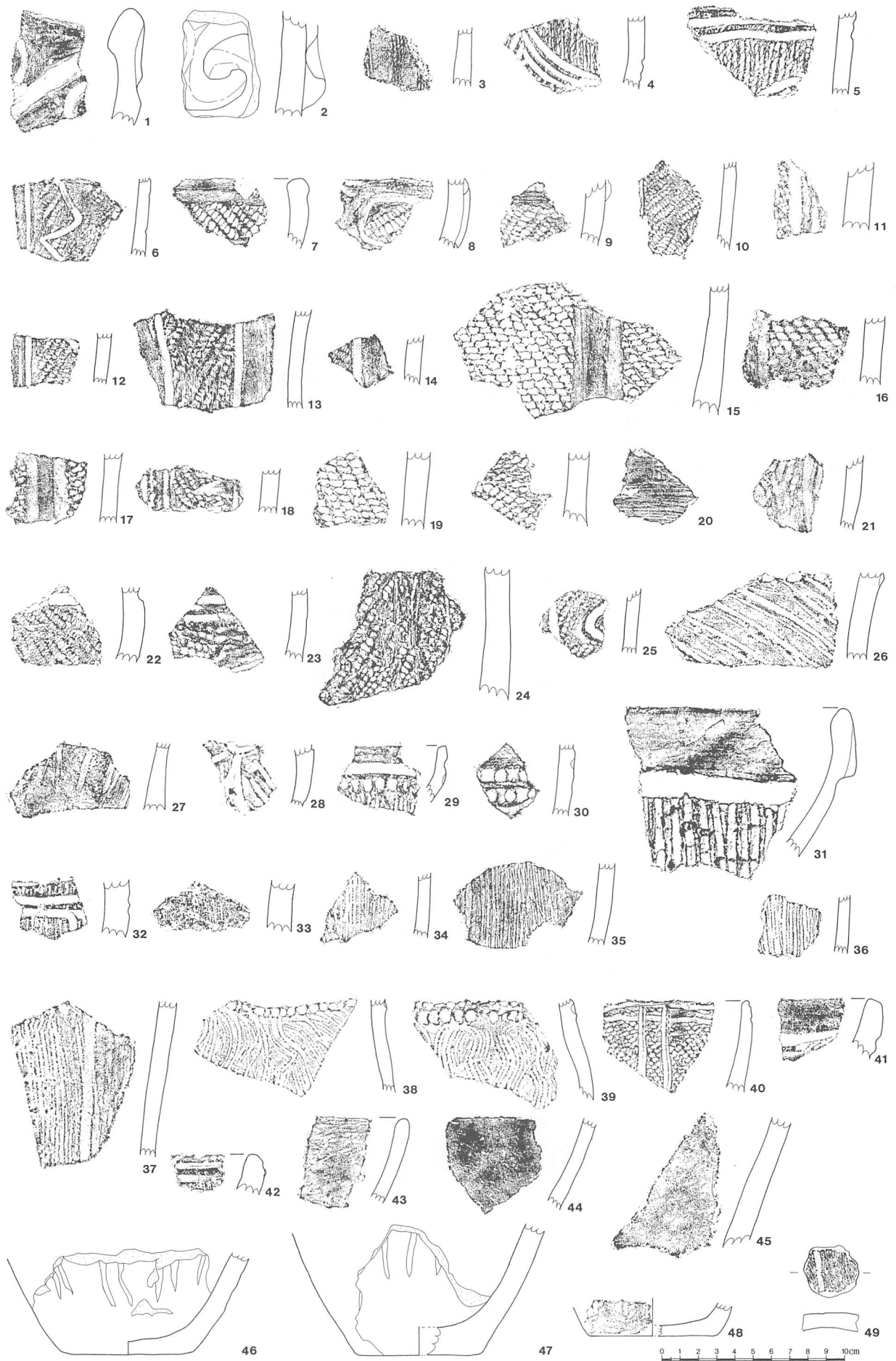
土坑4



集石・土坑4

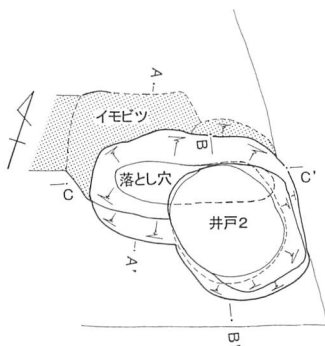
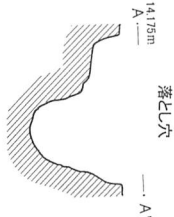
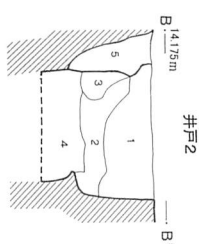
1. 褐色土(ソフトローム+褐色土). 締り弱
2. 暗茶褐色土. 締り無. 褐色土に茶色土混入. ソフトローム混入
3. 黒褐色土. 締り有. 黒色土主体. 焼土粒・炭化物多量
4. 暗褐色土. 締り弱. ロームが斑状に混入. 炭化粒混入
5. 黒褐色土. 締り有. 炭化粒4層より多量
6. 黒褐色土. 締り無. 黒褐色土主体. 焼土混入
7. 暗褐色土. 締り有



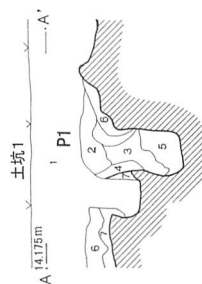
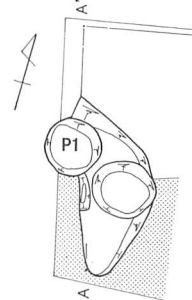


第97図 神明後遺跡第9地点集石出土土器 (1/3)

落とし穴・井戸

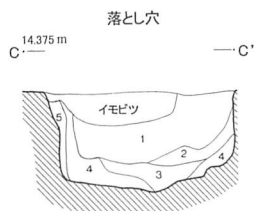


土坑 1



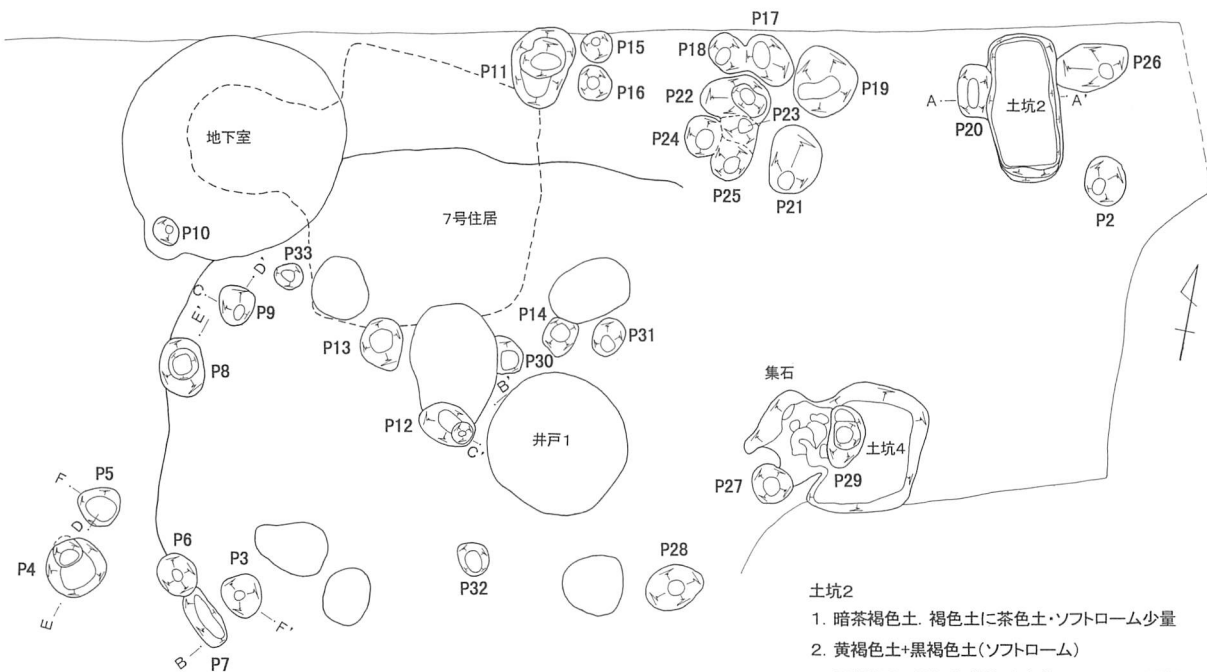
落とし穴・井戸

1. 暗褐色土. 締りやや有. ローム粒(2~5mm)多量
2. 黒褐色土. 締り弱
3. 黒褐色土. 2層に多量のローム粒塊
4. 暗褐色土. 締り無. 礫主体. 陶磁器出土
5. 暗褐色土. 硬く締まる. ローム粒(1mm)少量
6. 褐色土. 硬く締まる. ローム粒(1~2mm)多量
7. 褐色土. 硬く締まる. ローム粒(1mm)極少量
8. 褐色土. 硬く締まる. ローム塊(1cm)極少量
9. 褐色土. 硬く締まる. ローム粒(1mm)少量. ローム塊(1cm)極少量



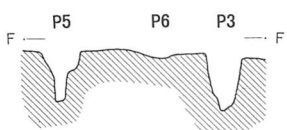
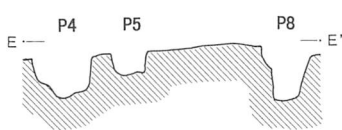
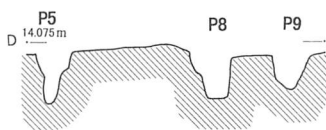
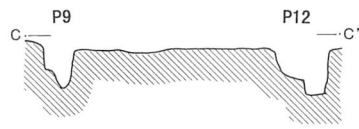
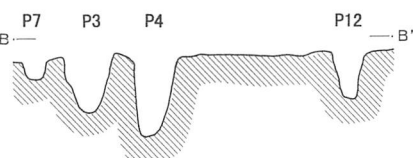
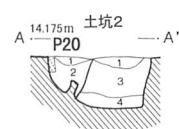
土坑1

1. 耕作土. カクラン
2. 暗褐色土. 締り有. ローム粒(1mm)少量
3. 暗褐色土. 締り有. ローム粒(1mm)多量. 炭化粒(1mm)極少量
4. 褐色土. 締り有. ローム粒極少量
5. 褐色土. 締り弱. ローム粒(1mm)極多量. ソフトローム多量. ローム塊少量
6. 褐色土. 締り有. ローム粒(1mm)少量. ソフトローム混入
7. 黄褐色土. ロームに褐色土混入. 締り有



土坑2

1. 暗茶褐色土. 褐色土に茶色土・ソフトローム少量
2. 黄褐色土+黒褐色土(ソフトローム)
3. 黒褐色土. 黒色土+褐色土主体. ソフトローム混入
4. 黒褐色土(黒色土+茶褐色ローム塊)



0 0.5 1 1.5 2m

第 98 図 神明後遺跡第 9 地点落とし穴・土坑・井戸・Pit (1/60)

【ピット】P1～P4の時期は縄文。他は中近世。

第28表 神明後遺跡第9地点ピット一覧表 単位(cm)

No.	確認面径	底径	深さ	備考
1	45×45	40×33	65	円形 縄文
2	38×32	14×10	36	円形 縄文
3	37×33	8×7	48	円形 縄文
4	49×47	17×11	61	円形斜向 縄文
5	34×32	24×19	42	円形
6	35×30	11×8	19	円形
7	(49)×22	40×10	26	楕円形
8	49×36	18×16	50	楕円形
9	33×30	14×7	32	隅丸三角
10	25×10	7×7	52	円形
11	65×50	26×13	64	楕円形
12	45×33	5×4	40	楕円形
13	43×34	20×17	34	卵形
14	31×30	18×15	16	隅丸方形
15	26×25	7×6	15	円形
16	30×27	11×10	11	円形
17	46×33	22×12	26	楕円形
18	35×30	17×10	31	円形
19	55×55	35×15	21	隅丸台形
20	42×25	21×8	44	隅丸長方形
21	54×42	15×12	—	楕円形
22	54×38	15×12	35	楕円形
23	(32)×(22)	12×11	25	楕円形
24	33×(30)	17×13	18	円形
25	(31)×(30)	15×10	20	楕円形
26	59×38	13×11	31	楕円形
27	33×33	17×13	31	円形
28	49×35	14×12	25	楕円形
29	49×27	13×12	59	楕円形
30	30×(19)	16×14	20	円形
31	31×28	14×11	26	楕円形
32	29×25	18×13	16	円形
33	24×22	11×8	14	円形

【ピット21出土遺物】(第101図30)

30は、剥離の著しい口縁の渦巻部分の破片。

【落とし穴】調査区東端に東西方向に長く位置する。東側は井戸2に壊される。平面形態は楕円形。規模は上幅159×93cm、下幅126×32cm、深さは確認面から83cmを測る。土層の観察から縄文時代。

【井戸1】調査区中央、7号住居内にある。形態は円筒形を呈する。規模は上幅112×109cm、深さは1.4mまで掘ったが底は確認していない。

【井戸2】調査区東端にある。形態は円筒形を呈する。規模は上幅115×110cm、深さは1mまで掘ったが底は確認していない。多量の土器、礫出土。

【井戸2出土遺物】(第101図31～50・第102図)

31は地文撚糸文の口縁部で、肥厚した口唇上面には沈線と渦巻文がある。32は地文縄文の区画文の上部と下部、33と34は磨消懸垂文をもつ地文縄文の胴下部片。35は、細い多方向施文の縄文を地文とし、逆U字型に

沈線間を磨消す。

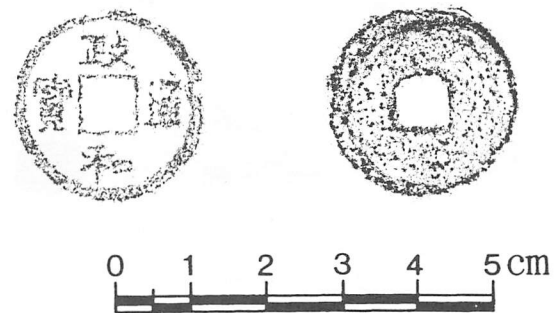
36～43は、地文縄文の胴部片であり、36～40は沈線による懸垂文をもつ類で、41と42は沈線間を広く磨消した懸垂文をもつ類、43は地文のみの胴部片の代表例。

44は口縁下の沈線のみで下部は不明。45は縦位沈線を地文とする波状口縁部片。46は地文条線で、縦位隆帯を貼付け交互刺突を加える。47は無文であるが磨き痕がある。48～50は地文が縄文で口縁下に沈線をめぐらすのみの口縁部片で48と49の地文は痕跡のみ。

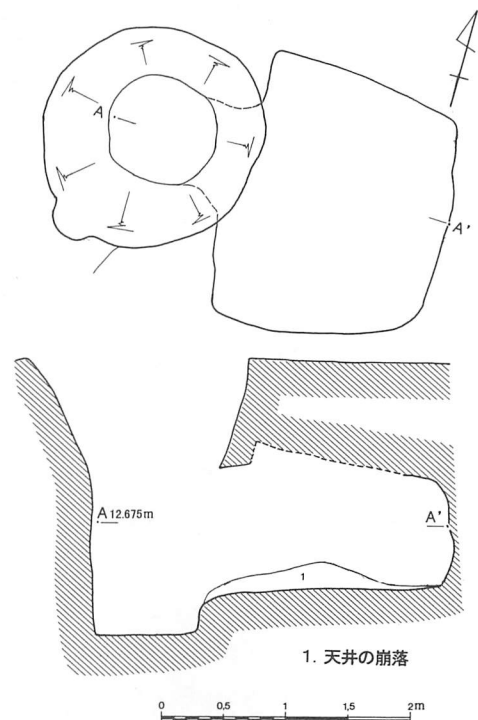
51～53は縄文時代の石器。54～56は近世の砥石。

57～67は近世の陶磁器土器類で17～18世紀の所産。

【地下室】調査区中央に位置する。開口部は円筒形で、上幅180×175cm、下幅88×85cm、深さ220cmを測る。室部は平面台形で、奥行き175cm、幅215cm、高さ102cm。室部は開口部底より25cm高い。

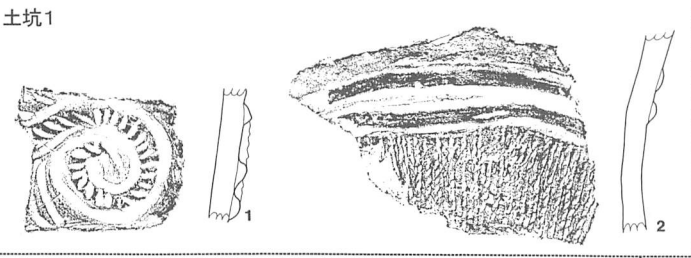


99 図 神明後遺跡第9地点土坑2出土銭 (1/1)

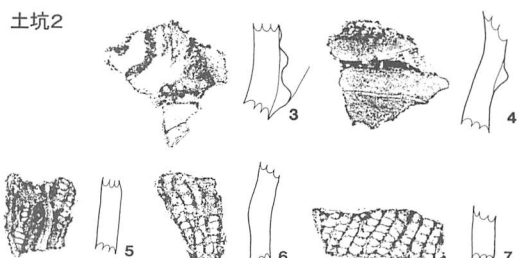


第100図 神明後遺跡第9地点地下室 (1/60)

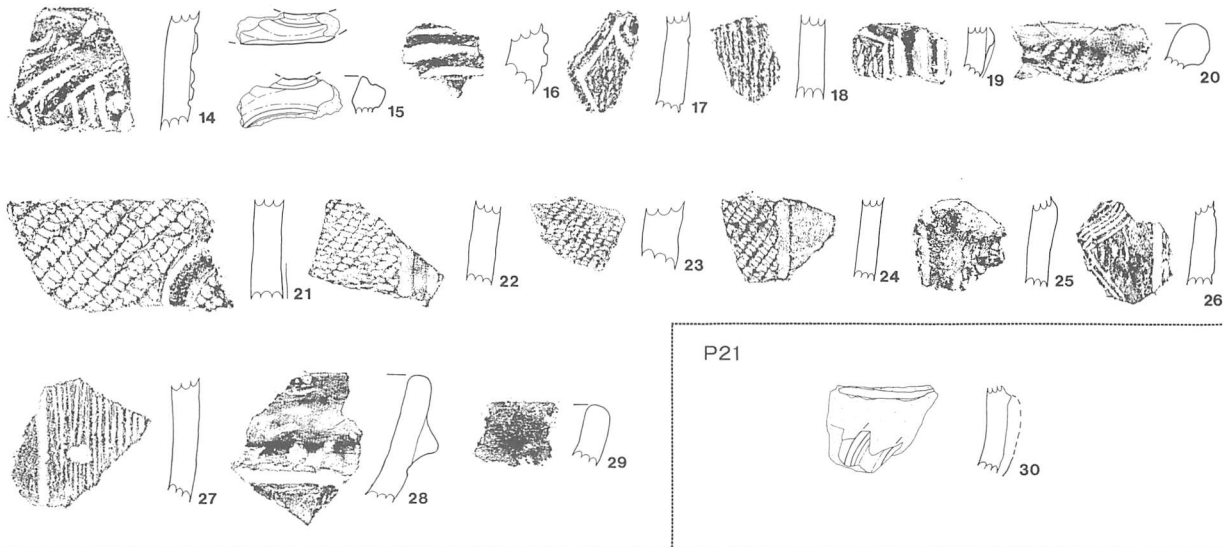
土坑1



土坑2



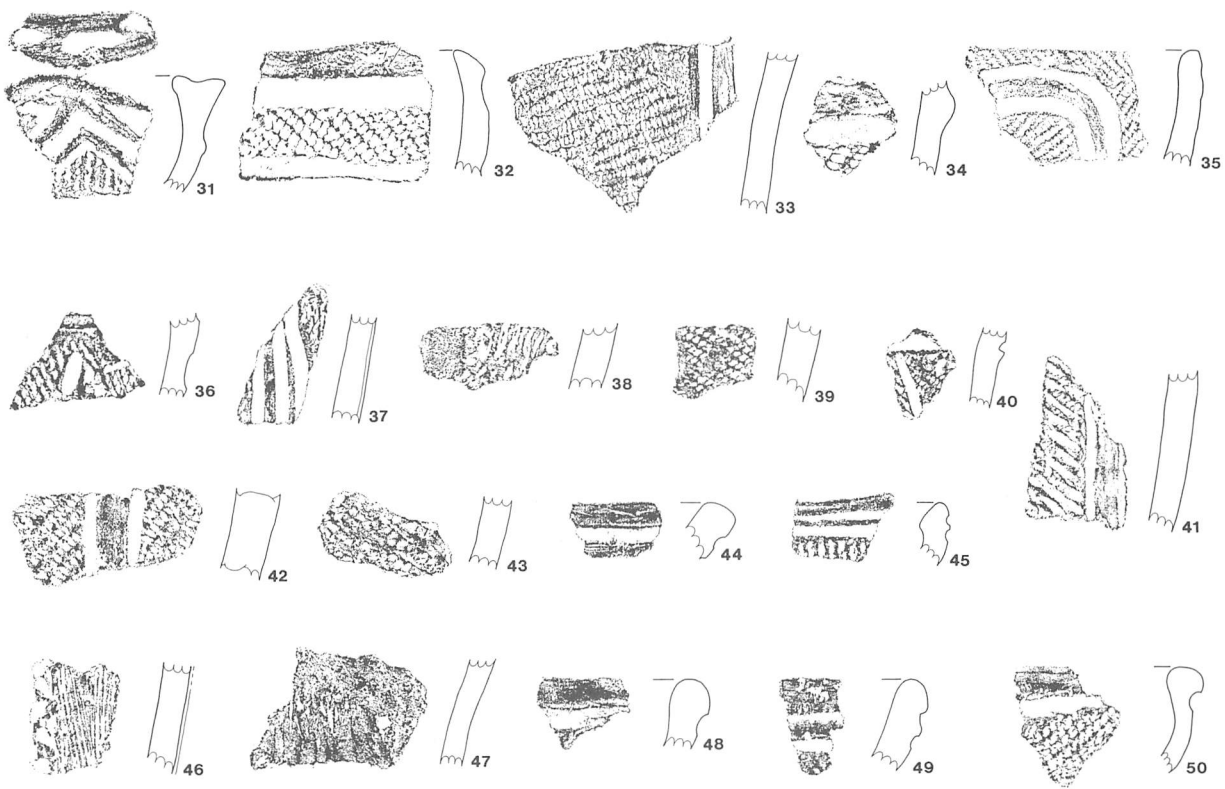
土坑4



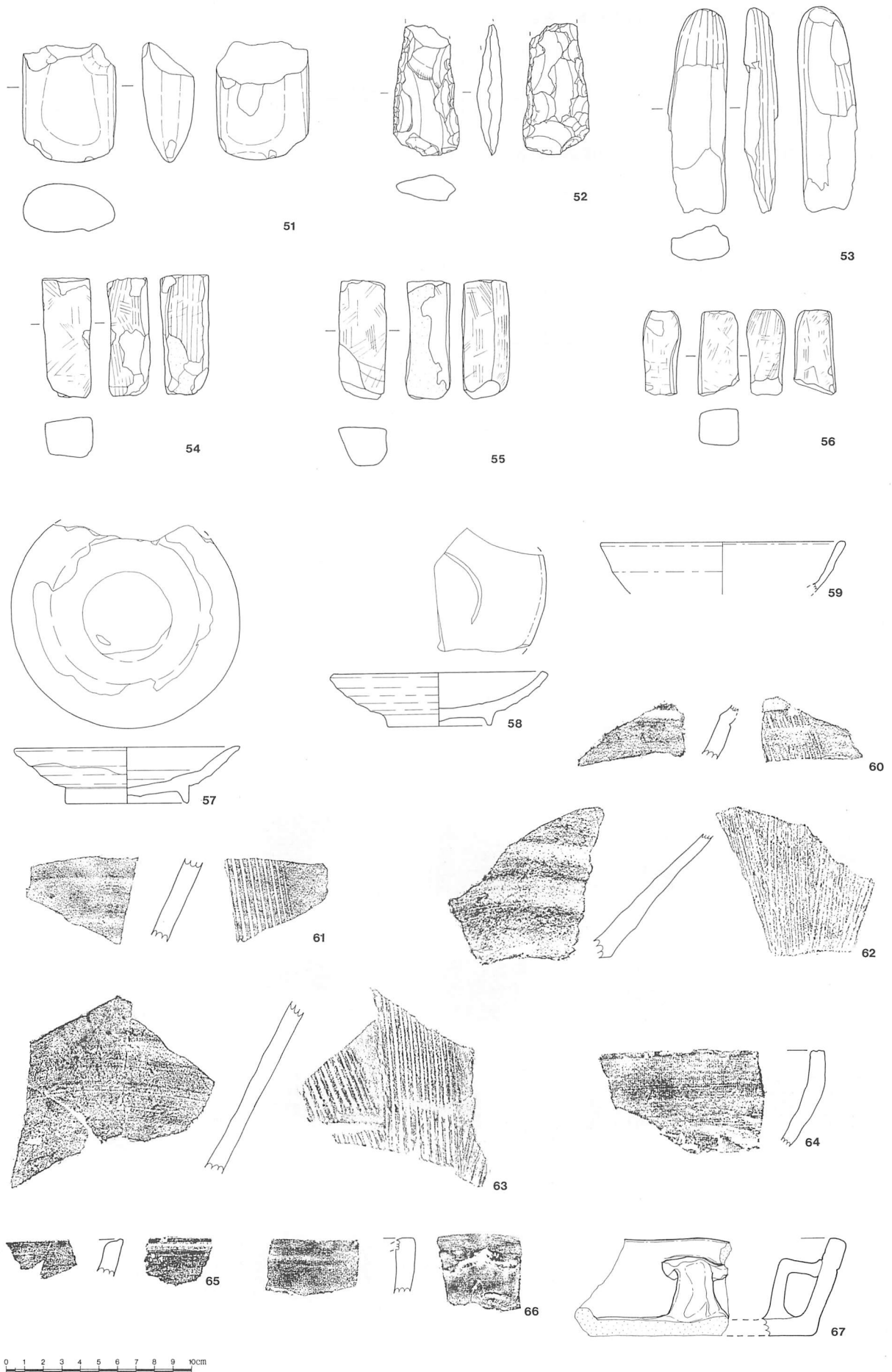
P21



井戸2



第 101 図 神明後遺跡第 9 地点土坑・井戸・Pit 出土土器 (1/3)



第 102 図 神明後遺跡第9地点井戸出土遺物 (1/3)

第29表 神明後遺跡第9地点井戸2出土石器一覧表 単位 (cm・g)

No.	材質	種類	長さ	幅	厚さ	重量	No.	材質	種類	長さ	幅	厚さ	重量
51	細粒砂岩	磨製石斧	6.4	5.1	2.7	131.8	54	凝灰岩	砥石	6.5	2.6	2.2	58.7
52	粘板岩	打製石斧	7.3	3.6	1.4	44.7	55	凝灰岩	砥石	6.4	2.6	2.5	62.0
53	粘板岩	敲石	11.2	3.2	1.8	73.1	56	凝灰岩	砥石	4.5	2.1	2.1	30.7

第30表 神明後遺跡第9地点井戸2出土陶磁器一覧表 単位 (cm)

No.	種別・器種	口径	底径	器高	技法／文様／その他	推定産地	推定年代	備考
57	陶器・皿	12.2	6.6	3.0	ロクロ成形・削り出し三角高台／灰釉・輪禿皿	瀬戸・美濃	18C前半	
58	陶器・皿	(11.4)	(5.6)	3.0	ロクロ成形・削り出し三角高台／灰釉・直重ね	瀬戸・美濃	17C末～18C前半	
59	陶器・皿	(13.2)	—	—	ロクロ成形／灰釉	瀬戸・美濃		
60	陶器・播鉢	—	—	—	紐積みロクロ成形／鉄釉	瀬戸・美濃	17C～18C	
61	陶器・播鉢	—	—	—	紐積みロクロ成形／鉄釉	瀬戸・美濃	17C～18C	
62	焼締陶器・播鉢	—	—	—	紐積みロクロ成形／櫛目7本単位	丹波	17C	
63	陶器・播鉢	—	—	—	紐積みロクロ成形／鉄釉／櫛目11本単位	瀬戸・美濃	17C～18C	
64	瓦質陶器・焙烙	—	—	—	平底	在地		
65	瓦質陶器・焙烙	—	—	—	平底	在地		
66	瓦質陶器・焙烙	—	—	—	平底・内耳	在地		
67	瓦質陶器・焙烙	—	—	5.3	平底・内耳	在地		

【遺構外出土遺物】（第103図1～18）

1と2は地文襷糸文の胴片であるが1の撚りはゆるい。3～9は地文縄文であるが3は隆帯の懸垂文、他は磨消懸垂文を伴う類。10は縦位の沈線列をもつ。11は口縁下に3～4本の沈線をめぐらす地文条線で、12～14は地文条線の胴部片。15は細縄文を地文とし、U字型に大きく弧状に磨消す加曽利EⅢ期のもの。

16は、口縁基部から胴上部片で、口縁基部の推定径23cmである。直立する口縁は基部のみで、鰐下部に太

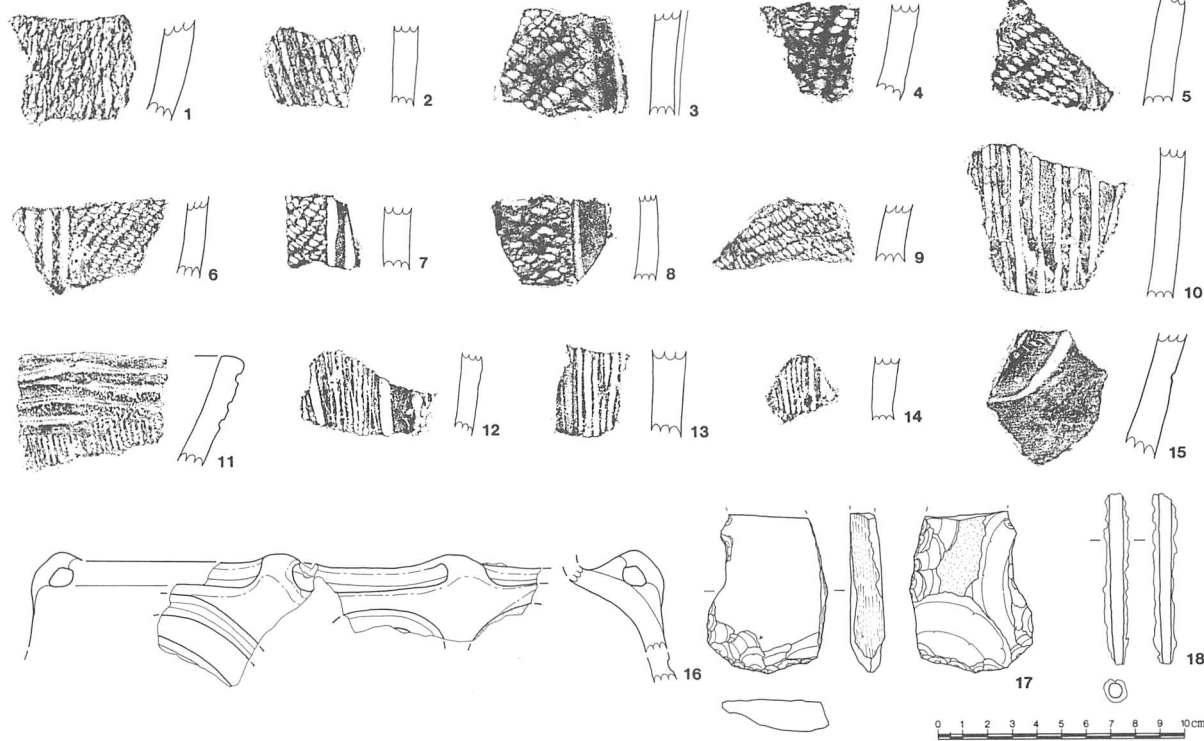
い凹線が入り、その上下を把手状に中空にかぶせる。胴部は球形胴に近く、その上部には太い凹線による弧状沈線が入り、渦巻文の一部をなしている。胎土には微砂粒・白色軟質物質・ガラス光沢の粉末が入り、渦巻周辺の無文部は平滑に磨かれる。焼成良好で堅く焼かれ黒褐色を呈する。有孔鰐付土器といえる。

17はホルンフェルス製の打製石斧で基部が欠ける。

長さ6.4×幅4.8×厚さ1.4cm。重さ58.1g。

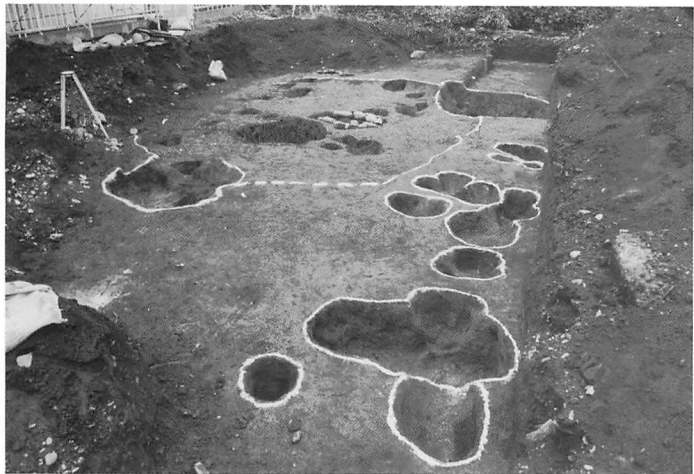
18は鉄釘で、断面方形。長さ6.9cm。重さ8.3g。

遺構外



第 103 図 神明後遺跡第9地点遺構外出土遺物 (1/3)

神明後遺跡 4号住居跡



神明後遺跡第9地点 調査区南側全景



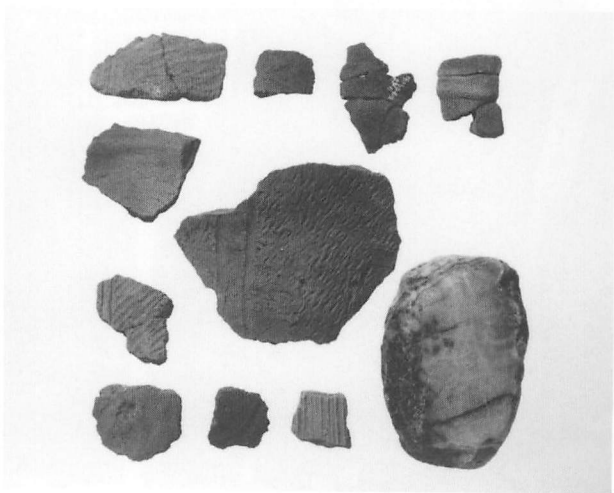
神明後遺跡第9地点 調査区北側全景



神明後遺跡 4号住居跡全景



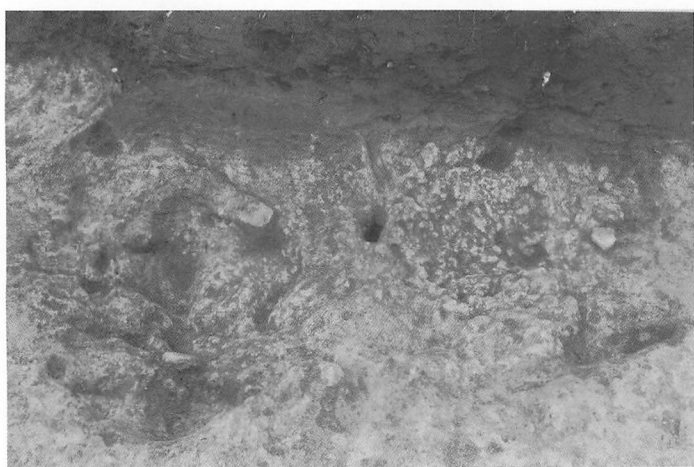
神明後遺跡 4号住居跡炉



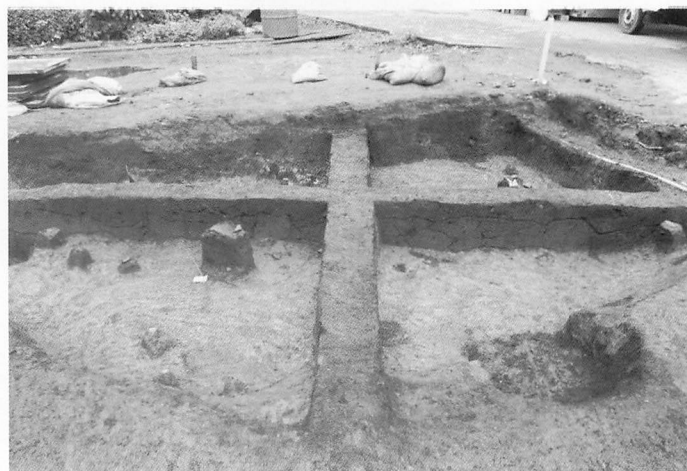
神明後遺跡 4号住居跡出土遺物



神明後遺跡 5号住居跡全景



神明後遺跡 5号住居跡炉



神明後遺跡 5号住居跡土層



神明後遺跡 5号住居跡遺物出土状態 1

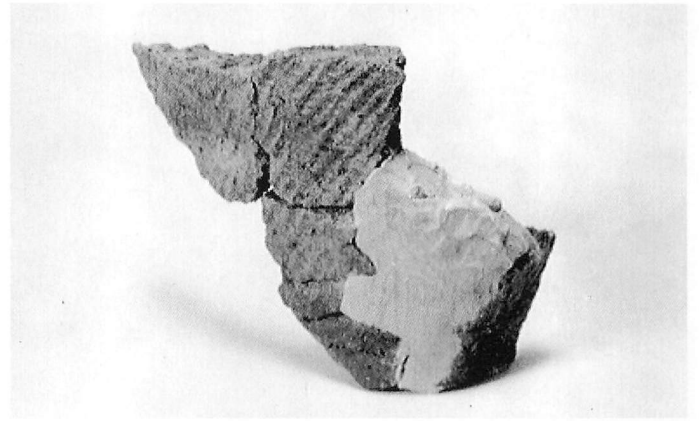


神明後遺跡 5号住居跡遺物出土状態 2

神明後遺跡 5号住居跡



神明後遺跡 5号住居跡出土土器No. 1



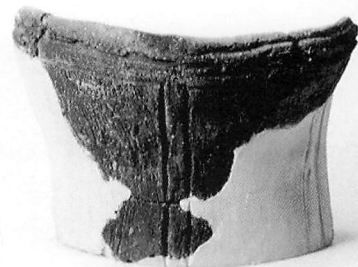
神明後遺跡 5号住居跡出土土器No. 2



神明後遺跡 5号住居跡出土土器No. 3



神明後遺跡 5号住居跡出土土器No. 4



神明後遺跡 5号住居跡出土土器No. 5



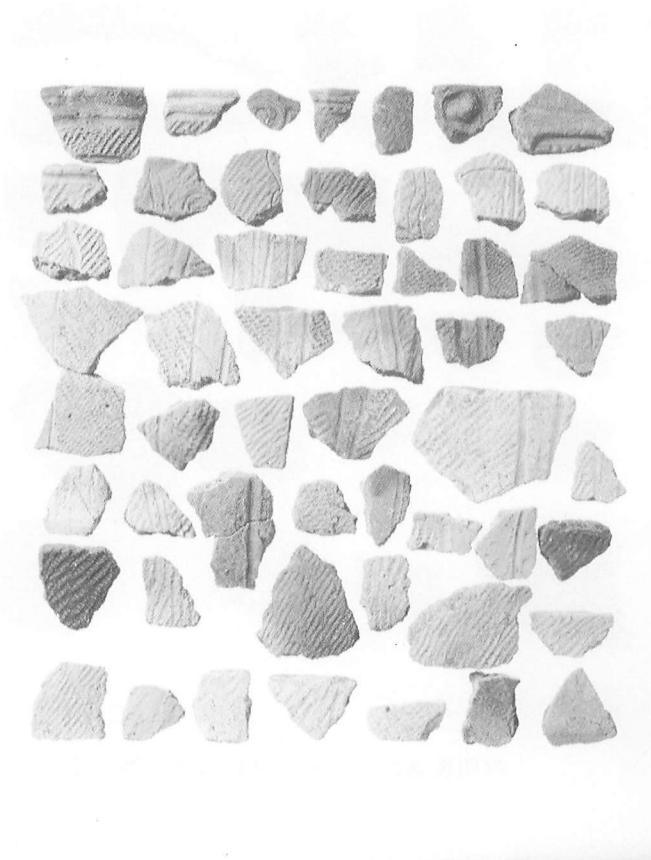
神明後遺跡 5号住居跡出土土器No. 6



神明後遺跡 5号住居跡出土土器No. 7



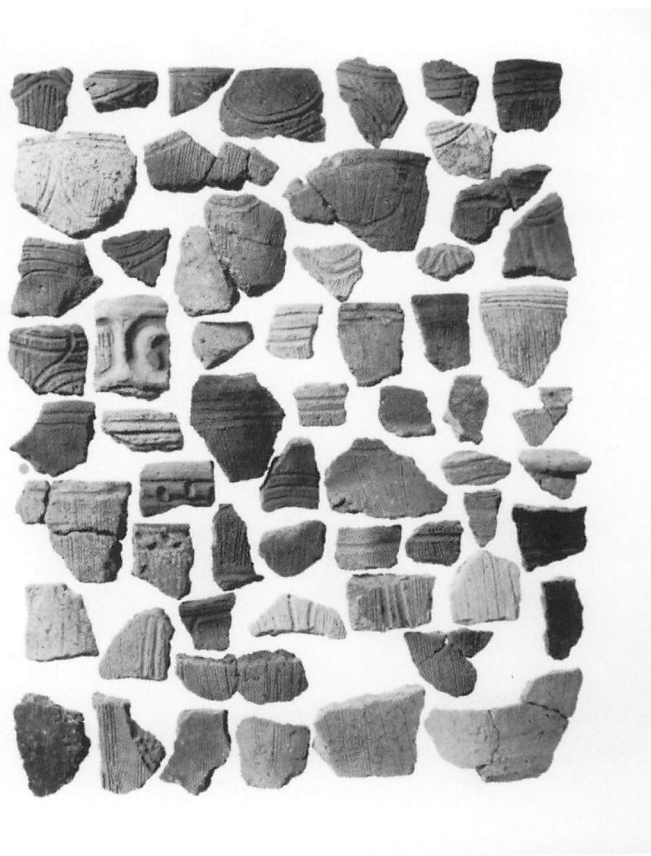
神明後遺跡 5 号住居跡出土土器 (2)



神明後遺跡 5 号住居跡出土土器 (3)

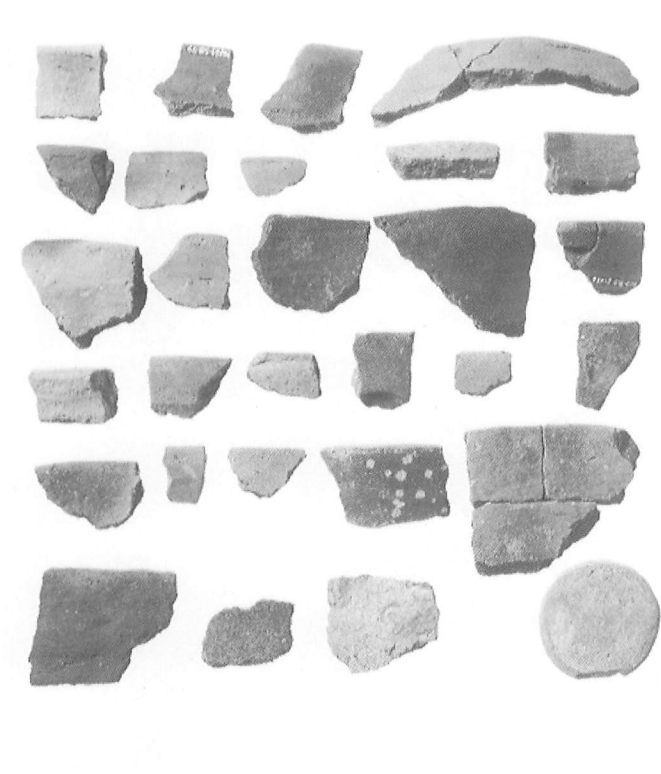


神明後遺跡 5 号住居跡出土土器 (4)

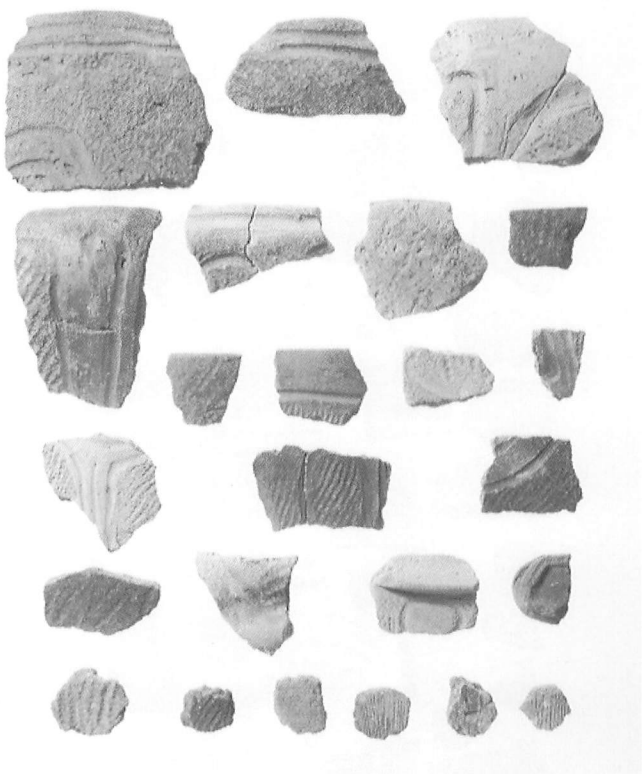


神明後遺跡 5 号住居跡出土土器 (5)

神明後遺跡 5号住居跡



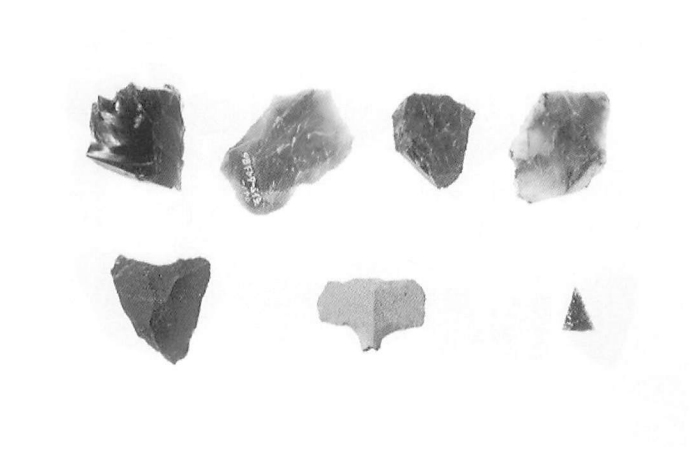
神明後遺跡 5号住居跡出土土器（6）



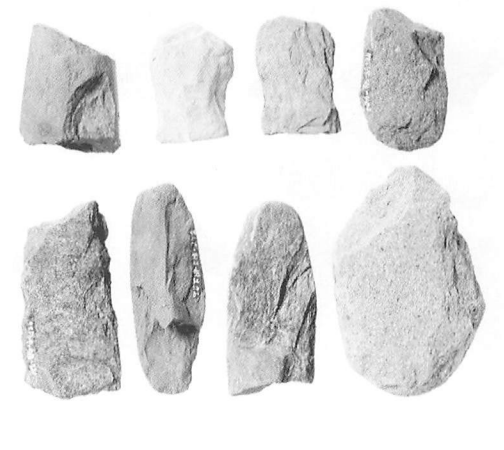
神明後遺跡 5号住居跡出土土器（7）



神明後遺跡 5号住居跡出土土器No.235～245



神明後遺跡 5号住居跡出土石器（1）



神明後遺跡 5号住居跡出土石器（2）



神明後遺跡 6号住居跡全景



神明後遺跡 6号住居跡旧炉



神明後遺跡 6号住居跡旧埋甕



神明後遺跡 6号住居跡新炉



神明後遺跡 6号住居跡新埋甕

神明後遺跡 6号住居跡



神明後遺跡 6号住居跡新・旧炉・3号炉



神明後遺跡 6号住居跡新旧埋甕



神明後遺跡 6号住居跡遺物出土状態 1



神明後遺跡 6号住居跡遺物出土状態 2



神明後遺跡 6号住居跡遺物出土状態 3



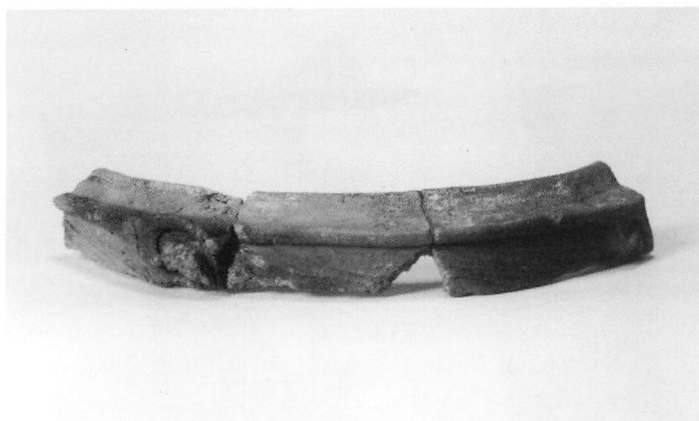
神明後遺跡 6号住居跡遺物出土状態 4



神明後遺跡 6号住居跡遺物出土状態 5



神明後遺跡 6号住居跡周溝



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No. 1 (旧炉体土器)



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No. 2 (旧埋甕)



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No. 3 (新炉体土器)



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No. 4 (新埋甕)



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No. 5



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No. 6



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No. 7

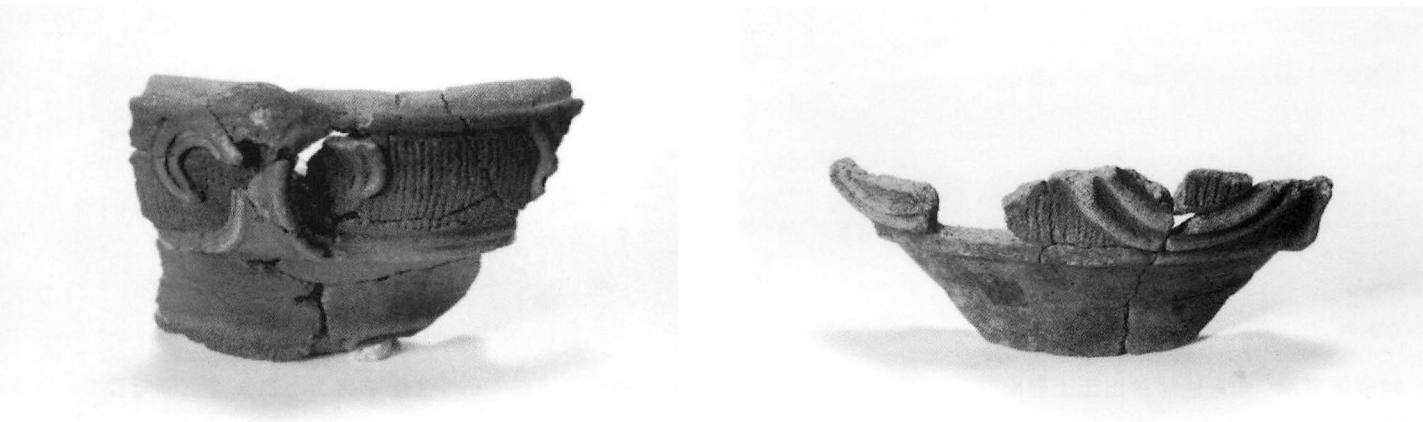


神明後遺跡 6号住居跡出土土器No. 8、11、12

神明後遺跡 6 号住居跡

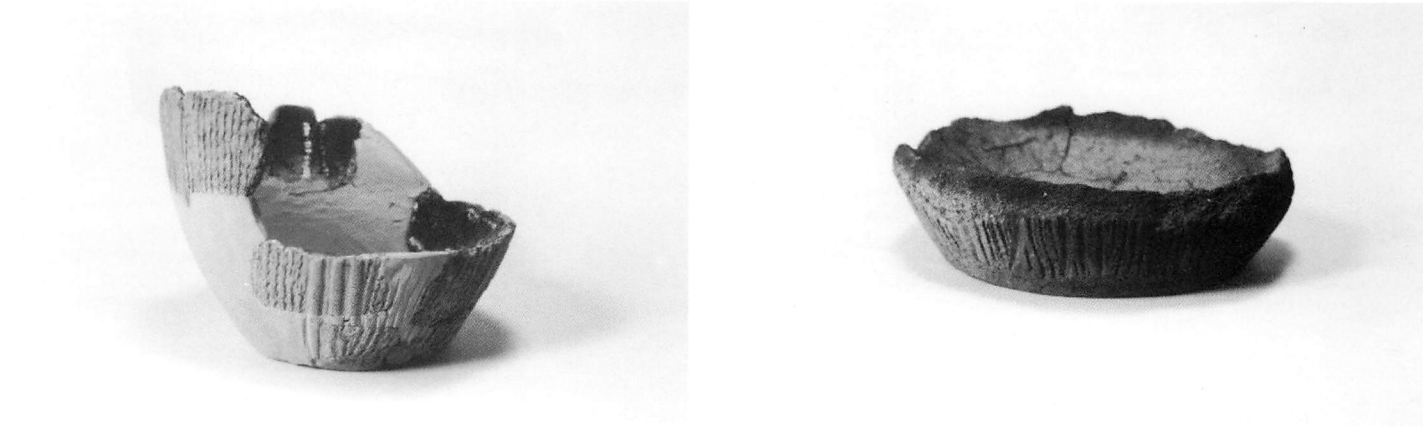


神明後遺跡 6 号住居跡出土土器No. 9



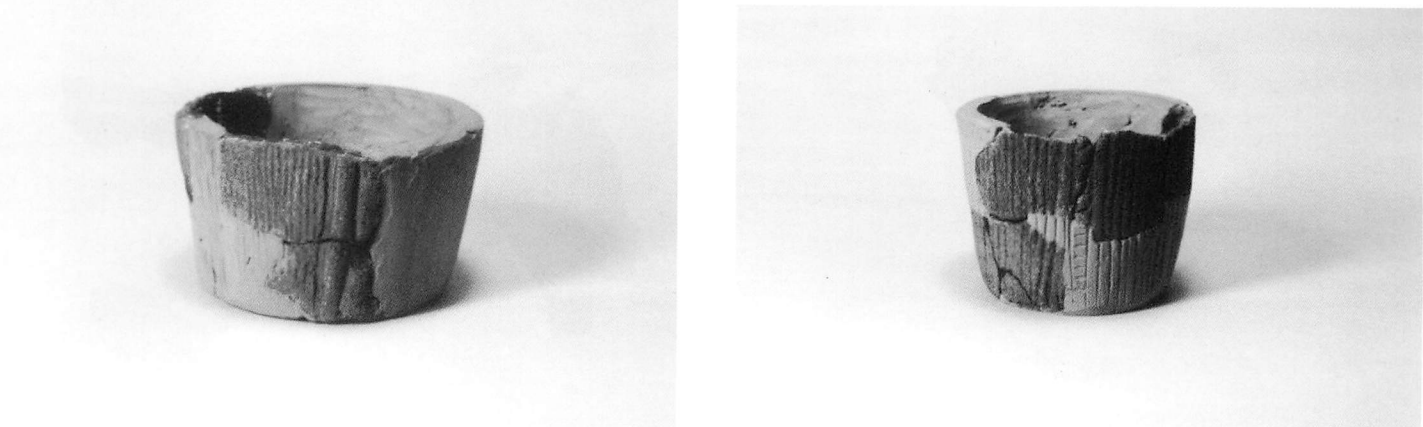
神明後遺跡 6 号住居跡出土土器No.10

神明後遺跡 6 号住居跡出土土器No.13



神明後遺跡 6 号住居跡出土土器No.14

神明後遺跡 6 号住居跡出土土器No.15



神明後遺跡 6 号住居跡出土土器No.16

神明後遺跡 6 号住居跡出土土器No.17



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No.18



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No.19



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No.20



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No.22



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No.23



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No.21



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No.26

神明後遺跡 6号住居跡



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No.27



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No.28



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No.29



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No.30



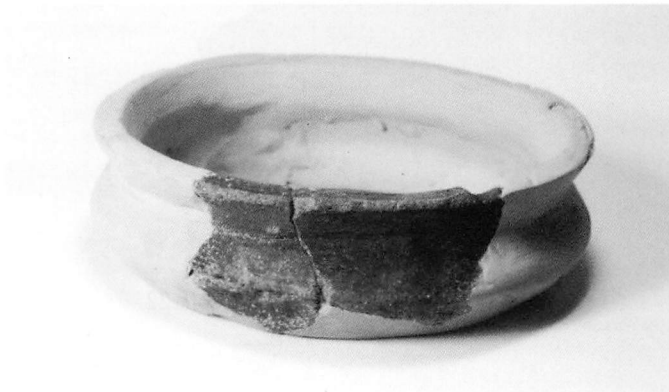
神明後遺跡 6号住居跡出土土器No.32



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No.33



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No.34



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No.35



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No.39



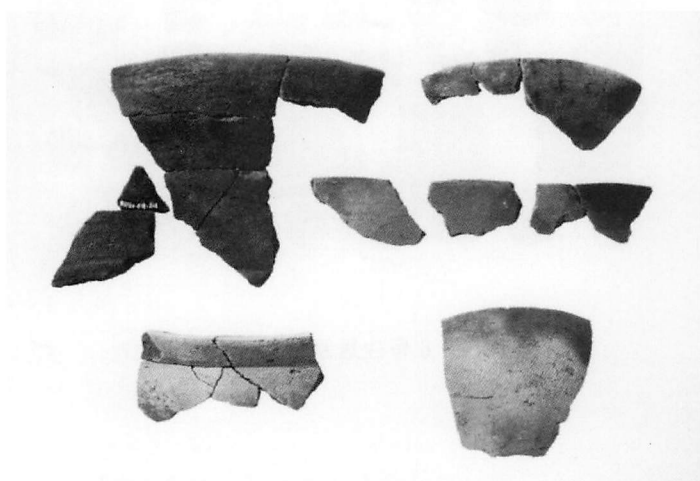
神明後遺跡 6号住居跡出土土器No.40



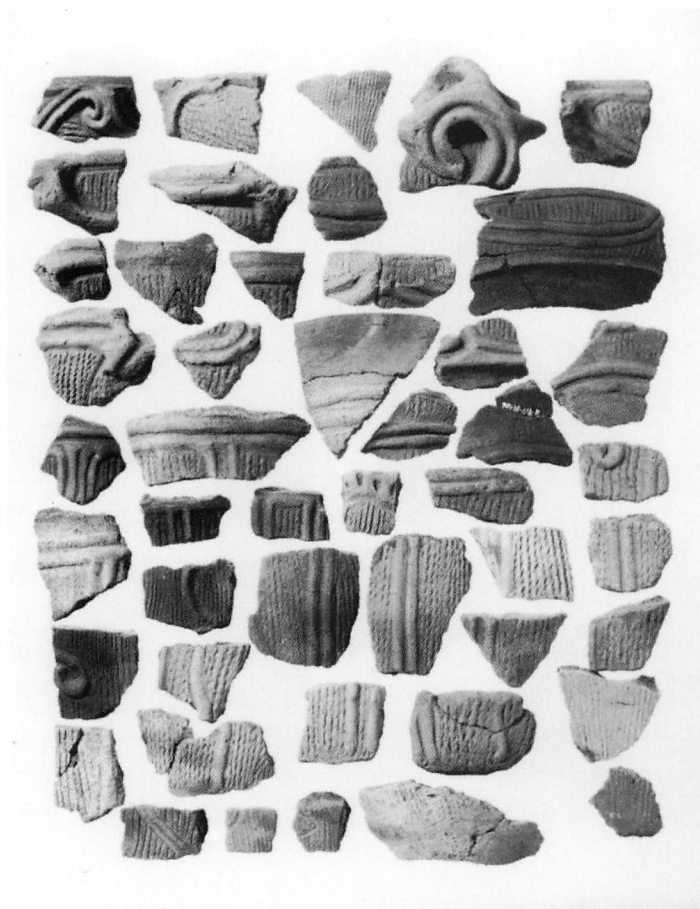
神明後遺跡 6号住居跡出土土器No.41



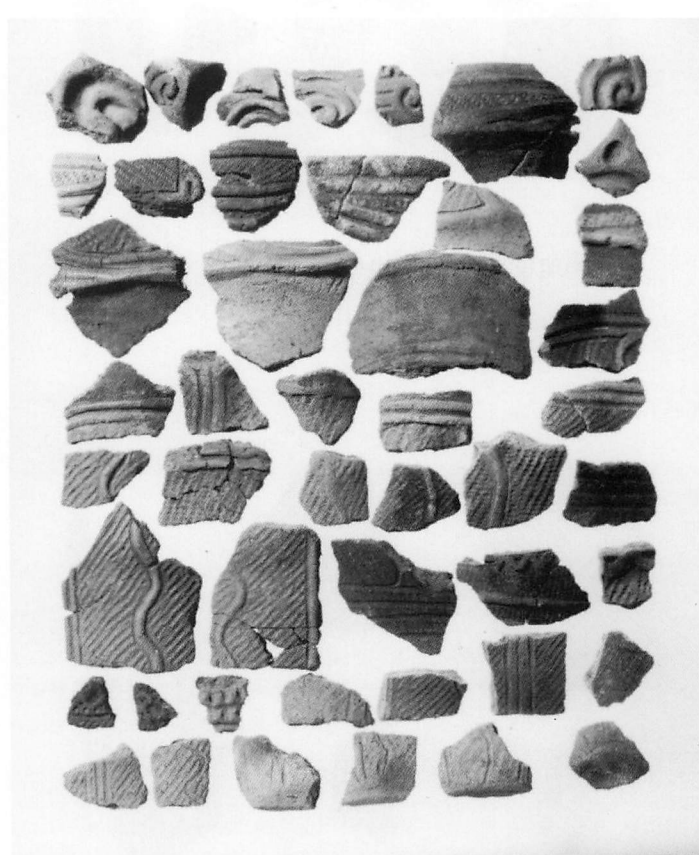
神明後遺跡 6号住居跡出土土器（6）



神明後遺跡 6号住居跡出土土器No.25・31・36~38



神明後遺跡 6号住居跡出土土器（7）

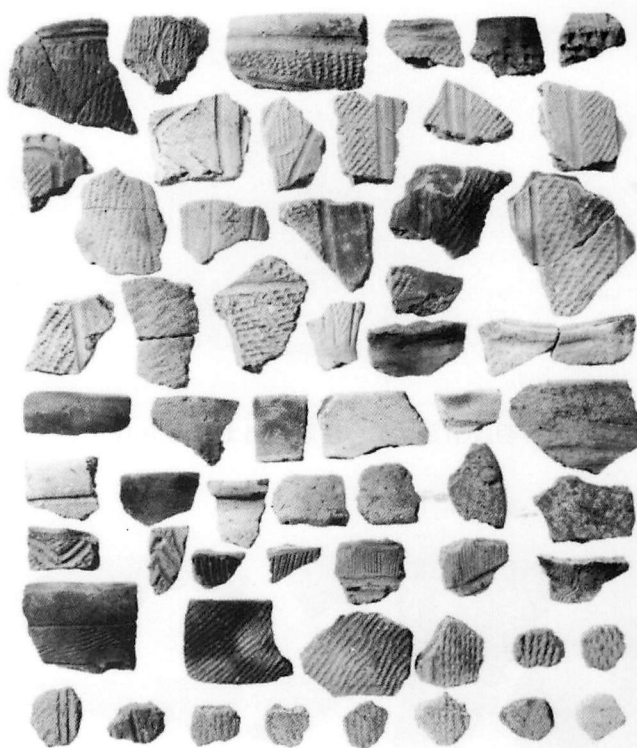


神明後遺跡 6号住居跡出土土器（8）

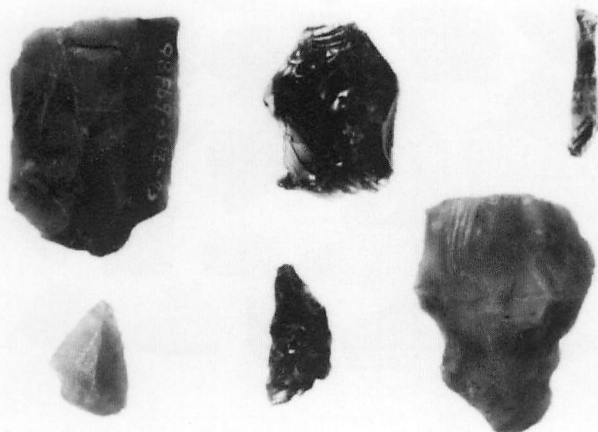
神明後遺跡 6 号住居跡



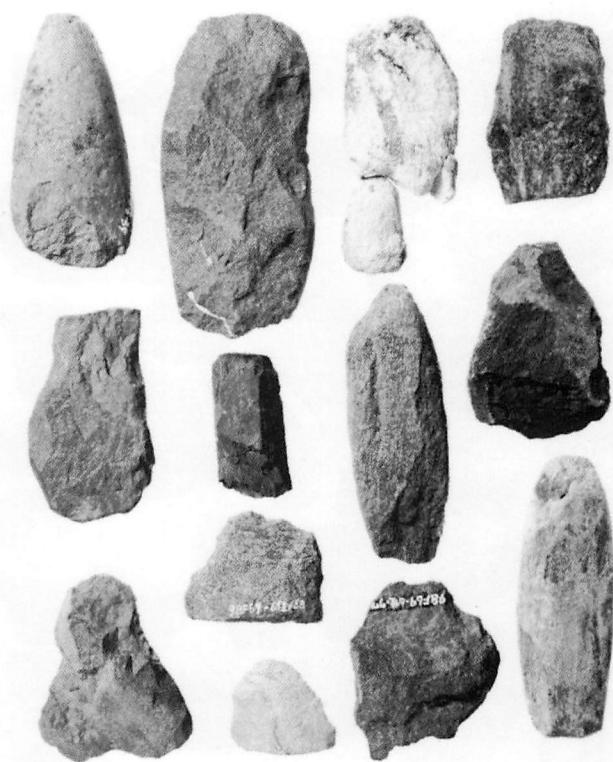
神明後遺跡 6 号住居跡出土土器 (9)



神明後遺跡 6 号住居跡出土土器 (10)



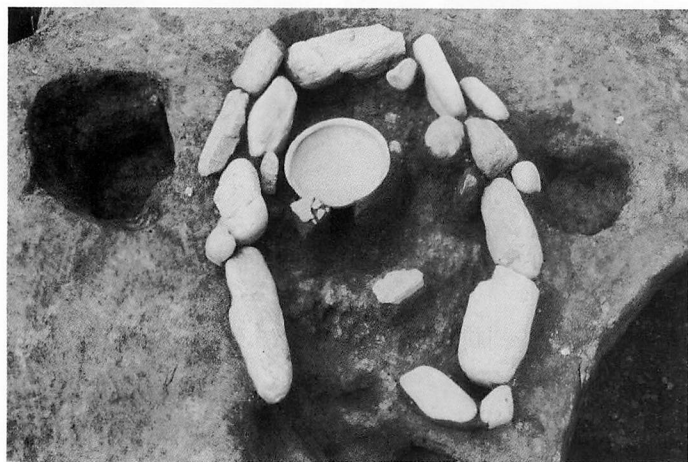
神明後遺跡 6 号住居跡出土石器 (1)



神明後遺跡 6 号住居跡出土石器 (2)



神明後遺跡 7号住居跡全景



神明後遺跡 7号住居跡炉



神明後遺跡 7号住居跡出土土器No. 1

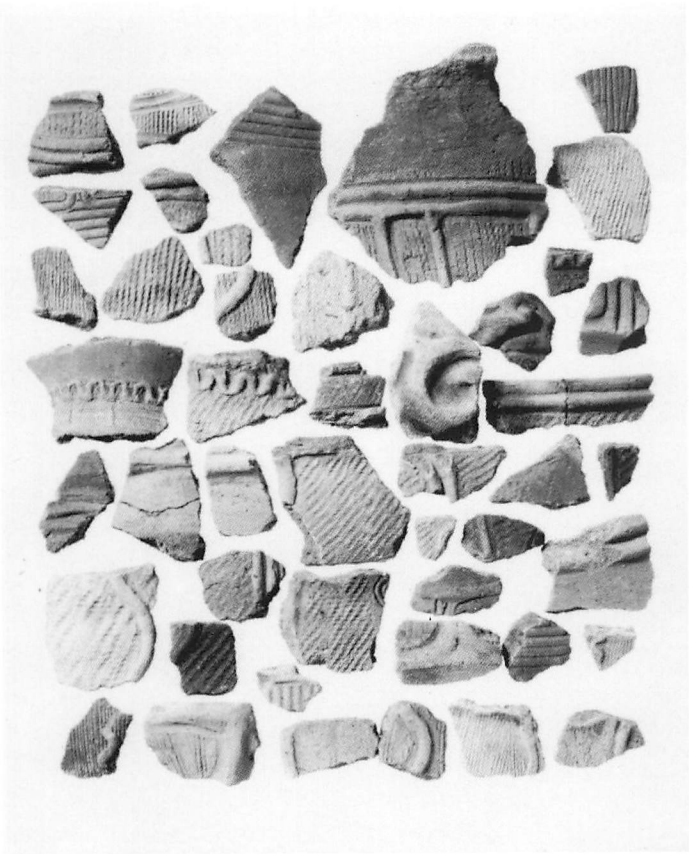


神明後遺跡 7号住居跡出土土器No. 2

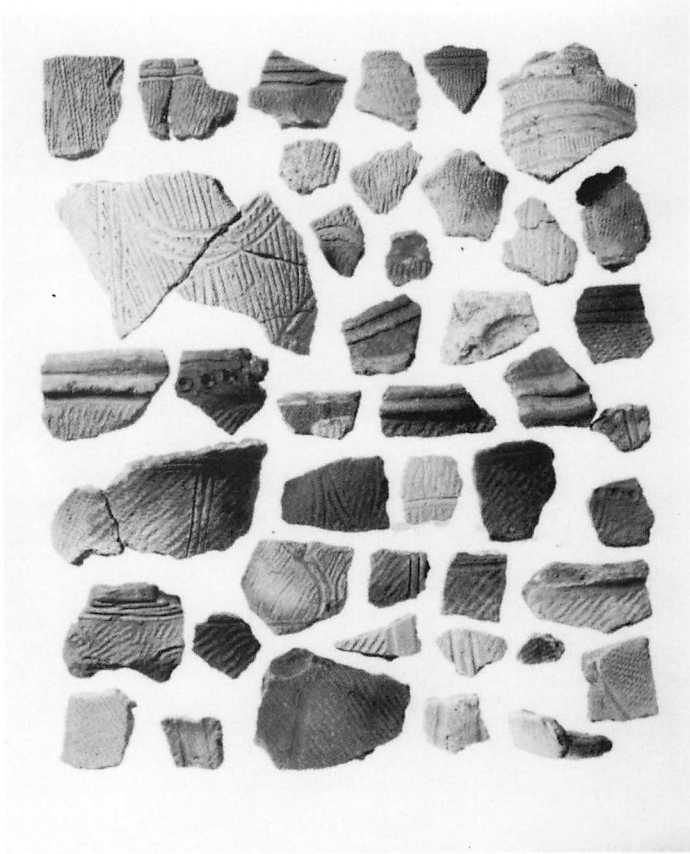


神明後遺跡 7号住居跡出土土器No. 3

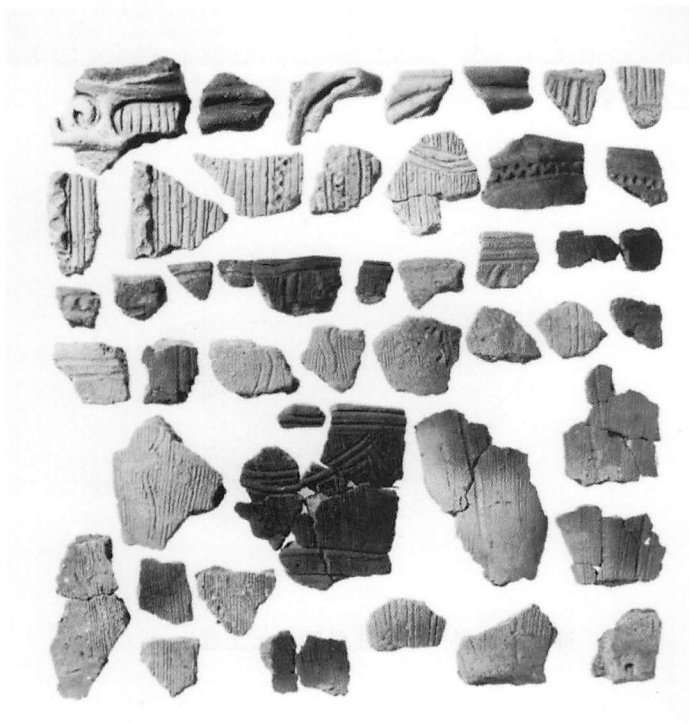
神明後遺跡 7 号住居跡



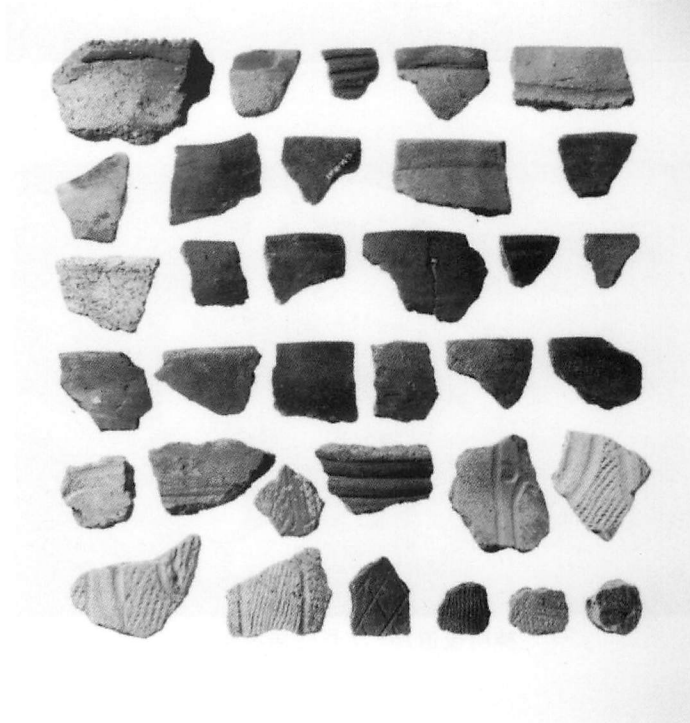
神明後遺跡 7 号住居跡出土土器 (2)



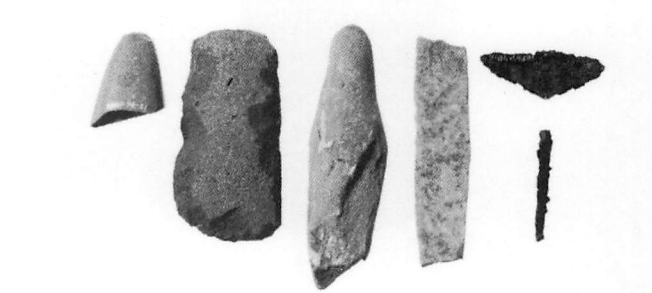
神明後遺跡 7 号住居跡出土土器 (3)



神明後遺跡 7 号住居跡出土土器 (4)



神明後遺跡 7 号住居跡出土土器 (5)



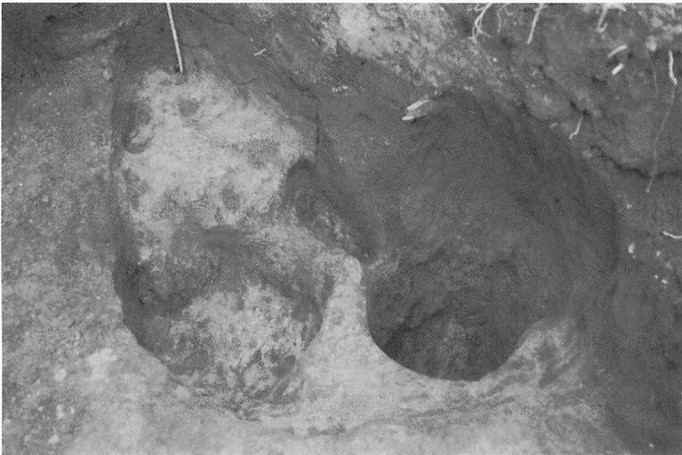
神明後遺跡 7 号住居跡出土石器・石製品・鉄製品



神明後遺跡第9地点 集石



神明後遺跡第9地点 集石・土坑4



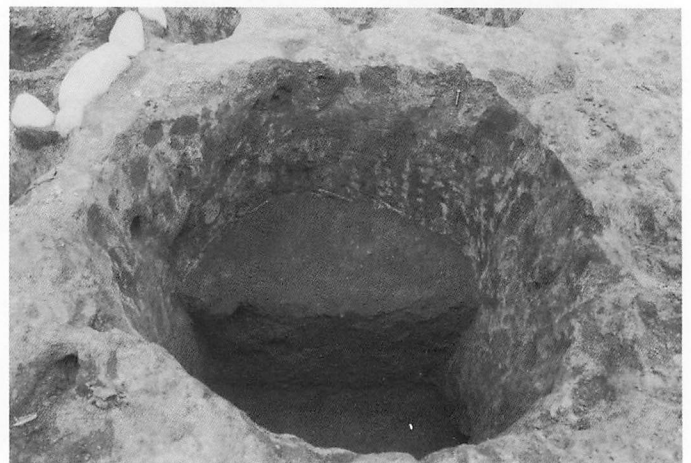
神明後遺跡第9地点 土坑1



神明後遺跡第9地点 土坑2



神明後遺跡第9地点 落とし穴・井戸2



神明後遺跡第9地点 井戸1

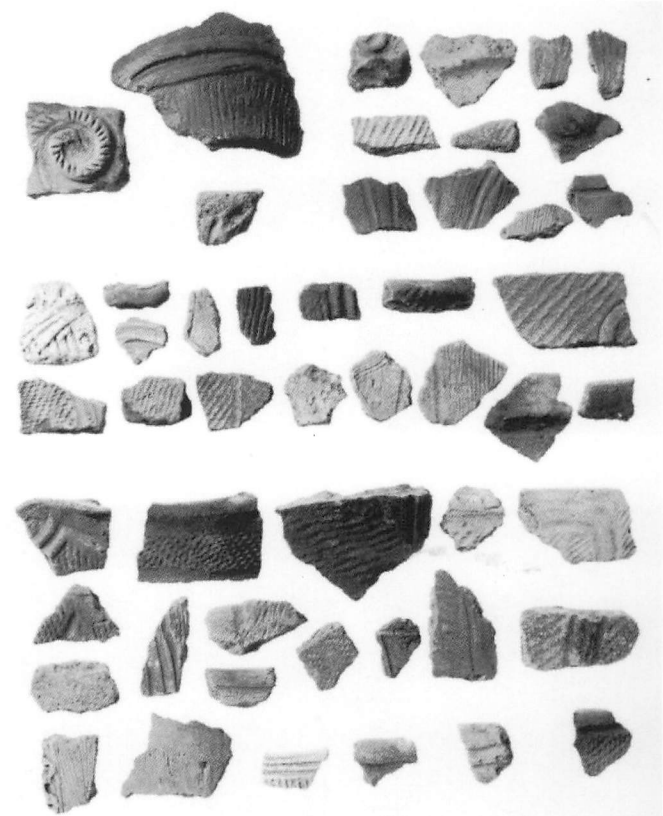
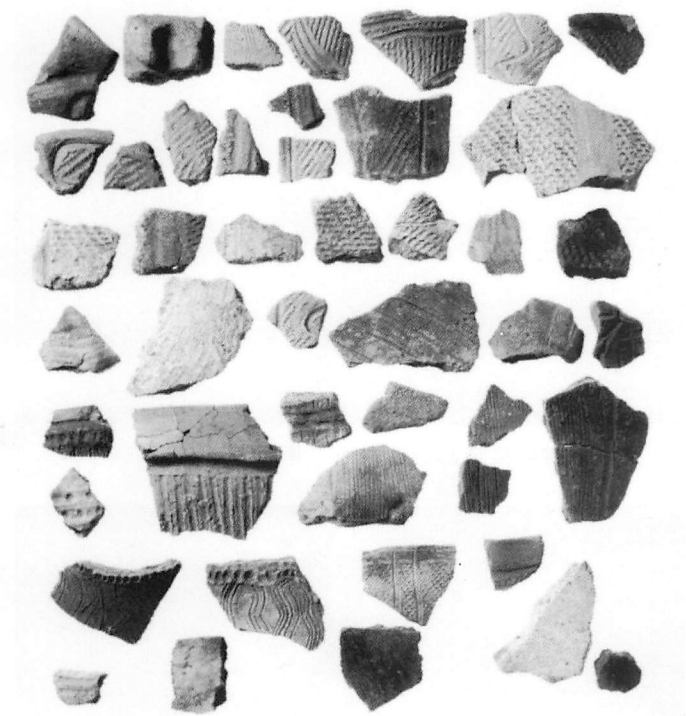


神明後遺跡第9地点 地下室全景



神明後遺跡第9地点 地下室入口

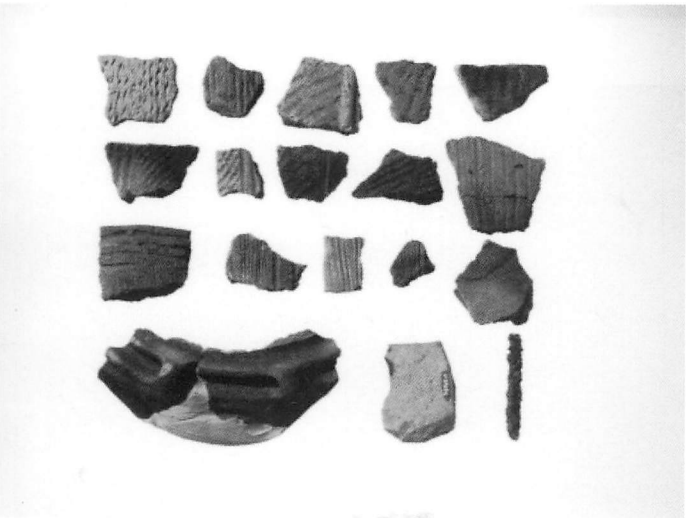
神明後遺跡第9地点



神明後遺跡第9地点 集石出土遺物

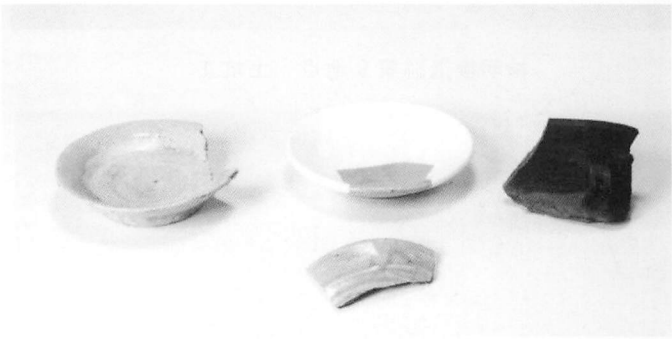


神明後遺跡第9地点 集石・土坑2出土遺物



神明後遺跡第9地点 遺構外出土遺物

神明後遺跡第9地点 土坑1・2・4、Pit21、井戸2出土遺物（2）



神明後遺跡第9地点 井戸2出土遺物